授戒講說

摸象錄

序

歌

世を白雲の西ひがし
今日は野末の石の上
六根一門の位山
衣一領風かろく

昨日は嶺の樹の下や
枯ぶ枕や安からん。
とはに過ぬたる身なればや
何處をさして渡るらん。

× × ×

夕日の影に行きくれて
今宵や花ぞ主人なる。
ねやもに鳥やかへるらん
自然の繩床敷かれたり。
思けゆくまゝにいつしかと
是れ應法の妙服や。
隔てぬ春の月影を
三際地の窓もひらけたり。
無價のあたひや夜をこめて
「應作如是觀」時は今。

明治
41 / 35
交内

跏趺して坐せる彼が身は
花は心をたゝけども
早やしのゝめに近けれど
石磯柳は拂はねば
× × ×
法華讀誦の功つみし
花のねぐらに通ひけん
入定時もうつろへば
初音に彼れは同向せり
いかにきゝけん露は
解もさやかに先づぞ問ふ
× × × ×
雲「今、人界のさま觀れば
人こそ人といふめれぞ
涙にたいよふ浮草の
人の心を卜すれば
名利畢竟何に物ぞ
利は其れ浮雲の富なれや
求めて之をわくらはに

泊然寂靜風に散る
心は花にうつらじな。
苦徑草も蹈らずて
天上天下今も寂。
× × × ×
ひじりの袖の法の香や
鳴く鹿の聲すなり。
出定近き此の刹那
僧「如是畜生」よ「發菩提」
榊つたひに傳ひ來て
雲「如是畜生」は誰が上ぞ。
× × × ×
五濁百濁千萬の
人にまことの人やある。
東漂西泊定めなき
名利の餌を得んがため。
名は是れ實の賓なれや
然るをもとめて止まぬなり。
得れば着執かたくして

愛くこと知らぬ心には
深き林に巢くひても
高き心にくらべなば
河に水のむ偃鼠も
清き心にたゞへなば
心口なのくうらうへに
狡くわざしすぐれゝば
心の奥の美はとまれ
露になまめく女郎花
身に角なしと言ふ勿れ
心の角に突くさまは
身に牙なしと言ふ勿れ
心の牙をとぐさまは
貪欲、意馬に鞭うてば
母その森の深きさへ
心蔑、更に狂ひきて
招けばいよゝ招かれて
燒野のきゝす夜の鶴

「少欲知足」の念もなし。
一枝に過ぎぬ鷦鷯の
いづれか勝り劣れるや。
腹をみたすに過ぎやらぬ
いづれか劣り勝れるや。
言念絶えて實なくて
是れや才子と稱へたる。
紅粉色をあやどりて
這をも佳人とおもふなり。
名を爭ひて悶ぐ時
野牛のそれに勝らずや。
利を爭ひて怒る時
虎狼のそれにすぐれずや。
秩父の山の高きさへ
ひづめにかけて顧みず。
あだなる花の花すゝき
終に愛河の淵に落ち。
子をし思へば子は親を

思ふ五月のほとゝぎす
馴れにし妻を慕ふれども
袖にも觸れぬ棹鹿や
民の膏と血と肉を
こがねのうてな玉の階
秋は錦の山紅葉
置くや朝の玉の露
春は霞の山櫻
消ねぬ吹雪の散る處
錦の裳裾綾の袖
千歳の雪をかさねたる
花招衣玉かづら
はなた紫こがねたす
惠眼開きて觀ずれば
心のすがた身のすがた
人の皮着る『畜生』の
鵜鶏返しに回向せん

× × × ×

道は是れにも劣りけり。
あだなる萩の花妻の
操行は是れぞ勝れたる。
みづから塗りて自らは
美なる家居と思ふ人。
匂ふ千草の綾ありて
此處に伏猪の床を見よ。
飛ぶや胡蝶の羽風にも
此處にねぐらの鳥を見よ。
人は麓とや踏れども
田鶴の毛衣如何にぞや。
乙女はこれをてらへども
孔雀の羽根にいづれぞや。
人はまことの人ならで
『如是異實』の『畜生』や。
行末あはれいでやわれ
『如是畜生』よ『發菩提』。

× × × ×

楮者四雜の長舌の
出る三摩地の窓の戸や
花より花にうち霞む
今日雙眼の曙と
愚染衣朝風の
盡きぬ名殘りの雲の

× × × ×

痛棒いた〳〵身に泌みて
早やはの〳〵と白らみけり。
春の曙やがてこれ
よひのやどりを出で〻行く。
拂ふかげさへ遠霞
跡のみあとに殘りけり。

梵網經に曰く、若、此の戒を受けざる者は名けて外道邪見人の輩となす。畜生と異なることなく、木頭に異ることなし。

遺敎經に曰く、五根は心を其主と爲す、是の故に汝等當に好く心を制すべし、心の畏るべきことは毒蛇惡獸盜賊大火よりも甚し。

あはれ、此の小著の功德を廻して、小桐公の如意輪塔再建の成就を、佛天に至請するものは

吉野山如意輪寺に住める、　井上德定

明治三十九年十月吉祥日、如意輪塔再建工事を督しつゝある餘暇を以て、塔尾陵下幽香樓の南軒にして本書上卷を草し畢る。盲人が象を模するの喩りは、固より甘受する處なりかし、

本書中下兩卷の緒言

◎明治三十五年春三月、おのれ小楠公の如意輪塔を吉野山のわが如意輪寺に再建せまはじき大願を起してよりこのかた。不徳の身にして、これが資金八萬七千圓といふ浄財を大方人より募り集めんとするなる俗務のまつはれるまゝに。うたてや、住めば吉野の花の下かげにしもとゞまり得ずして、旅衣、旅より旅に立ちいでつゝ、南船北馬、昨日も今日もうちさすらふる身とはなりはてたりけり。かゝればおのれは筆の人にはあらで、日ごと〳〵に硯の海に遠ざかり、文の林に隔たゝりて、草枕、いくその春秋を旅路にのみ結び暮らすなるに、おほけなくも此の授戒の講説をものし侍らばやと又なん思ひ立ちつるまゝに、このとし月頃、學び得しこと書いしるしおきしことの、よしなしごとをなん、旅寝の朝な夕なに想ひ浮べつゝ、八重葎しげれる中にして、きりぎりすのつゞらさせてふ鳴く音の聞こゆなる去年の秋にこそ本書の中巻と下巻の前半をやう〳〵書き綴り得たるなりけれ。されば參考として將た引證として見まはしかりし書物どものあんなるに、思ふにまかせぬ旅寝の假の宿なりしかば、何につけても呉れにつけても其の難かりしさまは、曲れる木を稠げる林の中より曳き出すがごときおもひなんなしたりける。あはれ盲人の象を摸するとふを名におはしゝもさることなりかし。

◎本書下巻の後半ばかりは、いとせめてもに、吉野山にてものし侍らばやとおもひはかりしことも、またなんたがひゆきつ。去歳の十二月九日よりふるさとを出で立ちつ、冬の夜も長門の國がり小楠公の幻燈と活動寫眞どもを携へつゝ資金募集の旅をなんすなることゝなりぬされば何にくれと參考書を笈底に納めて先づこそ三田尻につきけれ。それより毛利公爵の招きをうけては同邸にして小楠公の歴史演説をなし或るは長府なる古都の浦にいでゝは、神功皇后の干珠滿珠の沖つ島を見つゝ、

大空の月はさながらそのかみの
みち珠なれやことの浦なみ

さかにても又衰ふる世のさまを
ひくやみちひの琴の浦風

なぞ歌ふひま〳〵に、大乘寺にて筆とりそめて下巻後半の原稿を少しばかりものしたりける。旅ながら春にあふちの里なる專念寺にて四十一年の元旦を迎へ、行きゆきて二月の初つかたに、下の關西谷寺になんつきたりける。こゝの樓上より見渡せば硯の海はもじのさとの間にさゞなみを湛へ、筆立山は雲のひまにはの見にて、壇の浦わより眞帆片帆の往きさるさのさまこそ實にも心ゆくながめなりけり。さてなんこの硯の海にすみすり、この筆立山の筆をとりて、やう〳〵に下巻の全部を脱稿したりける。

◎鍛、はぬれども斗をいでず、蚊虻、そべども階序を越えずとこそ聞き侍れば、おのれが

如き鴛鴦、いかでか千里の塗にや騁せ得べけん。おのれが如き燕雀、いかにしてか六翮の用をや奮ひ得ん。盲象錄の上中下三卷は、眞に鍛のすさび蚊虻のわざならくのみ。

明治四十一年二月十二日

長門國豐浦郡室津阿彌陀院に
錫を留めて、この緒言をしるし終りぬ。

井上德定

授戒講說

摸象錄 上卷

目次

第一 開導
贊題 序說
◎個人の受戒は社會國家の爲めなる所以◎宗文帝の下問と何尙之の奉答◎後桃園天皇と戒法
◎曾子の格言◎念佛と持戒との關係◎念佛は刀劍持戒は鞘なり◎宗々の穴と本願誇の穴◎念佛獨立の眞意義◎兩面的事物の觀察
制教化教
◎制教化教の意義◎服藥と靠養生の喩◎念佛は蒸汽船持戒は鐵の欄干◎本願を賴む者は又大に罪を懼るべし◎物の兩面を心得て克く中道を保持すべし◎山に對する樂觀の歌◎山に對する悲觀の歌◎山に對する樂觀悲觀の兩面を超越したる中道の歌◎大師の御法語と中道の理致
止善行善
◎止善行善の意義◎肯定否定と晝夜の喩◎善導大師の法語
通規別規
◎通規別規の意義◎通規は幹線鐵道別規は支線鐵道◎地面の通規肥料の別規◎希臘の神話

抑止攝取

◎抑止攝取の意義◎乳兒に對する慈母の抑止と攝取◎破戒往生人と其種別◎破戒往生の人◎紅さいたの名句◎哲人蘇氏の言と道德の實行難◎鰒汁やの名句と凡夫の無分別◎良心の苛責と隨犯隨懺◎破戒往生の人◎放逸無慚の人支考の俳句◎念佛と持戒との一致點◎藕益大師の語と大原問答の一節

第二　開導

贊題本論

總說

◎宇宙の大法則と戒法◎物質と物力の向上開發◎精神の向上的開發◎織田信長の殘忍◎良心の苛責と感情上智力上の判斷◎先天的良心と佛性◎宋明教大師の垂示◎備考一則

總じて戒德を示す

◎當成の佛といふ意義◎當成の佛と當成の畜生◎當成の佛と衆生心念の相形◎不具の大將と家康の名言◎持戒人の心念の相貌◎破戒罪人の心念の相貌◎姿は轉すべからず心は轉し得らるべし

別して六義の戒德を示す

◎戒德の六義◎第一戒德尊勝の德◎小乘戒と大乘戒との比較◎小戒は螢火大戒は太陽◎天文學上より見たる太陽の大さ◎小戒は牛跡所溜の水大戒は大海所有の水◎有戒と無戒との得失及び顯戒論の問答◎立憲國と野蠻國

◎第二授受因由の德◎歷史的戒脈の傳統◎第三萬機普益の德◎念佛の萬機普益と圓戒の萬機普益◎圓戒易行の所以◎了譽上人の所謂禁忌戒と服藥戒◎圓戒の萬機に通ずる理由の細說◎自心所具の理智悲の自覺◎理智悲と三聚淨戒◎紫式部の歌◎品性と自覺の關係◎自覺したる千松の品性

◎第四諸佛本懷の德◎左足は雪駄の孝子◎心に契ひし時の快味◎契當したる佛意の快味◎太閤秀吉に湯茶をすゝめし石田三成◎佛意に契合したる德分

◎第五妙因種子の德◎正了緣の三因と發火の喩◎觀徹上人の懇示◎菅公の歌と伊勢貞昌◎佛陀守護の有無と行者の悲喜◎熊谷の歌と成佛の必然的理致◎家康に對する成瀨正成の精忠

◎第六全分自在の德◎瓔珞經の說相◎分受戒と漸進主義◎慈恩大師の語◎金屬の比熱と水の比熱◎漸進主義の引例としての安松金右衞門の鑿渠工事◎圓戒に分受を許す所以の結歸

第三　歸

贊題　一體三寶

◎山上憶良の歌と皇后宮の御歌◎錦城の所謂三寶◎珠寶と武德の臣◎三種の神寶と其の內容◎佛家の重寶◎三歸◎戒山北丘の言◎佛教に於ける本復の說◎儒教に於ける本復の說◎林子

平の父兄訓◎本心より遠ざかれる社會の狀態◎本心に復る意義と還愚痴の說◎夢想國師の歌と禪家の大悟◎宇宙を支ふる眞理のポームチと基教のアーメン◎遠心力と吸心力の依合◎加藤清正の愛猿論語を讀む

佛　寶

◎佛寶の解說◎心性本來の面目◎不增不減と空間論◎常住不變の心性と夢想國師の歌◎心性の靈動不變にして變現す◎淨土指歸抄の一節◎鏡面の妙用◎覺者の妙境◎道元禪師の歌◎天衣禪師の文◎凡夫の迷執◎二世皇帝と中烝相趙高◎歸依佛竟の眞意◎備考語學上より見たるさとりの意義◎往生の意義

法　寶

◎法寶の解說◎任持自性◎自性違戾の結果、中菁の醜閻門の穢◎畜類と心性の法則◎事實文編の一記事◎軌生物解◎溪聲と山色、菫の花蓬の宿◎ニュートンの引力發見と其の經路◎スアエンの輕氣球發明と其の徑路◎ガリレオの時間測度◎ワットの蒸汽機關◎乾坤は絕妙の詩◎佛陀の發明◎歸依法竟の眞意

僧　寶

◎僧寶の解說◎淸少納言の僧侶觀と慈鎭和尙の歌◎和衷協同◎和衷協同の立脚地◎文屋康秀と小野小町◎調和の妙趣◎千利休の活手段◎人類の調和◎天體の調和◎最終の目的たる平和◎迷へる社會の現狀◎歸依僧竟の眞意

第　四　懺　悔

贊　題　懺　悔

◎社會の外面◎社會の內面◎如來の徹見◎孟子の語◎司馬溫公と時賴の歌◎向上の憧憬と罪惡の人◎セントポーロの言◎罪惡の影と其の歌◎基督の宣言と心地觀經◎戒を容るゝ法器◎妙樂大師の語◎懺悔の三種類◎發露懺悔と罪狀の自首◎行雲樓遺稿に見ゆる懺悔の美談◎罪の漸滅と頓滅◎備考、涅槃經の文、四十二章經の文◎懺悔の意義と其の細說

第　五　發　心

贊　題　發　心

◎發心◎心戒相應と演劇の喩◎四弘誓願と三聚淨戒◎三聚淨戒と三心との關係◎菩提心願と菩提心行◎聖道門の發菩提心と淨土門の發菩提心の異點◎安樂集の一節◎自立の必要◎世尊の體力回復◎往生淨土の目的と自立◎備考、布薩式の文、

第　六　開　遮

◎開遮の概要

授戒講說 摸象錄 上卷目次 終

授戒講說

摸象錄 中卷

目次

第七 正授戒

三聚戒 贊題

◎三聚淨戒の出據◎三種の三聚淨戒◎第一種顯了門の三聚◎第二種斷惡門の三聚◎第三種戒具門の三聚◎聚の義◎第一攝律儀戒◎淮南子の語と向上の順路◎攝律儀戒の護持の心態◎出離の前兆◎法悅の人法喜の身◎本具の德相と雲上の月◎天桂禪師と寒山拾得の贊歌◎攝律義戒と至誠心◎楠正成の遺訓狀◎至誠を遠ざかる人◎至誠に合する人◎第二攝善法戒◎荀子の語と向上の一轉進◎攝善法戒の護持の心態◎先づ少善根より實行せよ◎二宮尊德の語訓と大事小事◎伊藤東涯の語訓と小善小惡◎佛教と小惡◎佛教と家庭社會の接觸◎現在を淸潔にせよ◎學者の佛教に對する謬見◎鳳凰、物徂徠の謬見を笑ふ◎道は邇きにあり◎夢想國師の心の歌と或人の狂歌◎僞りても賢を學べよ◎攝善法戒と深心◎忍許と澄淨◎英語に於ける『信』と深心との對照◎信の和訓◎第三攝衆生戒◎目的は高大なるを好しとす◎古語◎大師の語◎秀吉の歌の改削◎目的は高くあれ、實行は卑近より始めよ◎生又戒の前後に於ける心情の變化◎未授戒前の心情◎受戒以後の心情◎善變善化の功能と武田信玄の

自像◎三聚戒の結論

第八　戒相

第一　殺戒（戒題）

制意

◎第一制意◎生々の理は宇宙自然の大法則なる所以を示す◎萬有の活動と生命◎植物と生々の目的◎動物と生々の目的◎人類と生々の目的◎生命と食人◎橘曙覽の述懷歌◎生命の貴重なる所以◎殉死と未練◎風雅集の歌と武士の生命◎生々は自然の大法則◎建設の爲あの破壞◎化學上の燃燒作用と腐廢作用◎宇宙生々の理と殺戒◎死の痛苦◎父子相迎の文◎第二制意◎人類は社會的動物◎利害の共通と同情◎宇宙は熱き同情を持てり◎植物上の同情◎空氣上の同情◎礦物界の働力の平均◎生物界の治愈の働作◎大塩中齋の語◎中齋の平等觀◎彌陀大悲の靈泉◎中齋の同情的大悲劇◎大內義隆の夫人貞子と同情の歌◎同情と虫聲◎今上陛下の御仁慈と中宮祠の鹿◎陛下の御聖德と禮記◎同情は宇宙自然の大法則◎同情の理と殺生戒◎藏疏の三理由◎戒の次第

文意

◎文意◎若佛子の解◎自殺の解◎自殺の種類◎自殺に關する動氣の種別◎惡心自殺◎厭世自殺◎藤村操と人生不可解◎村上博士の處世觀◎智者の學問と愚人の學問◎行路難歌◎自己の一身と社會國家の關連◎國家の一員と柱木の喩◎一身は一種の公有物◎濟生の自殺◎丁汝昌の自殺◎爲道の自殺◎武田勝賴夫人の自殺◎袈裟御前の捨身◎教人殺の解◎其の種別◎惡意の教他殺◎長曾我部盛親の教人殺◎賴朝の教人殺◎昌俊の夜襲◎方便殺の解◎讃嘆殺の解◎惡意の讃嘆殺◎善意の讃嘆殺◎見作隨喜の解◎信長の首實檢◎家康の首實檢◎呪殺の解◎因緣法業の解◎五支と四支の開合◎煩惱と殺因◎信長に對する光秀の殺因◎信長に對する光秀の殺法殺業◎一切有命者の解◎三品の衆生◎下品の衆生と昆虫學上の益虫◎殺虫に關す迦蒙の說◎三學の戒と隨分の戒◎舊教と肉食◎佛教と菜食◎太田錦城の菜食論◎律僧の二食制とエヂソン博士の二食◎蘇東坡の三養◎死情なる肉食者◎古聖の粗食說◎佛事禁肉◎不得故殺の解◎故殺と誤殺◎誤殺と死記心◎正法念經の五事◎死殺罪說◎醫家の投藥殺◎死記心の誤殺と有罪死罪◎常住慈悲心の解◎委心快意の解◎波羅夷の解

拾遺

◎佛戒は活殺自由の妙を極む◎普通條理と特別條理◎司馬法の格言と智旭の說◎殺戒開門と古歌◎日露戰役と殺戒◎橫槊吟の一節◎殺生戒に對する誤解◎多田滿仲公授戒場裡の誤解者◎一殺多生の說と瑜伽論◎一殺多生說と國家の刑罰權◎殺生の開門と實行者の種別◎一殺多生と害虫驅除◎濟生の殺生◎孝僧の魚獵と白河院の感賞◎生產上の殺生◎開門に於ける理殺

◎德本上人の歌◎文珠釋迦を殺す◎佛來三十棒◎王陽明と心中の賊

第　二　　殺生の果報

◎崇德院の御製◎華嚴經所說の殺生の果報◎智度論所說の殺生の果報◎心相篇の所論◎林友幸子の長命と不殺の善果◎信長の短命と殺生の等流果

第　三　　不殺と死刑廢止

◎大高源吾と其句◎刑の元意と不殺◎死刑は蠻刑◎國民道德と死刑の廢止◎死刑廢止と國家學上の學說◎國家本位と强者の權利◎國家に刑罰權の存する理由◎時賴の和歌◎罪は惡むべく人は惡むべからざる理由◎不殺は宇宙の大理にして刑の元意◎楠公の指揮刀と不殺◎武の字の解剖と活人劍◎小楠公と日本赤十字社◎武田信玄の誓と不殺の仁慈◎不殺と家康の改心

第　二　　偷盜戒

制　意

◎第一制意◎人の欲望◎金欲と豐廣の辭世歌◎借金の川柳、及風鈴の古歌◎自業自得と知足◎蘇東坡居士の三養◎萬有は知足の姿不盜の相◎性不偷盜と分業法◎盜心の起らぬ秘訣◎エマーソンの語と富者の盜◎守分知足と水戸の武公◎清獻公の座右の銘と知足◎秀吉と淺野彈正の問答◎守分知足と托事觀◎水戸烈公の托事觀◎上を見なの歌◎戰國の世と實朝の歌◎泰平の世と賢侯の歌◎人としての氣骨◎詩經の句と硬骨の士◎不盜と君子◎不盜と人格◎李太伯の人格◎右辨眞觀の人格◎紀の貫之の女の人格◎名妓高尾の人格◎西鄕南洲の遺訓◎天地の實相と不盜

◎第二制意◎守分知足と運命說◎偷盜の眞意義◎偷盜と科學上の發見◎活働的の守分知足◎引發後々の道理と持淨前々◎備考、白川樂翁公の壁書

文　意

◎自盜教人盜の解◎方便盜の解◎偷盜戒と公德私德問題◎座席の偷盜◎主婦の密盜◎時間の偷盜◎職務の偷盜◎身體の偷盜◎遺產の偷盜◎祖先の祭事と偷盜戒の關係◎錦城先生の祭事論◎鬼神物と祭事の費用◎今上陛下の御孝道◎公私兩德の涵養と北條時賴の歌◎附言、呪盜の解◎因緣法業の解◎偷盜と劫盜との區別◎不與取の四句分別◎一切財物の解◎所有主物件の種別◎天有物と私有物◎三寶物◎三寶物の互用◎三寶物互用の罪果と唐の啓福寺の和尙◎當分互用◎屬人物◎畜生物◎鬼神物◎劫賊物◎劫賊物と四種の場合◎多論の說◎俳人の捨想と盜人◎文學上の暗合と剽竊◎歌盜人◎常助の解◎善因の有无と施不施の區別◎熊阪長範の發心

拾　　遺

第　一　　開　遮

◎天授の利源開發と大盜◎コロボンスと大盜◎慈悲の大盜◎家光將軍と氏長の諫言◎菩提の

大盜◎曾呂利新左衛門と極樂の大盜

第二　不盜と无我

◎不盜の修養◎不盜の修養と无我◎不盜の修養と野坡

第三　偷盜の果報

◎天道と因果律◎武田信玄と偷盜の果報◎偷盜の三果

第三　婬戒

制意

◎第一制意◎宇宙の目的と生殖法◎女性の尊さ所以◎正當の生殖法と不正當の生殖法◎動物界の生殖法◎階級の相異と善惡の形式の相異◎婬戒の目的

◎第二制意◎欲の兩面◎善的生殖欲と自然の妙理◎梧窓漫筆の語◎生物學上の一夫一婦◎獸的生殖欲と其の惡結果

◎第三制意◎一夫一婦の軌道と人類の獸欲◎元祿時代の婬風◎假面の品行方正◎大經の金句と兼好の語◎西洋婦人の處女時代と妻君時代◎千代の俳句と處女の品行◎孟子の語と佛語

文意

◎南山の垂誡◎自婬の解◎教人婬に就て解釋の異同◎淸濁并せ用ゐよ◎廢娼論と公娼◎羅馬時代の世風◎澤庵の辻君の贊◎一切女人の解◎人情の深秘と梧窓漫筆◎不得故

婬の解◎婬因等の解◎婬心の二種類◎畜生女の解◎婬境の十種◎天部及び幽鬼を婬境とする例◎親を婬境とする例◎姉妹を婬境とする例◎非道の解◎男色と正法念經◎史上に現はれたる男色◎瑜伽論の所說と近世生理學上の房事論◎要解の所說と監督者の存する婦人を境界とする場合◎六親の解

拾遺

第一　開遮

◎遮門の理由◎殺仁の句と徒然草に於ける美人觀◎色欲怖畏の理由◎錦城の說◎僧祇律の語◎古迹記の所說◎苦にして樂に似たる相◎味少くして災多き相◎不淨にして淨に似たる相◎開門の理由◎天台止觀の說◎瑜伽論の說

第二　正婬邪婬

◎正婬と道德上の理由◎皇后陛下の御淑德◎正婬と生理上の理由◎律文に於ける二根必要論◎婬戒に於ける守分知足◎姦通罪◎枚乘の語

第四　妄語戒

制意

◎第一制意◎法性と眞實語◎僞りを言はぬ誠と僞りの无き誠の大小◎國語學上の誠の字義◎日本語の誠と英語のシンセリティーとの對照◎誠と事實◎西鄕南洲の語◎梅園叢書の誠の說◎

陰の勤めと北條早雲◎蘆伯玉の誠意◎北條時頼の歌
◎第二制意◎言行一致の人◎論語學而編の語◎經驗上の信用と未經驗上の信用◎衆生が彌陀に對する信任◎德本行者の信仰◎欲望と妄語◎齊の雛忌の三問◎奸商の虚僞◎智論の語

文意
◎自妄語の解◎三業の妄語◎口業の妄語と子産◎身妄語と晏子◎心妄語と板倉重宗◎揚震の四知◎二種の妄語◎大妄語◎小妄語◎方便妄語の解◎因緣法業の解◎正語正見の解◎伊井直孝の正語正見

拾意

第一開遮
◎瑜伽論の開門の妄語◎コロンボスと開門の妄語◎他人に對する佐藤嗣信の開門の身業妄語◎自己に對する齋藤實盛の身業の妄語◎釋迦は大妄語人なり◎釋東萊の歌◎時機活殺の妄語◎尾生と實語

第二　妄語の果報

◎惡語は消に難し◎藏蹊の說と合註の說の異點◎不滅の言語◎无形の物と其反應力◎空氣の振動と音聲◎妄語の果報

授戒講說　摸象錄　中卷目次　終

摸象錄　下卷

目次

第五　酤酒戒

制意

◎第一制意◎酤酒戒と飲酒戒の區別◎酤酒戒受者の機類と隨分戒◎酒は起罪の因緣なる理由◎范魯公の詩と酒の異名◎酒の發明家◎梧窓漫筆の酒論◎竹林の七賢人蜀山人の狂歌◎節酒と狂歌◎酒の字の解と古迹記◎人類天性の純白◎楊氏墨氏の歎聲と高辨上人の歌◎歷緣對境と酒氣◎无量壽經の金言◎漢言の語
◎第二制意◎闇黑生活と和泉式部の歌◎飲酒家と闇黑生活◎飲酒家の品性の下劣◎酒の十過◎蘆庵の酒の歌

文意

◎酤酒の解◎教人酤酒の解◎因緣法業の解◎一切酒の解◎起罪因緣の解と徒然草の一節◎明達慧の解と及び其引例

拾遺

第一開遮

◎遮門の理由と金迦陀比丘の事◎同じく毘婆娑論の說◎開門の理由と分別功德論の說◎先德五論の批評◎酒と國家經濟の關係◎開遮二門の眞意

第二　酤酒の果報

◎分別善惡所起經の說

第六　說四衆過戒

制意

◎第一制意◎本戒の大要◎藏疏の說に人間の長所短所◎小松內府重盛の短所と駿臺の批評◎短所の剔抉◎龍舒の淨土文◎他人の批評と自己の品性◎古事談に於ける道綱の惡言◎聖人の過失と惡人の美德◎藤原時平の讒言と菅公◎智論に於ける勝意比丘◎不思議光菩薩經に於ける饒財菩薩◎十論經と破戒の比丘

文意

◎罪過の解并に說◎比丘等の文字の解◎因緣法業の解◎罪過を說く二種の働氣◎一、陷沒心◎二、治罰心◎罪の構成法◎外道惡人の解◎非法非律の解

拾遺

第一　開遮

◎樂殺の言行と開遮二門◎開門の理由◎薩婆多論の說◎諫言の種類と藤房卿◎正見の諫言と

第七　自讚毀他戒

制意

◎第一制意◎本戒の大要◎古迹記の制意◎慢心と謙德◎毀譽超絕の人◎毀譽圈內の人◎勝負と毀譽◎足利弘訓の教訓◎東坡居士の日喩◎今の學者と葉公の龍◎非を飾る學門と明智光秀の偈文◎光秀の高慢と唐崎の松の歌◎彼れが愛宕社頭の口吟◎第二制意◎謙德涵養の方法◎因果律と屈伸感應◎屈伸と易經屈伸の實例◎韓信を詠せし歌◎繼木の俳句◎雅親卿の歌◎大伸と藤原道長◎大伸と秀吉◎大伸と淸盛◎常伸なく常屈なし◎板倉重矩の屈伸◎本莊宗資の屈伸◎水戶黃門の格言と芭蕉の名句◎還愚痴と屈伸感應

文意

◎自讚毀他の解と其の實例◎因緣法業の解◎惡事自向の解◎菩薩の宏量と最明寺の歌◎惡事自向の修養に就て二箇の用意◎第一用意◎西行法師の歌と其の修養◎第二の用意◎我見と平等觀◎平等觀と親の慈悲◎凡夫と小菩薩行

拾遺

第一　開遮

◎以聲止聲◎開遮二門に於ける吾聲の同異◎釋尊の自讚毀他◎彌陀の自讚毀他◎開門の自讚

毀他の人となれ◎白隱禪師の毀他

第八　慳惜加毀戒

制意

◎第一制意◎前戒と當戒との異點◎人は先天的に相應の富者なり施者なり◎優婆塞戒經の說

◎被施者の心情◎能施者の心態◎因果經の說◎慳惜者に對する垂誡

◎第二制意◎施者の心得◎時賴の教訓歌◎十全の堪忍と家康の手簡◎善忍と惡忍の區別◎節約の事例

文意

◎自慳教人慳の解◎貪と慳との比較◎貪の字解◎慳の字解◎因緣法業の解◎一切給與の解◎惡心瞋心等の解

拾遺

開遮

◎黑田高孝の美德◎開門の施與◎利益交換の施與◎分別業報經の說◎優婆塞戒經の說◎伊達政宗に對する伊非直孝の行爲◎遮門に屬する不可施と寶積經の說

第九　瞋心不受悔戒

制意

◎第一制意◎本戒の大要◎瞋恚の出發點◎心に任せぬことを歌ひし歌の數々◎後白河法皇と闕欽世界◎韓詩外傳の句◎闕欽世界の世相◎梧窓漫筆に於ける瞋恚の說◎瞋恚の歌と優婆塞戒經の說◎瞋恚を退治する修養法◎白川樂翁公の譬書の一節◎唐の太宗の語◎世相は自業の所感◎小山有難翁の樂天觀

◎第二制意◎柳の教訓◎堪忍の修養◎馬琴の堪忍の箴◎比丘尼女人經の說◎時賴の教訓歌◎藤原行成の忍容

文意

◎因緣法業の解◎非衆生云云の解◎當戒結犯の異說

拾遺

開遮

◎開門の要旨◎善的働氣と其發憤◎良遲法師の發憤◎蘇秦の發憤◎程伊川の語◎豐太閤の發憤

第十　傍三寶戒

制意

◎第一制意◎古迹記の制意◎邪見の解◎支那日本に於ける邪見論者◎支那日本に於ける正見論者◎俳句と見解の異點◎ダーレスの見解と老婆の見解◎老子の語◎藤樹の誘佛◎井上博士

の評論◎藤樹の偏狹◎正見と邪見の分水嶺◎大含和尚の艮背敵應
◎第二制意◎宿善の有無◎大塔宮の諫言◎安祿山の謀反◎ガリレオの宿善力と眞理
の確信◎大師とガリレオの毅然たる正見◎斷常二見◎斷見の畧解◎斷見の結果◎常見の畧解
◎常見の結果◎斷常二見と佛教の比較◎佛教に於ける有論空論の概圖◎小乘の心境俱有論◎
數論の所立と人格的靈魂◎デカルト所說と无我說◎无我說と道德上の責任者◎善惡者の責任
者と羯磨◎羯磨と物心の關係◎三事生染の說◎天下に新らしき物なし◎電氣の新舊◎進化論
と羯磨說との暗合◎右手の贊成左手の誹謗◎權大乘の心境俱空論◎同じく心有境空論◎實大
乘の緣起論◎一如的實在◎維摩經の文と實在◎主觀と時間の關係◎客觀と時間空間の關係◎
一如的實在は時空の關係を絕す◎緣起論◎摩訶止觀の念佛

文意

◎因緣法業の◎一言傍佛の解◎如三百鉾刺心◎新羅王の惡罵に對する伊企儺の心事◎邪見人
の解◎四種の邪見◎守札に對する佛教の意義◎迷信と盜難除の御守札◎信仰の對象と守札◎
妙立大師の偶像觀◎佛教と方位說と吉日論

拾遺

開遮

◎當戒には開緣なし◎性惡門に於ける事傍と理傍

◎戒體の本據◎戒體の解◎戒體の異名及び其の要旨◎戒體發得の狀況◎小乘戒の戒體と大乘
戒の戒體の異點◎戒體を心的とするか物的とするか將た　又非心物的とするやの異說◎大衆
部の說と有部の說◎成實宗の說と唯識宗の說◎南山の說◎天台大師の說◎止觀に於ける心法
戒體◎戒疏に於ける色法戒體◎戒體訣の說◎明燈章の批判◎心法戒體の本說◎色法戒體の本
說◎妙立上人の訓義◎義山上人の訓義◎法洲上人の批判◎性无作假色の和解◎卽の解說◎二
物相合の卽◎背面相翻の卽◎當體全是の卽◎性の字に就て性の解◎戒體の發得は受戒の事物
に約す◎假色の解◎慈眼房と大師との戒體論

第九　戒壇本尊

◎贊題◎菩薩戒の和尙◎定慧二手印相の解說◎左脇羯磨師◎右脇教授師◎現前の戒師◎現前
の諸寺院◎塔中本尊の說示◎法華寶塔品の意◎二佛密合の无量壽命決定如來◎蓮華臺と西方
極樂◎甘露門と彌陀◎大師の念佛圓戒並持の御法語

第十　念佛戒

事理二戒◎念佛戒の眞意義◎念佛者には退菩提心の无き理由◎念佛者には上品纏の犯戒の
无き理由◎三聚淨戒と佛體との關係◎念佛と戒體還生◎滅罪と尸羅◎淨土十勝論の文◎還愚
痴と戒品の護持◎念佛戒の根據

授戒講說　摸象錄　上卷

吉野山如意輪寺　井上德定述

第一開導

贊題　無量壽經曰、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法、

◎第一に先づ當文を拜讀して、本宗に念佛授戒雙流して形影相隨ふ所以、及び其の教義の起點は『唯除五逆誹謗正法』の八字より流出する條理を述べて、最後に念佛授戒の一致を示すべし。

◎偖て各々には、良緣順熟して、今や此の授戒道場に入り、我が佛祖傳來の圓頓菩薩の金剛寶戒を受けて、愈〻諸佛の御子と成らるゝに至りしことは、小にしては一身の爲め、大にしては社會の爲め、是れほど大慶至極なことは無い、何(な)せならば、宇宙自然の大理として、人間は孤居獨棲して目的を遂けるといふことは、到底得られないので、必ずや社會を成し、國家を成して居る以上は、群居共棲、相互に輔車脣齒の關係を程好く保た無ければ、其目的は達せられないのである、然すれは惡を止めて善を行ひ、持戒清淨の諸佛の御子と成るのは、

個人の授戒は卽ち社會國家の爲めなる所以

宗文帝の下問と何尚之の奉答

獨、一人一己の爲めはかりでなく、廣く人類全體に對して爲めになるのである、支那の昔に、宋の何尚之といふ學者が有たが、或日、文帝の御尋に、國家を治め人民を安んじ、天下を泰平に致すには、何々が一番善き方術であらうぞと言はれた。其時何尚之の答に、百軒の鄕に十人五戒を持て行ふものある時は、十人淳に謹みあり、千軒の邑に百人十善を修めて行ふ者ある時は、百人和して睦まじく相成るに依て、人が能く一善を行ふ時は一惡は去たといふもの、一惡が去れば一刑が止み、一刑が止めば國には自然と萬刑が止むに至る道理である。即ち之れが明君の坐らにして、天下を泰平に致す方術であると奏したら、文帝には非常に叡感せられたとのことである。又我が朝では、後桃園天皇は十善戒を御好みあらせられて、朕、今日始めて君たるの大綱を知ると仰せられたこともある。してみれば、此の度此の尊い戒法を受けらるゝは、實に小にしては一身の爲め、大にしては社會の爲めと相成る次第で、『一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興る』と、曾子が言ひしも此處のことである。

桃園天皇深く十善戒を好み玉ふ

晉子の格言

念佛と持戒との關係

念佛は刀劍持戒は鞘なり

然るに、『念佛には獨立をさせて助をさゝぬなり。助さすとは、智慧をも授戒をも助けにさすことなり』。との大師の御法語もあるに、今は何に故に斯く持戒を勸むるやとの疑が起るであらう。持戒念佛至要錄といふ書物に、斯う答てある。

或人、刀の鞘に甚た念を入れる、傍への人問て云く、合戰の時は刀でするか鞘でするか、答、刀なり、鞘は腰にありて働かず、問、然らは何せ其のやうに鞘に念を入るや、答、刀が大事ゆゑにさやうに念を入れるなり、何にはと善き刀にても、錆でも入るか、刃でもこぼるゝと、刀が役に立たぬなりと。其れがやうに念佛の利劍も、本願誇の錆にても入るか、邪見造惡の刃でもこぼるゝと、名號が役に立たぬなり、凡そ宗々に永沈の穴あり、天台宗に、圓教誇の穴、眞言に性得誇、禪宗に本來誇、我が宗に本願誇、此の穴に落る者は、永劫浮ぶこと能はず。

又念佛の爲に助をさすは佛祖の意なり、往生の爲めに特更らに念佛を不足に思ひて、持戒をもすけにさすは本願の正意にあらず。

とある。洵に面白い善い答へぶりである。まあ物事には、何の樣なことにでも、兩面といふて表裏の兩方面から好く觀なければならぬ。鳥渡した衣服の裏地を買ふにしても、表からも裏からも、好く〳〵吟味して調べた上でなければ、代價を支拂はぬやうなもので、往生極樂の道といふ反物にも、表裏兩面の觀察が必要である。弟子七尺去て、師の影を踏まずといふは、表面の教で、時には又『今日ばかり師には先立つ雪の道』といふ裏面の教へもあるのである。之を佛教では、制教化教の二方面に分ち、或は止惡行善の二種類に說き分け、或は通別規別規と區別を立て、抑止門攝取門との二門に說明したりなどして、色々に此の表裏兩面の觀察がしてあるのである。

宗を皆な穴あり空在すべからず

念佛獨立の眞意義

事物の觀察は表裏兩面よりすべし

制教化教の意義

制教化教　問、選擇集淨教楷模蓮宗要蹊、而彼集中不レ勸二持戒者一何也、答、彼約二化教一、但

服藥と毒發生の喩

念佛は蒸汽船持戒は鐵の欄干

本願を頼む者は又大罪を惡る

物の兩面を心得て克く中道を保持すべし

在レ關二明專念之道一故題レ之言二選擇念佛一不二亦明乎一、若就二制門一以論佛法通軌一則大師中興圓戒復能爲二他策一發持戒、補二敝末運一載在二僧史一（淨宗圓頓菩薩戒誘蒙）とある、文中の制教化教の詞が、即ち是れである。制とは制止と熟語して物を制し止むる方で、病人が毒用心して、藥の外に總て攝生の道に從ひ、病人の不爲めとなる物は、食はぬやう爲さぬやうにと、能く制し止めて用心する毒忌の方面で、是れが戒法といふものである。化とは勸化と熟語して、物を勸めて其の方へ化らするやうにする方で、病人の用ゆる藥のことである。病氣は服藥はかりでも行かぬ、服藥と同時に必ず毒忌みと攝生が必要なので、此の兩方面が具足せねば平癒は六かしい。又喩を換へて示せば、念佛は弘誓の船であるから、恰も彼岸に達する蒸汽船である。生死の大海を渡るには、是非蒸汽船が必要ではあるが、其の蒸汽船には周圍に欄干が鐵で以て拵らへて有て、怪我の拍子に乘客の海へ落ちぬやうにしてあるので、其の鐵の欄干が即ち持戒で、落ちてはならぬと制し止むるのが制教といふのである。故に大原問答にも、『煩惱强盛なるにより嗜酒肉辛を禁せず、貪愛嗔憎をやめざるものは、好んで惡を造くるに似たりと雖、唯これ本性の致す處なり、本願を賴むによりて今更に之をなすことをゆるすにあらず。』と、示された。兎角に。人間はつい極端に走り易いもので、物の兩方面を知て、其の中道を保持つといふことが何うも出來惡くい。例して申せば、山家住るは閑寂で好い、仙境は此處に限ると、山の一方にのみ極端に贊成して他を忘るゝ人がある。下河邊長流の歌に

山に對する業觀の歌

住み憂しと言ひのみやらん山里の
樂しさ告げば人もこそ來れ

と詠じ、夢想國師は、

世を厭ふ我があらましの行末に
いかなる山のかねてまつらん

と詠まれたなどは、先づ山の贊成者の側である、しかし此の人等は極端に山にのみ執着はなされないが、唯其の山家の閑寂なる善い方面を歌はれたのである。然らば山家は何處までも閑寂で仙境で、浮世の外の別世界安樂界で、彼の中將姫の『なか〳〵に山の奥こそ住みよけれ草木は人の善惡を言はねば』とある通りかといふと、又一概に其うとばかりいはれぬ。南朝の宗良親王は

山に對する悲觀の歌

山里を浮世の外の宿ぞとは
住まで思ひし心なりけり

と詠まれたこともあるし。又吉田の兼好は、木曾山中の御坂に庵して居られしに、國守の廳狩に、人あまた具して、山深き庵までも出で來て狩りしられし淺ましさに、

此處も又浮世なりけり餘處ながら
思ひしまゝの山里もがな

と歌ひ捨てゝ、去られたといふことである。這は皆な山家とても眞實の仙境では無い、矢張り淺ましい浮世であると惡い方面を詠まれたものである。してみれば物には、見樣に依て兩方面があるのであるから、何れといふて一方に偏倚ては、中道を失ふて物の眞相を見逃すので、兎角に一方面にのみ思ひ定めてしまふて、偏執したり固執したりすると、中道に離るゝことになる。(尤も正行の念佛一方面に思ひ定むるといふことは、矢張中道の理に契ひつゝ專念專修するので、偏執偏倚とは、筋合ひが違ふ。)其處で、偏執偏倚の念を取り捨てゝ、

山に對する樂觀悲觀の兩面を超越したる中道の歌

世に住むと思ふ心を捨ぬれば
山ならねども身はかくれけり
故郷と定むるかたのなき時は
何處にゆくも家路なりけり

と、中道中庸を悟た夢想國師の此の歌のやうにありたいものである、故に大師は此の念佛往生の道にも。

大師の御法語と中道の理致

罪は十惡五逆も生ると信じて少罪をも犯さじと思ふべし。

と、先づ兩方面、卽ち十惡五逆も往生が出來ると信せよとは。『牛の脊を動す蠅の力哉』とも いふが如き本願の妙力を示されたので、『せきしやうに炭も火宅をのがれけり』と黑業大惡の炭の如き凡夫罪人の身なりとて、心配するに及ばぬとの、一方の御示しである。小罪をも犯さじと思へよとは、彌陀如來は人は惡み給はねども罪は小さをも惡み給ふ故に、小罪だから犯しても善からう、五逆の大罪でさへ救はるゝのであるからなぞゝ、慈悲の强力に馴れ甘へて、造惡犯罪を心配せぬといふ一方に偏倚てはならぬとの御思召で、斯く一方を御示しになつたのである。斯くの如く物の兩方面を能く〳〵心得て、其の中庸中道に契合ふやうにする爲めに、淨土の御法門にも制教化教の兩方面が、形に添へる影のやうになつてあるのである。

止惡行善の意義

止惡行善　百論上云、若行者不レ止レ惡不レ修レ善、是故先除二麁垢一後、染二善法一、譬如二浣一レ衣先去二垢然後可一レ染云云。天台戒疏上云、如二百論一息レ惡不レ作名レ之爲レ止。信受修習名レ之爲レ行。佛教雖レ多、止行收盡云云。とある、文中の止惡修善の詞が卽ち是れである。止とはやめる、又はとゝむるといふので、否定的である消極的である、行とは行ふことであるから、肯定的である積極的である。退て打ち消しやめる側と、進で行ひ爲す側との兩方面である。喩へてみると、『夜』は消極的の側で今の『止』である。『晝』は積極的の側で今の『行』である。『夜』は光明が打ち消され否定せられて、黑暗々何にごとも進で出來ないから、退て仕事を休んで物を止める方面である。『晝』は光明が存在して居て、肯定せられて明光々、何に事でも進で活動をなすべき方面である。斯く『晝夜』といふ兩方面が具備して、始めて『時』といふものが出來てあるので。『晝』たけでは『時』とはいへぬ。『夜』たけでも又其通りであるから、

肯定否定と晝夜の喩

善導大師の法語

通規別規の意義

通規は幹線鐵道

『時』といふ物には、『晝』の形と『夜』の影とが具備してあるのである。而して『時』其の物からいふと、何にも『夜』の一方にのみ偏倚らず、又『晝』の一方にのみ偏執しないで、ちやんと兩方面の中道に住して、時々刻々に、盡未來際まで活動しつゝあるのである。今持戒して罪惡の仕事を休み止むるは、『夜』の方面で、念佛して功德の仕事を行ひ働くは『晝』の方面であるから、授戒は消極的で、念佛は積極的で、授戒と念佛とが卽ち止惡行善と相成るのである。既に『時』から、『夜』と『晝』とばかりに、別物に離し切れないと同じく、往生極樂の道といふ『時』から、授戒は不要だなどゝ、引離すことは到底出來ないことが了解せられたであらう。してみれば、念佛專修の淨土門にも、此の廢惡修善の授戒は、何うしても具備してあるべき筈のもので、善導大師は觀念法門に、欲レ生二淨土一唯須二持戒一と宣べ、或は般舟贊には、欲レ到二安養國一、念佛戒行必須レ廻、戒行專精、諸佛讃、臨終、華座自迎と說かれた。詳しいことは『淨宗圓頓菩薩戒誘蒙』といふ御書物に、祖師方の勸戒の御法語が出してあるから、一度は拜見するが好い。

通規別規

通規別規　制門通軌、急之又急、不レ可二須臾一離也、則凡奉佛輩、無論道俗、皆須二先受一是菩薩大戒也、必矣、（圓戒誘蒙）通軌とは鐵道の幹線のやうなもので、別軌とは其支線のやうなものである。先づ宗祖御降誕の靈場たる作州の誕生寺へ、京都から參詣しやうとすると、幹線たる七條驛から乘て、山陽鐵道の幹線の通規で、岡山驛まで行かねばならぬ。是れから誕生寺參

別規は支線鐵道

地面の通規肥料の別規

希臘の神話

りの者は、中國線の支線鐵道、卽ち別軌に乘りかへて、誕生寺驛へ下車するといふ順序である。京都から金比羅參りする人も、伯耆の大山參りする人も、又誕生寺參りする人も別軌の參詣所は異て居ても、孰れも皆な通軌の幹線鐵道を通行しなければならぬと同じてある、其處で此戒のことを、十方諸佛成道根本、諸大菩薩修行模範と云ふてある。又華嚴經には、如二諸衆生及草木一、一切生長咸依レ地、世及出世諸善根、皆依二最勝尸羅地一、と說てある。是れは通軌の事を、大地に喩へられたので、草木の生長には雨とか露とか肥料とかの別軌に依て生長するとは言ふものゝ、先づ第一には、大地に依らなければ、別軌其物の雨露肥料の依り場が無い譯である。希臘の神典に斯ういふ面白い話がある。昔亞非利加のリビヤといふ所に、アンデーウス Antaeus と名くる巨人がありました。此の人はテルラ(地)とネプチユン(海神)との間に生れたので、軀幹は極めて長大で、力は又非常に強い、角力しては勝た無いことはなく、搭鬪しては人を殺さ無い事はないといふ、豪勇の巨人であつた。其處で。自ら揚言して天下無敵なりと誇り、擊殺したる人々の髑髏を以て、一箇の宏壯なる殿堂を築造して、以て其の父に獻上致しくれんなどゝ、高言を吐いて居たとのことである。此の時英雄ハーキュリース Hercules といふのが、我れ彼奴を退治しくれんと、種々に彼れを殺す法を考へた末に、成程々々彼奴が最大の强力の出づる源は、全く其が母たる大地テルラ Terra に脚底が接して居るから、强い力が出でくるのだ。彼れ一たび其の足が、大地より離れた時には、何等の力もあるべきでは無

いと、大に敵の樣子を看破した英雄ハーキュリースは、遂に巨人アンテウスと搭闘したが、最初に直に彼れが長軀を大地より高く引離し揚げてでさへ、時には梅ヶ谷の腹稽に乘せられて、足が大地を離れるや否や、忽ち土俵の外へ跳ね飛ばされるのである。然すれば立脚地たる大地を離れては、巨人も巨人の力を失ひ、常陸山も又天下の横綱たることが出來無いのである。今も又其通りで、念佛は勿論佛教の諸善萬行も、又此の大地たる尸羅地、即ち戒法の大地を離れては、元來念佛も諸善も、强力を失ふことゝ成るの道理である、故に此の點から申しても、淨土宗にては戒法護持を大に奬勵するのである。

抑止攝取の意義

乳兒に對する慈母の抑止と攝取

抑止門攝取門　是れも前述と大差は無い。一方は抑へ止むる側で、一方は救ひ取る側である、彼の慈母が愛兒を育てるのも、此の抑止と攝取とが相離れない、『噛む乳を叱りながらも齒を數へ』の句の如く。愛兒が母の乳を飲みつゝある時に、折りとしては生ひ初めの齒で思はず乳を噛む時がある。母は痛さをこらへて、噛むなよ噛むなよと叱るは抑止門で、偖て抑さへ止めながらも、其の噛みし齒を惡くしとも思はず、還て憐れ可愛氣の齒なるよと、生ひし數さへ數ふる處が、攝取門であるのである、唯除五逆誹謗正法の八字は、正しく此の乳を噛む愛兒に向ての母の抑止門であるから、是れが根源と成て、淨土宗にて授戒を勸め申すのである。然らば、其の攝取門はといふと、觀經に於て、破戒罪人の往生が、確乎として御說きに成てある、即ち齒の生ひし、數を數へながら、懷さしめ給ふ彌陀慈母の攝取門は、觀經であることは、皆の衆の既に承知の通である。然るに、やゝともすると、人の疑ふのである。元來最後には攝取門にて罪人も破戒も救ひ取るゝとならば、寧ろ抑止門で彼れ是れいひ置くも無用の骨折りではあるまいか、なぞゝ思ふ人があるかも知れぬ。其れであるから是れより少、破戒往生人の事に就て辯じて置きませう。

破戒往生人と其の種別

記主上人の御言葉に、『破戒の人の中に二つあり、一には止惡修善の道理を存じながら、貪瞋に逼られて戒品を破る者あり、二には惡見を起して、他力本願を信ぜん者は、罪惡を恐るべからずと存じて、恣に惡を作る人あり、此二人の中に、後の人は往生すべからず、前の人は往生すべし』と攝取門の中に入るべき衆生の、種類別が御示しになつてある。洵に御尤至極の御定判である。

破戒往生の人

破戒往生の人　是れが前者に當る機類で、往生拾因記に是の人のことを斯う說かれてある、『住(ストヽ)止惡心(ノニ)即是正見(ナリ)雖住(ストヽ)止惡(ニ)被(レテ)煩惱逼(ニラレス)犯(ニ)罪業者(ノナリ)凡夫常也。正見犯(ニシテレンナ)罪常有(ニ)隨犯隨懺之心(ニ)往業速成(ニス)』と、惡は止むべきもの、善は行ふべきものと、其處の道理は充分に心に合點して居りながら、偖て實行の場合になると、所謂無始以來習ひ性と成て居る煩惱の爲めに追ひ使はれて、遂に惡いと知りつゝも、つい〳〵戒品を破ることがあるので、

善を善としても行ひ難く惡を惡としても止め難し

紅さいた口も忘るゝ清水哉

と、或才女が詠せし發句の通りである、口唇に紅をさいた美人も、暑中の旅行に、山下蔭よ

り滾々として湧き出づる眞清水を見附た時には、其の口唇の紅の落つるもうち忘れて清水をつい〳〵杓み飲むといふやうなもので、元來紅の落つるは惡いと知て居ても、然も其處が凡夫じや暑さに耐へかねて、清水を掬ひ飲むに至るのである。希臘の哲學者ソクラーヌスは、『德卽智』なりと言て、人間の惡事を行ふのは、惡の惡たる善の善たる分際を知らないから起るのである、惡いと知て行ふものは無し、善と知て行はないものも無からう、故に道德を行ふには、智慧が必要で、智より德が出てくるから、『德卽智』なりであると說いたけれども、是れは成程、賢人聖人の如き機類なら、先づ左樣であらう、君子は過失を再びせずで、『德卽智』と行くであらうが、凡夫では中々其うは行かない。

鰌汁や鯛もあるのに無分別

と芭蕉が喝破したけれど、凡夫は其の無分別がどうしても止められないので、惡いこと毒なものと知りつゝ、何うしても止められないと云ふ處が、所謂煩惱に逼まられて、罪業を犯すに至る點なので、致し方がない譯である。が併し此の機類の人には、既に己に惡いと合點が行てあるのであるから、常平生に隨犯隨懺の心があつて、良心の苛責に自から遇ふて、自から悔やんで居る人である。其故に一旦は犯罪しても、又後には本來の善心に立ち歸るから、自然と念々稱名常懺悔の功に依て、往業は速に成就するのである。是等が卽ち破戒往生人といふので、此處に立ち入らしめて、良心の苛責のあるやうにするには、是非とも抑止門の授

鰌汁や鯛の名句と凡夫の無分別

良心の苛責と隨犯隨懺

戒が必要と相成る譯である。玄記三云『凡修二善法一悉備二廢惡一若住二善心一者、惡心不レ起故、修善人猶是凡夫貪瞋亦起、雖レ起更能二本修善心一善惡雖レ雜其中善強終遂二出離一』と御示し遊ばした御文意を能く〳〵拜讀するが好ろしい。

破戒不往生の人

破戒不往生の人　是れが後者に當る機類で、往生拾因記に斯う說かれてある。『邪見犯レ罪全不レ起隨犯隨懺之心一罪業爲滅乎』と、邪見にして犯罪するとは良心の苛責も起らず、懺悔後悔の念も無くして、實に放逸無慚の惡人の謂である。今の世には隨分此の徒が多いのである。正德五年の頃、蕉門の逸物として有名なりし東花坊支考といふは、美濃の人で獅子庵と號した。勢州山田に居る頃、凉菟の勸告により、始めて蕉翁の弟子となつたが、性質至て磊放。まあ惡く云はゞ邪見無慚であつた。著書は十論とか古今抄とか隨分數多あつて俳諧はなか〳〵の名手であるから、蕉翁も其句を許して、靜なること支考に及ばずと云つた位だ。『濯佛や目出たき事に寺まるり』の句は、此の人なのである。偖て人物が斯樣だから、本來佛門に在て僧侶であつても、終に身が持てない處から、老師の元へ衣鉢を還へして、身は還俗の人となつた。其の時の句がいやはや、放逸無慚なものじや。

放逸無慚の人支考の俳句

蓮の葉に小便すればお舍利哉

奇想天外より落つると、譬めそやす人もあらんかなれども、昨日までも今日まで、佛飯に衣食して居た身が、縱令ひ佛門を見限て還俗するとしても、飛ぶ鳥は後を濁さずで、細心の注意

を拂はにやならない處なのであるに、其れに何ぞや、犬の逃げ吠ゆるのやうに、蓮の葉に小便すれば御舍利哉とは、洵に言語道斷、不届きな句だ。是れだから次第に邪見に墮在して、素行治まらざりしを、或人が注告して、君は未來に必ず牛となるだらうと言はれたが其の時の返事が、いやはや又々ひどひ毒舌じや。

牛になる合點じや朝寐夕涼

何んとひどい句では無いか。古人の狂歌に、

朝ねると牛になるぞへこれ坊主
もう〳〵おさよ角の出ぬ間に

いふのがある、此處らから坊主の朝寐するのを戒めたものじやが、實に邪見放逸にして、寸毫も良心の無い人なのである、斯る人は所謂隨犯隨懺ぞころでなく、隨犯隨喜の方であるから、とても本來の修善の心に皈りやうが無い。故に悲い哉、遂に破戒不往生の人と、相成り果つる譯である。君子悔以遷善小人悔以遂惡と一齋先生が言志耋錄に言ひしも道理である。

前來長々と、種々の論點から、淨土宗には念佛と相並べて、授戒を大切に護持さするやうにすること、及び授戒の起點は唯除の八字よりすることの條理を、御話に及んだので、是れより最後に念佛と授戒との一致をば示し申さう。

念佛授戒の一致點、『打ち解けて氷と水の中なをり』と、古人が吟じた通り、念佛授戒と二樣に分けるといふと、氷と水との二物に立ち別れて、各々別物と相成る譯だが、然れど打ち解けて、相互になかめて見れば、念佛の一法にも、又此の諸惡を廢止して衆善を奉行することが具備してある、其處で二法は水となり氷となつて、異種の行法のやうじやが、其の實は同じ濕性の水といふ、一致點がある譯である。其の理由は、支那の藕益大師智旭が、御示しになつて在る、『謂く持戒念佛是一門乃至故一心念佛者必思止惡防非云云』とある。又我が圓光大師が、大原問答の御折りにも、斯う御意あらせられた。

およそ、廢惡修善は、佛教の正意なれども、廢つれども廢てられざる事をいかにせん。息妄修心は、行道の大途なれども、息め息めんとして、而も息まざる事をいかにせん。

唯須く、彌陀の本願を賴むべし、唯他力の名號を稱ふべし、

是則ち、造罪の上の廢惡の法なり、妄心の中の息妄の行なり。佛法修行の中に、是れより易きことあるべからず。

造罪の上の廢惡の法、妄心の中の息妄の行。何んと微妙甚深の御垂示では無からうか。世に又と是れほど、善巧殊妙の御法語が有らうがや。思へは想ふ程、仰げは仰ぐ程、難思不思議

の念佛三昧の妙味が、靈感靈受せられるのである。

第二開導

贅題　梵網經曰、衆生受佛戒、即入諸佛位、位同大覺己、眞是諸佛子。

◎第二に當文を拜讀して、始に人類としての授戒護持は、宇宙自然の大法に依遵するなる所以を辯じて以て戒德總別の細說を試み、後に至て圓頓菩薩戒の名義を示すべし。

(一)宇宙の大法則と戒法、水中の魚類と生れたならば、必ず水のまに〳〵に從ふて、須臾も水より離れるといふことは出來ない。魚類にして水に從ふことを忌み厭ひて、一朝之れから離れやうものならば、忽ち魚としての生存を失ふといふ、大損失を自から招かねばならぬ。空氣中の生存者と生れて居る人や鳥なども、又亦是れと同じであるが、今各々人類としては、宇宙自然の大法則といふ大氣中に生れて居る身分であるから、一時間一秒時の暫時たりとも、人類は此の大法則の空氣からは、分離しては居られ無いので、萬一強ひて之から分離しやうとすれば、卽ち自亡自滅を、先づ覺悟しなければならぬ。

抑も、此の宇宙間は元來不生不滅の物質と物力とが、無始無終に存在してあるので、物質物力は無始と無終との中間、常に恒に活動し、膨脹し、上進し、發達して居るので、幾億萬年の其の昔には、渾沌たりし一體の雲氣が、(空劫より成劫に轉移する時)次第に活動し膨脹し、上進し、發達して、分化開發の結果、遂に今日の萬物を形成したので、或は戞々と聳ゆ

ては高き山嶽となり、或は漫々と流れては、長き廣き江海となり、草木は繁る、魚は泛ぶ、鳥は飛ぶ、人間は發達するといふ有樣である。卽ち『ぼうふらや蚊になるまでに浮き沈み』で消長浮沈榮枯盛衰の變化は、常に絶ゆ間は無いが、其の間には一貫して、物質物力は總べて、進化して居る、上進して居るので、此の進化上進するのが、宇宙自然の大法則となつて居るのである。其の大法則は物質の上ばかりに働くかといふと、なか〳〵然うでない。既に人間其の物が宇宙間の物である以上には、人間の物質的部分の肉體が、より美麗に、より强壯にならんと、進化に勉め上進に骨折つて、滋養分を吸取し、飮食物を消化し、するやうに、晝夜に之をなすと一般に、其の精神的部分の思想の方も、矢張り善の滋養分を吸取しやう、善の飮食物を消化しやうと、自然と欲望の起り來るのは、卽ち此の自然の大法則から、離れ無い證據といふべきである、例を以て申せば、人間には無始以來、業煩惱の宿習的結果として、隨分と下等動物と同樣なる、劣等なる欲心や情欲がある、否時としては、人の心中には此の劣等なる欲望が、善心の部分よりも、强く多くの量を含んである方である。故に人間は退步的のもので、進化的では無いかとも、疑はれるが、なか〳〵然うでない。卽ち、梧窓漫筆に、信長の性質に就て、斯う述べてある。隨分猛烈なる動物の殘忍と、同じ殘忍刻薄な欲望が有たことが解る。『信長の殘忍を見よ、甲斐の惠林寺にては、多く僧俗を燒き殺し、荒木攝津が叛せるを怒て、其人質の二百八十人を誅し、尼が崎に籠りし荒木が家老に見せんとて、其黨

良心の苛責と感情上智力上の判斷

を磔木に乘せ、簑笠を着せて、火にて燒き殺す。苦しくして身を動かすを上總踊と名づけたり。義景義政父子三人の髑髏を、金ダミとして元旦の祝儀に出したり。虎狼の人に化したる者なり、』と。太田錦城は曾れた。洵に信長の斯る行動は少しも虎狼に異らぬ。處が人間には、生れながにして、善惡を見分ける力もあり、下等の欲心よりも高尚なる善心を慕ふ性質もあるので、斯る殘忍なる信長にしても、是を以て善事也と思ふては行はなかつたであらう。惡事なりと承知しながらも、激烈なる憤怒の煩惱に驅られて、遂に行ふたには相違ない。其處で世間には殺人罪を犯した大惡人ですらも、遂に警察署へ自首して出る位である。是りや所謂惡るかつた。すまぬ事をしたわいと、良心の苛責に耐へられず、遂に煩悶苦悶の思慮の末に、斯く自首して、進で刑場の露と消ねやうと、自ら願ふに至たるのである。卽ち死刑の苦と良心苛責の苦と、相ひ比較して、良苛心責の苦痛の激烈なるには、以て死刑の苦の方を忍ふが、より忍びよいと考へたからであらう。斯く良心の苛責の起來るといふが、取も直さず人間の思想上には、惡を去て善に就かうとする、進化的上進的の宇宙の大法則が支配してあるからである。詳しく申せは、人間は自身の心意に於て、或る行爲の或るものを善であると褒め、又は或るものを惡であると擯けて、感情の上より、其の善は自ら嘉みし悅ぶが、惡の方は自ら惡くみ嫌ふことがある。又は智力の判斷で以て、或る行爲は正しいと褒めるが、反對に又或る行爲を不正であると定めて、其の善にして正しいことは、よし行ひ難いことであらうとも、辛棒して强ひて實行しやうとも自ら勵み、又人に向ては奬勵的に之を行はねばならぬなど勸めることもある。又是れは正當であるから、是非とも行はねばならぬと、心意の上の命令がありしにも拘らず、つい其のことが不實行で終てしまふと、さあ其後で悔恨の情が、交も〳〵起り來て、立ても居てもたまらないはどに、精神を痛めることがある。是等は後天的に、人間が得た性質では無くて、實に先天的に持て生れて居るので、世間の教では之を良心といふ名を附けて居るが、我が佛教では卽ち此の一念皆々の精神を指して、佛性とも本具の性德とも申すので、是れが正しく凡夫より一轉して、佛陀の位にまで進化し上進し開發して行く、清い〳〵力と申すものである。其處で宋の明教大師契嵩の御言葉にも、先づ斯うある。

先天的良心の佛性

宋明教大師の垂示

尊さは道より尊きはなく、美は德より美なるはなし。道德の存する處、匹夫と雖窮にあらず、道德の存せざる處、天下の王たりと雖通にあらず、夷齊は古の餓夫なり、而して今其の人を以て之に比すれは人皆喜ぶ。桀紂は昔の君王なり、而して今其人を以て之に比すれは人皆怒る、此故に學者たるもの、道德の身に充たざることを患へて、勢位の己れに在らざることを患へざれ。

とある、卽ち是れ此の餓夫の夷齊を愛して、帝王の桀紂を惡くむといふ、自然の良心が涌起し來るのが、人類として不識不覺の間に宇宙自然の大法則に從ひつゝあるといふ證據である

のじや。然あ斯うして見るといふと、人類と生れた以上には、是非とも良心の命令に従ふて、惡を去て善に就くやう、せねばならぬのである。御經文に、

夫戒者、戒莫背佛（果）性（因）之性、故名戒。

と御示しになつてあるのが、取りも直さず世間でいふ良心の命令に従へよといふのと、少しも異りは無い、故に戒法を護持するのは。魚類が水を愛し、鳥や人やが清き空氣を求むるも一般であると云ふことが、了解出來たであらう。

× × × × × × × × × × × × × × ×

◉備考。左傳に、人心不同如其面と子産の云ひたるは、妙語なれども、人の心の粗處を云へり。人の心に剛柔あり、奢儉あり、明暗あり、勇怯あり、萬品不同なれども、別に一の同然なる處あり。孟子之れを人心之所同然と說き玉へり、至妙の語にて、人の本心の精妙を盡くせり、此を知らんとには千萬人に、一部の通俗三國志を讀ましめんに、曹操仲達を善人と悅ぶ人なし。玄德孔明を惡人と惡な者なし。太平記を讀まんに、千人は千人、萬人は萬人、正成の忠勇を感じ、直義師直の惡行を惡まざるは無し。又夫れまでもなし、賤人の雜劇を觀るもの、大星を忠義の人と思ひ、定九郎父子を惡人と惡む、人心是非の明、亮々然として掩ふべからず。人心同然の說、經言に徵し、今日の人心に驗ありて、確として易ふべからざるなり。』以上は太田錦城の梧窓漫筆後編下に出づる說なり。人心の同然なるは、一切衆生には本具の佛性善惡の性質に、通じて存在する證據で。孟子は之を性善といひ、王陽明は之を良知といひ、西洋倫理には良心といひて、種々、稱呼は各其の教に從て區々なるも、皆な同一佛性に就て、微光を認めて、斯くは佛說と契合するに到りしものである。故に持戒は本具の佛性の通りに從ふてゆくことで、儒教にいふ克己復禮といふ語も、同巧異曲の說明といふてよい。同書に又云く、古學者以心治心と云ふを喝りて、心を以て心を治るは、狂人の狂人を制するとて同じうして能はざることなり。故に聖人の以禮制心と說りと云へり。以禮制心は、僞書の仲虺之誥には出でたれども、是れは妙語にて、樂記には、以道制欲となり、孟子には以禮存心とあり、皆同意にて、禮を以て邪心を制し、禮義を以て邪欲を制することなり。樂記の道の字も、禮を指すなり、存心とは、禮を以て邪欲の惡心を距き制して、仁義の良心を失なはざるやうにすることなり。偖て以禮制心とは、聖經の大教、間然すべきには非ず。去れども邪心邪欲を卑にすれば、身家も滅び、國家も亡ると云ふことを知りて、禮を以て邪心邪欲を制するものは、何にものぞや、是れ己れが心に非ずや、是れも心を以て、治るに非ずして何ぞ。』文中、禮とか道とかいへるも、今語を換へて之を戒に改むるときは、其の意又同じである。卽ち授戒を以て心を制し心を存することになるのである。而して所謂。禮といひ道といひ戒といふも、皆な心を離れての禮でもなく道でもなく將た戒でも無いから。矢張心を以て心を制

するので、本具の佛性を授戒の作法によつて修起して戒體を得して、防非止惡の功能を全うするに至るのである。以上儒家の說を引用して、調劑說話すべし。

心こそ、心迷はす心なれ、
心に心、こゝろ許すな。

× × × × × ×

(二)總じて戒德を示す　先きに贊題に供へた御文相は、正しく戒德を御示しになつたので、其御文意は、各々方が一たび此の佛性の性に從ふて、佛戒を受けらるゝといふと、直に其の時から、諸佛と同等の位に入ることが出來たので、如來は之を稱して、其位記は大覺世尊と同等だから、眞に是れが諸佛の子といふのであるとの、御贊嘆である。然るに各々は、はあ左樣か諸佛と同等になるとは、成程非常に難有い尊いことではあるが、我等は未だ身體が金色にもならず、蓮臺をも踏ます、矢張り本の木阿彌、凡夫の身體で、權兵衞は權兵衞の形で、別段尊くもなつては居ない。お竹はお竹の丸髷姿で、別段に難有くも相成らないのである。さすれば戒法を御授かり申しても、諸佛の位に入た甲斐は、何にも無いに、なぞゝ疑ふ人があるかも知れんが。成程御尤で、如來は是等の區別を、『我は是れ已成の佛、汝は是れ當成の佛なり』と梵網經に御示しに成てあつて、我等凡夫人のうちから、早や當成の佛といはるゝまでになつた處を仰せられたので、何にも授戒早々から、直に已成の佛とはなり得られないので、又其う早く已成の佛となり得べきものでは無い。然らば授戒の行人は、當成の佛といふて、當來には即ち來ん世には、當に佛と成るに確定して居る、尊い身分と相成る處を、御贊嘆遊ばして、斯くまでに仰せられたものである。故に破戒の人や、又獸ふて戒法を受けない人等は、當成の佛といふことの反對に、當成の畜生と確定してある身分だから、是等は眞に是れ畜生の子といふてよいのである。『若不受此戒者、名爲外道邪見人輩畜生無異、木頭無異』とまで、梵網經に御叱り遊ばしてあるのは、即ち此處の譯である。當成の佛陀、當成の畜生まあ此の上下明暗の振分け峠は、正しく授戒と不授戒との、足の踏み出しかた如何に依て分れてくるのである、何んと危險なことではなからうか。

偖て是れから、授戒の人は何故に諸佛の子であるか、何故に當成の如來であるかといふことを、御話申さう。彼の如來樣が、紫磨黃金の御肉體を持て居らせらるゝから、其れで尊いのであるとばかり思ふては、間違である。千福輪相の御足で、蓮華を踏んで御座るから、其れで難有いのであると考へては、誤解である。彼れは畢究內外相應といつて、如來の御心の福智圓滿の御德の表現であるから、外部の美が如何程立派で、三十二相や八十隨形好といふやうな御相好でましますとも、內部に於ける御心に、福智圓滿の御德が無かつたなら、あれは俳優の假裝帝王と少しも相違は無いのである。故に各々には、肉體外部の相好で以て、佛になるのでは無くて、內部の心念の相好で以て、大覺世尊の位に到るのであるから、御經文に

總じて戒德を示す
當成の佛といふ意義
當成の佛と當成の畜生
當成の佛と衆生心念の相形

不具の大將と家康の名言

『諸佛の位に入ると』仰せられたも『汝は是れ當成の佛』と御説きになつたも、皆授戒人の心念の相好に就て仰せられたのであります。又邪見放逸にして、授戒を嫌ふ人を『木頭』とか『畜生』とか宣ひしも、正さか授戒せぬからといふて、人間が俄に材木となつたり、ワンワンと吠ゆる犬になつたりすることは、毛頭ないので是れも、肉體や外相で云はるゝのじやない、大切なのは其の心念の上にあるのである。『常山紀談』といふ本に。

關原の軍に、功ありける諸將の家臣を召さして、東照公御酒を下されし時、福島正則の士、大將福島丹波の跋、關石見は嘯、長尾隼人は顰なりしかば、近習の人々、能くも片輪の集り候とさゝやきけるを聞し召し、汝等年若くとも克く聞け、汝は容儀を尊ぶことよ、よし形は如何にもせよ、斯る軍に功名したる男とはするぞかし。彼の三人は世に勝れたる大剛の者なり。汝等が志、十に二三なりとも彼等に似せしめたらんには善かりなんとぞ仰せられける。

と書いてあるが。誠に流石は家康公の御言葉である。今佛性の性のまに〳〵、戒法を護持すると、形は本の權兵衛お竹じやが、其の心は凡夫の權兵衛でない、普通女人のお竹では無い。卽ち諸佛の子であるから、心念の形は清淨無垢の如來の心相に變化して、佛樣と少しも異りは無いのである。故に佛は『戒を受得するもの皆第一清淨の者と名づく』と仰しやつた。卽ち授戒後の心相は第一の清淨なる者となつたので。不授戒の時は、其の人の心相はまだ清淨では無かつたのであります。茲に一人有て今日より以後、一切生ある物を殺しますまいと、誓て不殺生戒を持つといふと、其の不殺生戒の及ぶ境界は、卽ち上は十方三世恒砂の諸佛、及び諸の菩薩、緣覺、聲聞、諸天、世人、修羅、地獄、餓鬼、畜生、下は蚊虻、蚤虱微細の蠢動、六趣の外、中陰の衆生に至るまでに、滿ち滿つるのであるから從て不殺生、卽ち慈悲の心念が、此の廣大なる廣さと同じ廣さの分量となつて、十方界に滿ち〳〵て何處の果ても極みも、皆な清淨無垢の慈悲の心相となつてしまふのである。何んと其の偏十方界の心相の立派さ、美麗さは、まあ何に喩へて善からうやら、三部經には如來は『是の心卽ち是れ三十二相八十隨形好』と仰せられたから、念佛ばかりの時ではない、此の授戒の時にも、行者心念の不殺の姿は、卽ち三十二相も具足し、八十隨形好も、具備してあるに相違ない。其れ故にこそ、諸佛の位にも、入り大覺にも同じであると、御意なされた、次第である。何んと精神的には、既に已に佛と同じではなからうじや無いか。されば是の點を諸佛の子なりとも云はれたのである。華族の嗣子が生長すれば華族となる佛樣の子たる授戒の人が、生長すれば佛

破戒造罪の人の心念の相貌

姿は轉ずべからず心は轉じ得らるべし

様となるには、元より確定したことだから、『汝是當成之佛』と御賛美されしも、當然の譯では無いか。然るに之に反して、授戒もせずに、放逸無慚の心から、物を何とも思はず、無益の殺生などを恐にするといふと、前述と同じで、物の命を取らうとする境界は、十方界に滿ちて居るから、殺さうとする心も、又其の境界の廣い量と同じ量に廣がる譯だから、心の何處の果ても極みも、皆な無慈悲といふ、濁り汚れに滿ち〳〵てある譯である、即ち其の心の姿こそ、木頭とも畜生とも相成り了てあるので、是れが即ち此の世から、汝は是れ當成の畜生なりと貶せらるゝ身分である。蛙の子は生長して蛙となり、猫の子は發育して猫となる譯で、畜生の子たる不授戒の惡人は勿論生長の曉には、立派な畜生となるに相違が無い。やれやれ何んと恐しい事では無いか。故に資持記に、

由未受前隨心造惡惡偏法界今欲進受飜前惡境并起善心故所發戒因還偏法界所納戒體、又復無邊

と說かれてあるも其の筈である。徒然草といふ書物に、

姿かたちこそ、生れつきたらめ、心は何ぞか賢こきよりかしこきに、移さは移らざらん。

とある通りで、今、百姓の田五作顏を、俄に大臣顏や、紳士顏にしやうといつても、姿や形はいや早や、生れ付いたが最後じや、何んと工夫はしてみても、取り替への六かしい、がし かし心はかりは、即ち何にゝでも移すことが出來る次第であるから、何卒未授戒の人達には

相互に勸め合ふて、菩薩の中間入り、佛樣の位に入るやう致したいものである。

(三)別して六義の戒德を示す、前來既に、授戒の人は、諸佛の嗣子と確定して、人間以上の身分と精神的に進化したことになるといふ戒德を、總じて辯じたのである。是れから六箇條に分ちて、其戒德の廣大なる趣を、御示し申さう。

第一戒德尊勝の德、寶積經に云く、小乘戒如螢火大乘戒如日光と、誠なる哉、小乘の戒法に比べて見れば、其德の大さ小さは、斯くもあるべきである、何に故に小乘の戒法と大乘の戒法とは、斯くも相違があるかといふと、先づ小乘の目的は、自調自度分といふて、自分一己の解脫をのみ希望するのであるから、個人主義である。大乘の目的は、利他の大菩提心を起して、一切の衆生を先きに救濟しやうとするのであるから、利他主義である。斯く根本の主義が異てあるから、戒法に至ても大に相違があるのである。

小乘戒

得戒、小乘得戒の目的は、三界の苦を厭ひて涅槃を得やうとするにあるのであるから、厭苦欣寂が、唯一の目的となつてあるのである。

戒體、小乘の發心得道は、自分一己人の爲めで、而も發心の一生に於て、入聖得果せんとする目的だから、戒體も又一期壽命の盡くると共に、捨て失ふことになるのである。

即ち一期盡壽である。

戒境、　小乘で起す戒法は、何にを目宛として起すかといふと、所對の戒境は僅に一大三千世界だけの境界に向てのみ起す戒法であるから、大乘に比較すると、非常に小さい境界である。

戒相、　二百五十戒であるが、此の中に機嫌遠離戒とて、他人に對する戒もあることはあつても、言はゞ皆自行の爲めの戒ばかりで、利他には關係がないのである。

持戒、　小乘の持戒は、必從佛所制といふので、中には、隨處毘尼とて、其の時處の宜しきに從ふて、適宜の處置をとることも無いが、先づ一般に申すと、開聽と制禁とは、必ず佛制のまに〳〵、寸毫も自分の考で變更することは許されない。設令大利益ある場合でも佛制なれば犯戒は出來ないのである。

犯戒、　身業なり口業なりに、發動した時にのみ、犯戒とするので、意業だけでは、當來の果報は結ば無いから、出離の妨とはならぬといふので、大乘とは大反對である。

次に、大乘戒を示して、小乘戒との異點を、合點して貰らひませう。

大乘戒

得戒、　上求下化で利他主義である。

戒體、　盡未來際で、縱使ひ犯戒しても、失ひ捨てることは無い。

戒境、　無邊法界で、廣大無邊の境界に向て發戒す。

戒相、　三聚淨戒で諸戒の王である。

持戒、　隨機隨緣で、小乘の如き窮屈なことは無い。

犯戒、　開遮持犯活殺自在である。

斯く一應比較したけではあるが、誠に螢火と日光との相違があるのである。日輪の廣大なることは、天文學に依ると、驚くばかりである。卽ち日輪の圓徑は、八十五萬二千五百八十四里もあるので、今假りに鐵道が圓徑に布設してあるとして、是れに一時間三十里を走る快力の汽車で以て、一箇處の停車場もなく、又一回の休息もなしに、夜となく、晝となく、走り通して日輪の球面を一周回しやうとするには、十ヶ年餘を費さねばならぬとのことである。何んと廣大なるものでは無いか。成程其うもある筈で、月は直徑が二千一百五十三里であるが、此の月世界を四十九箇集めて、塊めた大さが、我が地球の大さといふものであるが、其の地球を百二十六萬箇集めて、塊めないと、一の太陽の大さにはならぬと記してある、然うすると日光の廣大なることも推し量られるのである。斯ばかり大なる日光の德が取りも直さず大乘菩薩の戒德であるのであるから、何うでも大乘戒は受けらるゝがよろしい。大般若經には、『小戒如牛跡所溜水、大戒如大海所有水』。とも說いてあるのは、今の喩と畧ぼ同じなので、洵に戒德尊勝と申し上ぐる所以なのであります。

然るに或人は疑懼していふであらう。授戒をするから。戒法を破るといふことも、戒法を

立憲國と野蠻國

犯すといふことも、出來てくるのである、本人に斯樣な危險なものは、無いがよいではないかと成程。斯樣な考は、昔からも起るものと見えて、祖師了譽上人は、顯淨土傳戒論に於て左の通り問答をなされてある。

問、菩薩戒者二聚淨戒十重禁戒等然授戒後於十重禁中隨犯一戒豈非破戒哉、若是破戒者其罪最重爾者令末世之人持之有過何傳授之哉。

答、設破之授戒功德卽無盡也。盍令受之。被云破戒不被云無戒汝若恐破戒何不恐無戒哉。況持犯在受者非戒師失其上正菩薩戒者二聚淨戒也是云服藥戒是。乃至服藥戒者但驚覺自性所具理智悲願現自然所行身口意既是一得永不失何有持犯之義安持犯之名且禁忌戒(十重四十八輕戒等)前也。若其禁忌戒者有無任人意假有犯非如聲聞戒失戒體故名金剛寶戒譬如金着泥土金性無壞無維何不授之。云云

卽ち佛家に戒法のあるのは、恰も日本帝國に憲法の出來てあるやうなものである。違憲のことが有ては好くないと云つて、一國に憲法を制定し無かつたならば、卽ち其國は秩序もなく、野蠻國と變化するより外はないのである、縱令ひ憲法に違戻するやうなことが、折り折りあらうとも、國家には憲法の存在が必要で、然も國家の文明に進むに從て、益々立憲帝國とするの必要を感ずるのである。彼の露國ですら、今日までの無憲法國たりしを後悔して、既に立憲主義といふことに、なりかゝつてある位では無いか、支那の如きも又今や立憲國としやうとして、朝野の者が骨を折りつゝある位では無いか。して見れは、了譽上人の仰せ通り、破戒を恐るゝよりも、無戒を先づ第一に恐れんけれはならないのである。否や、大乘戒は一得永不失といふて、一旦受けた戒體は、何のやうな惡業を行ふとも、盡未來際、決して戒體を失ふといふ、恐れの無い尊い戒法で、正に金剛寶戒の名に背かざる、最尊第一の德分があるのである。何んと斯くまで、尊い戒法を受けないが好いなどゝ、何うして申されやうぞ。

第二授受因由の德

第二授受因由の德、此の御德は、抑も我が淨土宗で斯くまでに授戒をすゝむることは、之れに就て、歷史的關係があるからで、之れを遠く其の源にさかのぼり考へみるといふと、勿體なくも蓮華臺上盧舍那の御本身より、吾等に相承し給ふことになつてあるのであるといふ、戒脈傳統の御德を示すのである、今一應、其の歷史的傳統を略說しやう。

歷史的戒脈の傳統

此の尊い金剛寶戒は、最初に蓮華臺上の盧舍那如來より、靈山會上の大聖釋迦如來に傳へられたので、大聖世尊は之を南岳大師に傳へ給ひしにて、其れから天台智者大師に至りて、章安灌頂大師、智威大師、慧威大師、玄朗大師と、次第相承して、妙樂大師に傳はつたのである。荊溪妙樂大師よりは、瑯道邵遂に傳へ給ひしにて、是れが大聖世尊より、九代目の相承となつて居る。然るに爰に我朝の沙門最澄法師は。畏くも勅を奉し萬里の波濤を越に遙に入唐し給ひて、大唐貞元二十一乙酉年、卽ち我が延曆二十四年春三月二日、夜は二更、亥時に、同伴僧義眞と并に大唐の沙門二十七人と共に、合州の臨海縣龍興寺の西の廂、極樂淨

土院といふ精舎に於て、道邃大和尚に逢ひ奉り給ひて、卽此の大乘圓頓戒を御受け遊はしたので、其の印可の證として、南岳大師の二十五條竹布の袈裟と、妙樂大師の十二門戒儀とを、頂戴遊はして、御歸朝になつたのである。然して此の二種の品は、傳戒の正統を繼ぐ人でなければ、御傳へが無いことに定まつてある。偖て、最澄法師、愈よ御歸朝の後は、先づ皇帝に此の圓頓戒を授け給ひて、彼の比叡山を御開らきになりましたので、後、勅諡で以て、傳教大師と申上ぐることになつたのである。傳教大師よりは、慈覺大師に傳へられました處が、此の大師には二人の上足が御坐た、卽ち慧亮座主といふ上足には、傳法だけを、授けられ、長意和尚といふ上足には、傳法と傳戒とを、并せて授けられました、但し慧亮座主は、嫡々では無いが、既に傳法の仁なるを以て、略戒儀によりて、机受戒を行はれました、然るに長意和尚は正しく嫡々の傳戒でありましたから、卽ち廣(儀)中(堂上)略(机)三種の戒儀を備へて儀式を執行されましたのでありました。斯くの如く嫡々傳戒して、遂に第十七代の傳戒、叡空上人に至たので、此の御方が、卽ち我が圓光大師の御師匠樣なることは、各々の已に御承知の次第である、然るに此の傳戒は、傳教大師御所定通り、我門人中、智道兼備の仁を選で、傳戒の嫡弟となし來られたのである、今や叡空上人の門人中、其數多しと雖、智道兼備の仁は、方に源空其の人の外には、一人も無いのである。乃ち我が傳戒の嫡々は、正に源空法然房に當てあることではあるが、念ふに彼は既に他宗立教の大志もあり、特に離山隱

遁の樣子も見ゆる程であるから、直に以て傳戒の祕寶は授け難い次第で、されはといふて、其他には此の正統を繼ぐべき人として、彼れに上越すものもなし。嗚呼止ぬる哉、〳〵、恨らくは、南岳十七人の傳戒、露地七代の嫡法は悲しや我れに至て將に絶にんとするのであるかと、天を仰ぎ地に伏して、終日終夜悲嘆の熱涙に咽はれたが、卽ち瑞夢を源空に感得されしかば、遂に思ひを定めて、傳衣傳戒し畢り給ふたのであります。其れ故に、南岳十七代の袈裟、妙樂十二門戒儀等は、悉く我が圓光大師の御手に、御讓り遊はした次第である。又我が大師は天下の戒師として、後白河院高倉院等の三帝の御爲にも授戒遊はしたりとは平生聞かれし通りの次第である。大師よりは鎭西國師に授け、國師よりは記主禪師に授け（此の二品は鎌倉の光明寺にあり）其れより寂慧、定惠、了譽、西譽、と傳々相承して今日の淨土門主に至て居るのである。

第三萬機普益の德、小乘戒は、人道の衆生のみ之を受持するので、廣く萬機には蒙らないのである。特に同じ人類にしても、中には受け難き機類もあるといふ樣な有樣で、至極狹隘であるが、大乘戒になると、中々難有いもので、卽ち授戒は萬機普益といふことになる、故に梵網經に、『若受佛戒者國王王子百官宰相比丘比丘尼十八梵天六欲天子庶民黃門婬男婬女奴八部鬼神金剛神畜生乃至變化人(ニンゲン)但解法師語(ノタマフ)盡受得(ス)戒皆名第一淸淨者』と說いて、單に法師の仰せらるゝ、授戒の言葉だに了解が出來れば、卽ち得戒がなし得らるゝといふ、誠に萬

機に通じたる難有い德があるのである。恰も易行他力の御念佛が萬機普益であるとの同樣たから、此の授戒までが、別規の宗意と一轍であつて、易行易修の戒法と相成る次第である。世間でも克く言ふ通り、似たもの夫婦と、成程物は其の通り、一生涯連れ添ふて行く夫婦が、其の性質氣性の上に、似た處がなくては、長く連れて居らるゝものでは無い。御念佛の夫が連添ふて居る妻の授戒は、其性質氣立ての上に於て、既に早や萬機普益といふ、相方の意氣が似たとも似たとも、卽ち克く相一致して居るから、斯くは宗脈と、戒脈と、女松男松の如くに、立ち並べてある譯であるのじや。其故に大師樣は、難行難受の六かしい餘戒をさし措て、此の圓頓菩薩の易行の戒法を選び取り給ひて、御念佛と共に御弘通あらせられた次第である。『夫れ十重を持て十念を唱へ、四十八輕を護りて、四十八願を願ふは、心に深く賴む所なり』と、常に大師樣が仰せ給ひしも、卽ち此處の譯である。斯く申せば、必ず疑ふ人が有るであらう。持戒といふものは、中々六かしい者で、易行の易修のと、言はれた話じや無い、又惡をやめ善を行ふといふことも、口にゞ易くは云へるが、實行はといふと、非常に困難なものじや。故に持戒は矢張萬機普益とはいかないであらう。なるよ、隨分思ひ疑ふ人が、無いでも無からう。是れも一應尤の說ではあるが、今易行の戒と、特更に言つたは、可圓和上の言葉にもある如く、元祖大師が我は戒も持たずとあるは三學の戒のことで、隨分の戒のことではない。今は隨分の戒に就ていふので、其の隨分戒とは、卽ち圓頓菩薩の三聚淨戒に就ていふて居るので、普

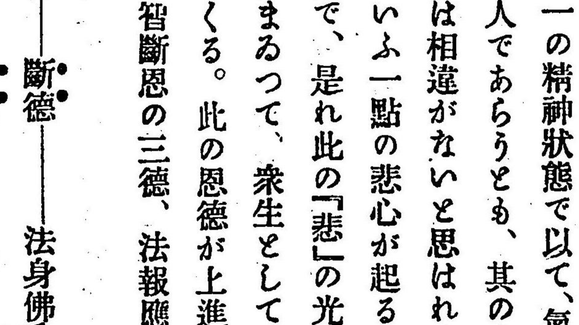
通の戒ではない、其れ故に此の圓頓戒になるといふと難有いことには萬機普益で易行易修の戒と申し得らるゝ、德分があるのである。今少しく其の理由を御話し申さう。

前章に引文しました、祖師了譽上人の仰せに、何んとありました、三聚淨戒は服藥戒、で御藥であるが、十重禁、又は四十八輕戒などは、禁忌戒で、卽ち毒用心の戒で、病氣の時に、御藥を服する法と、身の毒養生をする法との、二つを併行して用ひると同じである。但し禁忌戒の方は、有無人の意に任かするので、設ひ又犯したとても、彼の聲聞戒のやうに、戒體が無くなるのではないから、破戒しても受けれは受けた戒體の德だけなりと、留り殘る譯で矢張り德する道理である。また其れはかしじやない。此の服藥戒といふのは、但た自性所具の理智悲を驚覺して、自然所行の身口意を顯現するにあるので、而も一得永不失であるから、言はは三聚淨戒を受けた人には、戒法を持つ犯するといふ義理が無いのである。其れを一應、持犯があるやうにいふのは、彼の禁忌戒十重や、四十八輕戒の前でいふ名前であると、仰せられた。是れには深くして而も遠い意味がある御言葉で、之を心してよく〳〵味はうて行くと、忽ちに三聚淨戒は、本んに成程、餘戒とは事が違ふて、易行の戒である、萬機普益であるといふ道理が、解了て來るのじや。是れは如何なる筋道で、其うなるかといふと、然あ卽ち斯ういふ次第であるのである。

了譽上人の御言葉、自性所具の理智悲、卽ち是れが授戒の實質である。然れは餘處に。在

る戒を、此方へ貰らひ受くるといふのではなくて、元來無始の昔から、自分の心に具へてある、「理」と「智」と「悲」との三箇の名玉を、驚覺といふて、斯く尊い名玉の心に具してあることを、驚きの嬉しさと、悦ばしさとを以て、自覺するにあるのである。換言すれば、衆生の此身此儘の心が「理智悲」の姿であるので、是れがやがては三聚淨戒の名玉の光を以て、頭より足の爪先きまでが、つゝまれてあるといふ、尊い心なりしと、自覺するのであるのじや。

先づ第一、各々や我等の心には、眞實心よりして惡を惡とし、善を善として、其の惡を斷じ其の善を修めやうといふ氣持が、何人にでも起り來るのである、茲に百萬圓の金をやるから、二二が六であると思へよと、或人よりよし云はれましても、詐りて然かく思ひまするとは、言はゞ云ひ得られんかなれども、今いよ〳〵眞實に二二が六であるとは、頭が飛んでもはた何んとしても、誠から心底から、其の樣な詐りごとは、思ひ信じ込まれないのである。僞りも人にいひてはやみなまし心の問はゞいかゞ答へんである。然あ其一點、心で心が詐りあざむくことの出來無いは、自心所具の「理」と「智」といふ玉から出でし光なので、是れ此の「理」の光で、惡は惡である、邪は邪であると、正直に照らし見て、以て其の惡は禁じましやう、止ましやうといふ、攝律儀戒の斷德が、出てまゐる、此の斷德が發達した上で、法身佛を成就することになるのである。又其の「智」の光で、惡は醜きものである、善は美しきものであると、黑白邪正の見分が出來て、世間出世間の所有善といふ善は、何處までも修したい行ひたいといふ、攝善法戒の智德が出てまゐる。此の智德が進化した上で、報身佛を成就することになるのである。次によし如何なる大惡人といへども、人を慘殺するといふ時の心根の場合。芳香麗はしい櫻花の一枝を手折ると同一の精神狀態で以て、氣持ち善く心地好く、斬り殺すであらうか、否な、如何に無慚非道の大惡人であらうとも、其の時には必ず、顏もしかめて、心地惡く氣持ちわるく思ひつゝ、斬るには相違がないと思はれる。否や、斯うあるべきが本當なのである。然あ、心に心ようないといふ一點の悲心が起るといふが、直に其の心祕の奧底に、「悲」といふ玉が光てあるといふ證據で、是れ此の「悲」の光で、人は救ひたいもの、救はにやならぬもの、救へば心地ようなつてまゐるつて、衆生として濟度せざるは無きまでに、濟度しやうといふ、攝衆生戒の恩德が出てくる。此の恩德が上進した上で、應身佛を遂に成就することになつて、理智悲の三性より、智斷恩の三德、法報應三身の如來と、開發し了ることになつてくるのであります。



して見まするとも、授戒と言た處が、成程了譽上人の仰せ通り、自心所具の三聚淨戒を自覺するにあるのであるから、別段異た六かしい事ではない。勿論其の自覺の仕樣に依て、自覺の

程度には、淺い深い差別があるであらうけれども、法師の語を解する力だにあれは、此れだけの自覺の出來無いものは無からうと思ふ、彼の紫式部が、自暴自棄の人を誡めし歌にも。

わりなしや人こそ人といはざらめ
みつから身をや思ひすつへき

とあつて、世間ではよし自分のことを、人間のやうに言ふてはくれないからといつても、自覺して見れは、けにも尊い此の人の身をは、自分が自分で捨てゝよいものかとの訓誡である。卽ち氣を附けて考へ見るといふと、自身は是れ理智悲といふ三つの名玉を所持する、尊い身分で、唯々之を分に應じて、磨がけば宜いのである。其の自覺のことは、何人にでも出來やうと思ふのである。其の自覺の何人にも出來るのが、卽ち易行の戒法といふ所以であるのである。又念佛の行者が、口稱一行中は、先きに申した造惡の上の慶惡となり、忘心中の息忘の行となるのじやから、是れがやがて、三聚淨戒の姿形で、其のまゝ持戒の行者となつてある筈である。然すれは念佛だに申すほどの身でさへあれは、持戒の行者と已になつてあるのであるから、念佛の萬機普益であると同時に、此の圓頓三聚戒も、又亦萬機普益の德ありといひ得らるゝのでは無いか。

兎角に、人の品性や品行の下落して行くといふものは、皆が此の自覺といふことを、しないからである。身の尊い程が自覺されるといふと、自然の品性も品行も改まつてくるもので、

彼の年端も行かぬ千松が自分は武士の子である、武士は主君の爲めには、一命でもさし上ぐる筈の者であると自覺した御蔭で、彼れは武士道の精華を、現はし得たでは無いか。

『これか〳〵樣、侍の子といふものは、ひもじいも何んとも言はずお主の爲めには喰ふものじやと、いはしやつた故に。わしや何共思はずに、待てゐる。其かはり、忠義をしてしまふたら、早ふまゝ喰はしてや、夫れまでは、翌日までもいつまでも、こう急度すわつて、お膝に手をついて待てをります。お腹がすいてひもじうない、何共ない』とじう面作り、涙は出れど稚氣に、譽められたさが一はいに『ちや泣きはせぬはへ』と、額を撫で〳〵泣顏を隱す心は、流石にも名に負ふ武士の種なりき。と斯く、戲曲にあるのは眞に好い證據であります。

第四諸佛本懷の德、梵網經曰、諸佛子諦聽十重四十八輕戒、三世諸佛已誦當誦 我亦如是誦、汝新學菩薩能受持此戒、轉授諸衆生、化々使不斷。此の御文を拜見しても、如何に授戒が三世諸佛の御本懷であるかゞ解るのである。既に授戒が御本懷であるとすれは、三世諸佛と我等とは、親子の關係が出來てあるのである。子たるものは、親の心に契ふやうに、平生より相勤め盡くさねはならぬ。其故に自身が授戒するは、勿論其の授戒をは又他の人にも勸めて、化々して斷にないやうにせよとの御命がある。其うするといふと、是れが三世諸佛の御本懷に契ひ奉る德分をは、各々が身に受けるやうになつてくるのである。丹波の親孝

右足は高下駄左足は雪駄の孝子

心に契ひし時の快味

行の子は、兩親の本意に契はん爲めに、如何なることでも行ふたといふことであるで、御使ひの爲め、隣村に行かんとしたるに、相憎雨天らしいので、父は高下駄を穿いて行けと申された。はい宜しう御座います。といふて門口まで出てみると、母親が、これ〳〵高下駄では、道でこけてはならぬ、雨も急には降りさうない、雪駄を穿いて行けといひ附けられた。其時普通の子なら、否な御父さんが高下駄といはれたからと言ひ出でゝ、母親の云附けに反抗するが、習ひであるが、此の子は是れにも、はい〳〵と從ひまして、遂に右の足に高下駄、左の足に雪駄を穿いて、以て兩親の本意を無にしないやう、勤めたと申すことである。斯くするが子として兩親の本懷に契ひ奉りし德分といふもので、其の又德分は孝子の身の上に附くので、外へは其の德はゆかないのである。

總べて何事によらず、心に契ふたり契はせりしたことは、相方に心地の好いものである。卽ち俗にいふ開いた口に牡丹餅で、牡丹餅の喰ひたいと思ふ時に、不意に都合好く、御隣りからでも頂戴してでらん、其時の甘いことと悦しいことは、實に云ふに言へないであらう。又贈た方でも、矢を金的に當てたが如くに、其れは何により善かつたと、喜ばしう思ふに違ひないのである。如來樣でも何うか衆生が授戒して呉れゝは好いがと、日夜に御心を痛めて御座る處へ、今回の如く、各々が勇み進んで、人を誘ひ合ひつゝ、斯く多人數に授戒せらるゝであるから、眞實如來樣の開いた口に、牡丹餅をほり込んだやうなものであるのである。然すれは如來樣達の御喜びは、實に非常なものであらう。否な夫れ〳〵の御淨土には、異香匂ひ妙華降り來つて、新往生の菩薩達は、何事の起りしにやと、歡喜踊躍なさるゝと、御經には御記るし遊はしてある位である。いや心にだに契へば、牡丹餅のやうな結構な物では無くとも、隨分と心悦しいもので、彼の太閤秀吉が、嘗て鷹狩に行かれた時、非常に咽喉が渇いて、湯茶が急に欲しくなられた。乃ち或山寺へ投じて急遽て、茶をもて〳〵と、急呼なされた。其の時、一小童子が一大椀の茶を御進め申したが、其の茶は頗る微温であつて、七八分はを盛てあつて。公には心地好げに一呼吸に之を飲みはして、はあ快哉と稱賛なされて、更に又もう一椀と申された。今度は少しく熱くして、茶は半椀に滿たない位であつた。公には徐々に喫し了り給ひて、又復更にもう一杯と仰しやつた、是に於てか、此の度は代ふるに小椀を以てして、其の茶は太だ熱くして、遽には口に出來ない程であつた。乃ち三回は三回とも、公の御氣に契ふた茶の進めぶりであつたので、其の一小童子の頓智を愛稱し玉ひて、遂に之を住持の僧より請ひ受けて、携れ歸へられまして小臣となされた。後、次第に成人すると共に、中々敏才にして賢明であるから、遂には列せられて五奉行中の一人にまで擢用せられました成のやうに、三世諸佛の御本懷に契ふやうに、盡くして貰らひたいもので、其れには石田のが、是れが卽ち有名なる治部少輔石田三成であります。然あ各々方にも何うか、此の石田三やうな頓智が入るものでなく、又敏才が無ければならぬので無い。唯々誠意を以て授戒だに

契當したる佛意の快味

太閤秀吉に湯茶をすゝめし石田三成

したならは、唯た夫れ丈けで御本意に契ひ奉ることゝ成るのである。石田三成が太閤様の御本意に契ふたはつかりに、其れ山寺の小僧であつたものが、人もあらうに此の大豪傑に見出されて、後には立派な御大名にまで出世したのは、即ち本懐に契ふた徳分であります。して みれは、授戒して各々が如來の御本意に契ふたとすれは、其の徳分には五奉行の一人になるか、大名とまで出世するかといふと、此の授戒の茶を進めたものゝ出世は、中々其んな小さいものでは無い。即ち妙因種子の徳といふ、洪大なる御徳があるとの仰せである。尚は進んで御話をすると、れは次章に就て辯じませう。

佛意に契合したる徳分

第五妙因種子の徳

第五妙因種子の徳、南山曰、『三本藏識ニ成善種子ニ此爲戒體ト』（本藏識は所依の處、善種子は即能依の體、能起所依は是れ本有の性、所發能依は即ち今受の體也）。此の御釋文が正しく、授戒をすれは妙因と稱して、佛果に到達する、妙にして善なる種子が、受者各々の心に植附けらるゝことゝなるといふ、洪大なる御徳があるとの仰せである。尚は進んで御話をすると、是れに正因、了因、緣因の三因があるので、今云ふ妙因の種子といふのは、正しく其の中の了因と緣因との二つに就て申すのである。正因とは前章で度々申し述べた、衆生本具の理智悲のことで、喩へは石や金の中には、天然、自然、無始以來、火熱といふものが本具してあるのと同じである、然るに其の本具の火熱を現前に顯し起さんとするには、必ずや石と金とを擊ち合ふといふ、了因緣因の二因が、手傳はねは、其の火熱は現在には顯起しないのである。今授戒の作法儀式を整へて、佛前に誓ひを立てるのが、即ち各々の心に本具してある、正因の火熱をは、授戒作法の石と金と擊ち合ふ處の、緣了二因に依て、戒體といふ火熱を、現在に顯起することになるのである。其の顯起し來た火熱の戒體が、罪惡を燒き盡くして、善根を修し慈悲を行ふ作用をなす、所謂妙因の善種子となつて、一惡を去り一善を修することに、其の善の種子が、心田（本藏識）に植附けられて、深う廣う根を延ばすといふ、有難いことに相成るのであります。故に觀徹上人の菩薩戒誘蒙には、『心性但是戒體所依實非戒體、又云或云衆生本有佛性即菩薩戒體、今謂不然、本有之性蠢動翳飛一切皆具、菩薩戒體受者方有、不受則無、此則因緣構造修起之法、性雖本有非修不發、如摩尼珠具足衆寶不假緣求終不出現』（體に二種あり、當體の體即是れ戒體、所依の體は心性是れにして心性は戒體の所依なり）と懇示してあるが、實に至極圓熟したる御說と申す外はない、心性の但是れ戒體の依り場處たといはれたは、心性に本具したる理智悲の正因は戒體の依りかゝつて居る場處で、其れが直に本當の戒體とはいへないのである。即ち前章で自覺といふことを申した、彼の自覺するといふが、やがて授戒作法の緣了二因のことで本具心性の名玉を自覺すると、乃ち善種子が顯起し來るのであります。喩へは琥珀を以て鐵片を磨するとき始て磁力を生ず即ち常に北方を示指する作用は（戒體）は磨接（受戒）の緣に依て起るが如し。故に此の妙因種子は受戒をした人で無けれは、出來ないのであるから。正因（本具心性の理智悲）佛性は

正了緣の三因と發火の喩

觀徹上人の懇示

かりに打ち任せ置いて、緣了二因（授戒作法の緣因と法師の語を解するといふ了因）の自覺するといふ、方法が缺けるといふと此の妙因種子が顯起して、榮えて芽萌えするといふことがしなくなるのであります。是れに就て、また〳〵詳しい御話があるが、其れは後の戒體の下で述べることにしませう。其れで前回に於て、授戒をすれば如來の御本意に契ふと申したが、乃ち今いふ正因佛性の上へ、緣了二因の授戒が整ふて、正了緣の三佛性が、鼎の三足の如くにうち揃ふたから、愈よ如來の榮位にまで發達しゆくことに確定したる立派な妙因種子の根をおろされたのであります、そしてこれが榮えに〳〵榮えに行くから、其處で御本懷に契ふことに相成るのであります。妙因種子が出來れは、何故に佛果圓滿の極位にまで昇れるかといふに、彼の天滿宮の御歌の通り、

心たに誠の道に契ひなは
いのらすとても神や守らん

這は誰れでも知つて居る名歌であるが、薩摩の武士伊勢兵部少輔貞昌といふ人の說には、此の歌はまた〳〵道の極位には到つて居ないとて、其の下句を改めて、

心たに誠の道に契ひなは
いのらすとても守らすとても

と、詠じたとあるが、成程是れは尤もの次第である。心たに誠の道に契ふならはとは、卽ち心性本具の理智悲を自覺して、授戒の菩薩となつて廢惡修善をするのが、やがて誠の道に契ふて居るので、換言すれは三世諸佛の御本懷に契ふて居るのであります。既に御本懷に契ふたは、心田に妙因の善種子が植附けられた證據で、斯く立派な種子が根をおろした以上は、三世諸佛は此方から御願ひしたり御祈りしたりせなくても、必ず先方の御方から、御守りあらせられるのであらうとの、菅相丞の御旨意で、是れも尤もの次第である。善導大師は、『人能念佛還念』とも仰せられたから、勿論十方三世の如來樣の御擁護があるに相違が無い。が是れは此方より先方樣のことを、御想像申し上げたまでのことで、然るに萬一先方の方樣で御守が無いことでもあらは、此の時此方の誠の道に心を契へさした方では落膽するでせうか何うでせう。餘りに御守りのことはかりに氣を奪はれて、深思ひをした人には、時には落膽しないとも限られない。が元來本懷に契ひ奉た上は、此方では先方樣が、御守りの有無を兎角に物案じする必用は、早や無いのであつて、彼の熊谷入道が、

約束の念佛は申し候なり
やらうやらじは彌陀のはからひ

と詠じた通り、又儒教でいふ『人事をつくして天命を俟つ』とあるのと同じて、さあ斯うなるといふと、卽ち

心たにまことの道にかなひなは

徳川家康に對する成瀬正成の精忠

いのらずとても守らずとても

といふ、大安心の境界に居てよいのである。何せならば、既に此方では先方様の御守りを心當てとし、又目的とはして居ない筈である。乃ち石と金とは撃ち合へば、火の出でくるのは確定したことで、火さへ出づれば先方の御守り如何に拘らず、火は喑を破るべき活作用は自然に備はつてあるのであるから、既に妙因の善種子が植附けられたならば、其れがやがて佛果圓滿の花を咲かし實を實らすことは、確定したことであります。

昔、豐臣秀吉公が大阪に居られた頃で、嘗て徳川氏の將士に命じて、騎馬を習はした。公自らは千貫櫓に登つて、之を觀覧せられた處が、中に驄馬に騎つたる武夫があつた。御近習に彼れは誰れであるか、又祿は徳川より何程もらつて居るかとの御尋ねに、御近習は彼れは成瀬正成と申して、僅かに二千石の士で御座いますと、御答へすると、嗚呼彼れはなか〳〵の佳士じや、若し我れに仕へば五萬石に取立てゝやらうと言はれた。其れで徳川家康公には之を聞かれて、直に正成を召し寄せ玉ひて、さて言はるゝやうには、汝能く豐臣氏に事へるならは、富貴立處に到る譯で、余も又汝が出世を悦ぶ譯けじやと申された。然るに正成は涕を滂沱と流して泣いて曰ふやう、是れはまた何んたる御言葉にて候ぞ、臣不肖なりと雖、祿を貪りて主君を忘れ申さうや。願くは自殺して以て臣が赤心のほどを、明かに致したう御座る。と いふては、又さめ〴〵と泣いたとある。後、家康公には此の殊勝な心に感心なされて、三尺の

第六全分自在の徳

瓔珞經の說相

分授戒と漸進主義

孤を託すべきは、眞に正成なりと申されたと、名節錄といふ書物にかいてある。偖て此の正成の此の心掛けが、所謂赤誠を以て主君の本懐に契ひたい、忠義の道に契ひたいといふこと丈けが目的であつて、何にも俸祿の厚薄には、毛頭縣念は無いのである。乃ち先方から御守りがあらうが、將た俸祿が增さうが減じやうが、先方は先方任かせで、唯々自分は自分の勤むべきは勉め、盡くすべきは盡くすといふだけであつたのである。物事は此處まで來ないと眞味が出て參らないものである。

第六全分自在の德、瓔珞經云、有受二一分戒一名二一分菩薩一乃至二分三分四分十分一名二具足一戒六波羅密經云若有衆生發菩提心護持一禁者亦得名爲二入佛淨戒波羅密多一善生經云受持一戒一是名一分二戒名少分受持四戒是名多分受持五戒是名滿分、此の如く諸經文に御示しになつた通り、大乘戒に限て一分でも、全分でも受者の機根に相應して、受けることの出來る便利法が出來てあるのであります。餘戒では斯樣な得手加手の授戒は御座いませんので何處までも全受でなければならぬことゝなつてあるのではあるが、初心の人には、最初から酒も禁じよ、釣りもするな抔と、惡といふ惡を一々並べ立てゝ、さて皆なを一度に、ふつゝり止めさせやうとした處が、中々其うは早く甘く行くものでは無い。所謂角をため直さうとして、還て牛を殺してしまふことになつてはならぬ。其れ故に漸進主義で、楷子段を昇るやうに、十重禁の十段の段々を、先づ始めは昇り易す

慧恩大師の話

金屬の比熱と水の比熱

漸進主義の引例として安松金右衞門が鑿渠工事

さうな、第一第二といふ處から、分受して昇り始めるやうにするのである。故に慈恩といふ方の御言葉にも、『引攝初根ニ許ニ一分受ニ非ス引ニ久根ニ亦受ニ一分ニ漸々化令ニ必具受ニ故』とあるです。故に大乘戒に、分受を許して一分の菩薩とか、二分の菩薩とかを立つるは、畢竟漸進主義で以て、最後の目的地に到達させてやらうとの、一時の善巧と申さねばならぬ。彼の早く熱する物は、又早く冷かになるもので、一時の感情に激して戒法を全受した處が、何時しか一つ破り、二つ犯して、殆ど無戒同樣の元の木阿彌と冷却するに至り易いから、先づは漸進主義で徐々に進行させやうとの御思召である。金屬類は比熱の小さいものであるから、從て熱し易いが又冷却もしやすい。丸で婦女子のやうなものである。水は比熱の大なるだけあつて、急には熱せられ無い代りに、一度び熱したならば、其う急には冷却はし無い、洵に大人物の態度がある。即ち急進は急退の基るだから、物事は相當の順序階梯を經由して、漸進するに限るのである。所謂金屬の婦人の態度を眞似ずして、大人物の水の態度を取りたいものである。水といへば此の水に就て、物事は漸進主義で無ければならぬといふ、好例を御話申さう。

徳川氏の頃、酒井家が封を移されての後、伊豆守松平信綱が代て、川越を領した。然るに領内、土瘠せ水匱しくして、田里は蕭條たる有樣であつた。代官安松金右衞門といふが、建議して曰ふやう。宜しく新渠を鑿ちて、以て玉河の水流を引くが好いです。則ち水利疏通して、稻田大に開かるべしであると。信綱、其の費用を問へば、參千圓もあれば好いといふ。信綱、心中思ふやう、吾れは久しく此の地に居るべき者では無いが、然も參千金で以て此地の後人に利することが出來得るとせば、易々たる事である、決心して乃ち彼れに命じて、其の新事業を督せしめた。安松、是に於て、役夫數百人を募り、十有六里の長渠を鑿ち、小川村より新河岸に達したのである。然るに、工事落成して後、源水少しも至らず、渠中唯々沮洳たる有樣であつた。信綱は深く之を怪みて詰問したが、安松も亦其理由が一向解らぬ。且らく明年まで御待が願ひたい、或は明年にもならば、源水滔々として、流れ來らんといふばかりであつた。明年も遂に今年と成つて來たが、水は今尙は來ら無いのである。信綱、殊に不平でたまらないから、安松を譴めて、汝が特に地勢の高低をも察せずして、徒らに工事に着手したからであると、叱り附けた。すると安松の曰ふやう。否なとよ、臣、今にして悟る處がありました。古語に、河は九里を潤すといつてありまするが、成程然うで、川越の地たるや、武藏野の曠漠の中に在て、土は燥き風は多く、人家は皆な塵を吹きて、座に滿ちてある有樣で、偶ま客の來るあれば必ず席を掃ふて後に之を延くといふなるに、今年は獨り然る氣色も無いはかりか、蘿蔔の諸菜は、肥饒皆な平日に異なつて、青々として發育が好いのでありまず。乃ち知る、河の潤いが地に入ること數尺。而して十六里の長渠に通して潤ふので御座いますから、流水を見ることの遲いも道理でありまして、申上げた。遂に其の明年に至て、果して一夜大雨が有て、聲のあること雷の如くで、俄にして奔流滔々として衝決して、香魚は

躍て地に上るといふ有樣、遂に十有六里の長江を現して、水は滿々洋々として、新河岸に遂した。其處で流石の信綱も慊然として「安松、三年の久しきを經るまで、其の志を挫かずして居たのは、洵に感歎するに足ると云つて、祿若干石を加增して、顯職に就けたとある。

即ち流水は先づ九里を潤してからで無いと、河中には滔々として現はれ來ないので、長渠が落成したからとて、水は急進しては來ないのである、其の一分より二分と、順序を踏み階梯を渡るといふもの大切な理由は、是れで以て御承知になつたであらう。故に圓戒には、先づ分受より勸めて、遂に全受に至らしむるのである。

圓戒に分受を許す所以の結歸

三寶歸題

第三　三歸

贊題、梵網古迹云佛法僧寶出邪之大津　入正之要門　順之者必證常樂　背之者常沈苦海邪見違逆罪莫大焉。

◎此の三歸を、入行の最初に、授くる戒師あり。然るに受者は、未だ三歸の何たるを知らずして、無意味無感覺の裡に、此の三歸作法を修了することになりぬるは、洵に遺憾の限なりとす。故に當段に於ては、受者は必ず三歸を行はざるべからざる理由と、其の三歸の意味とを、最初に理解させ置きて、而して後に受者の心中に、充分の印象を與へ得るやう、此の作法を行ふべし。

◎總じて、三歸作法の目的は、翻邪歸正に在るを以て、講說の趣歸も、又勉めて慈に心を置かざるべからず。然るに、受者の中に教育ある人士あらは、一體三寶を詳說するの必要極めて多し。されど仰信的の男女の多數が受者なりせは、別相住持の三寶の詳說を以てするにあらざれは、感化の結果は薄かるべし、今は暫らく一體三寶に依て說を成さん。

一體三寶

山上憶良の歌皇后宮の御歌

佛法女房鐵炮の三寶

珠寶と武德の臣

山上憶良といふ人が、萬葉集に、「しろかねも黃金も玉も何にせんに勝れる寶子にしかめやも」と歌ひて、人世、寶として珍重すべきは、子寶より尊い寶は無いと申されたが、成程是れも人に取ては寶であるに相違が無い。又恐れ多きことながら、我が　皇后陛下には「夜ひかる玉も何にせん身を照す書こそ人のたからなりけれ」と御詠じ遊ばされて、文學が世に取りては第一の寶であるとの御令旨である。又或る人は佛法女房鐵炮の三寶とて、人の心に取りては佛法が寶である。一家に取ては女房が寶である。一國の防備に取ては鐵炮が寶であるといふ處から、此の三つを三寶として、稱へたものである。又支那の或大名が、千乘の車の前後を照らす名玉が、余が手許にあるが、是れが最第一の國の寶で、最も外國に誇るべき珍無類の寶物じや、と自慢氣に話された處が、外國の賢臣が、否や拙者の國では、內を治め外を護る德行の臣武德の臣が御座るが、是れが國家の第一の寶であると申上げたこともあつて、人と處に依て、寶物とする物に、皆な夫れ〳〵異なつてはあるが、何處にも其れ相應に

寶物がある。日本では三種の神寶とて、三つの寶物がある。卽ち神皇正統記に。

三種の神寶と其の內容

又、大神、御手に寶鏡をもち給ひ、皇孫に授けてはぎて、吾兒、視此寶鏡當猶視吾、可與同床共殿以爲齋鏡とのたまふ、八坂瓊の曲玉、天叢雲の劍を加へて、三種とす。又此の鏡の如く分明なるを以て、天下に照臨したまへ、八坂瓊のひろがれるが如く曲妙を以て天下をしろしめせ、神劍を提げてまつろはざるものを平げ給へと、勅しましましけるとぞ、乃至鏡は一物もたくはへず、私の心なくして萬象を照らすに、是非善惡の姿あらはれずといふことなし。其の姿に從ひて感應するを德とす、これ正直の源なり。玉は柔和善順を德とす、これ慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を德とす、智惠の本源なり。この三德を翕せうけずしては、天下の治らんこと、誠に難かるべし云云。

佛家の重寶

卽ち、正直と、慈悲と、智惠との三寶が日本帝國の三種の神器となつてあるのである。

今我が佛教では、何にを以て傳家の重寶とするかといふと、卽ち此の三歸三寶で、佛と法と僧との三寶に歸依することである。所謂、國に鏡があつても正直を行はないやうでは露國と同じて、鏡が寶としての價値を既に失ふて居るのである。玉や劍があつても、慈悲も行はず、智識も進めなかつたならば、又亦上と同然であるから、我が佛教でも佛法僧の三寶がよし有ても、之れに歸依していかなければ、三寶も三寶としての尊位を失ふことになる。卽ち歸依してこそ始めて三寶の三寶たる價値が附いてくるのである。故に三歸三寶と稱してある。

三歸、佛法僧の三寶に、歸依するからへるの謂で、戒山比丘の御言葉に。

戒山比丘の言

聞く、夫れ佛の學は本に復る而已矣。其本とは何ぞ此心是なり。心の德たるや、清たり智たり慈たり。物の本に復ること能はざる所以は、蓋し三妄の使ふ所なり。清淨は煩惱の爲めに翳され。智惠は痴業の爲めに蔽はれ。慈悲は愛憎の爲めに阻まる。而して唯、迷路にのみ趨る。故に本を去ること日々に遠し。

佛教に於ける本復の說

といつてある。換言すれば、本心の德に立ち歸へれとのいひぢや。其の本心の德を、或は清淨とか、智惠とか、慈悲とか戒山比丘の言はれたは、日本の三種の神器たる正直の鏡と、慈悲の玉と、智慧の劍との三寶に、克く似てある言ひ振りであるから、佛教に依て本心に立ち歸る以上は、日本の神寶にも歸依したことゝなるのである。三歸をうければ、卽ち日本の忠良の民となるので、王法と佛法との一致も、此處らで克く解かつてくるのである。又儒教でも人間の本心を說明して、

人の本心は澹然虛靈なり。親へ接すれは孝心を生じ、子へ接すれは慈心を生じ、兄へ接すれは悌心を生じ、弟へ接すれは友心を生じ君へ接すれは忠心を生じ、民へ接すれは恕心を生ず。仁者人也仁字以人以二、二人爲仁、接する處の人にして、其名を異にし其用を異にすれども、其本は一心而已なり。是を仁といふ。是を吾道一以貫之と云ふ。(梧窓漫筆)

林子平の父兄訓

本心より遠ざかれる肚會の狀態

といふてある。今一體三寶の上で、御話をしてくるといふと、前に申した清淨なり慈悲なり智惠なり、又儒に云ふ處の、孝悌忠恕の道も、皆な佛法僧の三寶中にあることで、卽ち本心の德とは、此の佛法僧の三つのことであるのである。是れは次へ往て詳く述べることである。が、さて本心は斯樣なものであるとしてみると、相互に誠に恥しい次第で、世間多數の人は、皆な此の本心に遠ざかつて居ると申さねばならぬ。彼の林子平が書かれたる、父兄訓を讀んで見ると、皆な〳〵本心より遠ざかつて居ることが、一々手にとるやうに解る。

哀哉人の父たる者交合して子を生む事を知ると雖も子を教ふる道を知らざる也、人の兄たる者亦弟を教ふる道を知らざる也、偖子を教ふる道とて別段六ヶ敷事にも仕難き事にもあらず、只孝悌忠信勇義廉恥の八德を丁寧に言聞せ語り聞かせて、兒心にも孝悌忠信勇義廉恥の八德は人の土臺なる事を呑込ますべし、然るに世に此の八德を知りたる父兄少き故、子弟を育るにも只姑息の愛のみにて、曾て教訓の詞を加へざる故、八德を知りたる子弟なくして、子々孫々八德知らずのみ相續く事世の人の知る所也、此の如くなる故世上の子弟貴賤となく皆面々我々の勝手次第に育つ故、多分は十四五歲より色心貨心起て漸々に無賴の人に交り初めぬれば、忽ち遊里へ導かれ又は奕に陷り或は遊山遊興俳諧長唄等のたわいも無き事どもを見習ひ聞習ひ終に師匠入らずに無賴不作法を致す故、茲に至て流石凡俗なる父兄の目にも其子弟の不行作を氣の毒に思ふて、其無賴不作法を咎め戒むれば、元來八德不

知の子弟なる故父兄の下知を用ひざるなり、用ひざれば父兄恨み怒つて子弟を詈り辱れば、子弟も亦怒り背いてたしなむ事は偖置、却てふて心を生じ、種々の惡業日々月々に盛になる故、父兄も實に迷惑して、或は親類を賴て異見を加へ又は家督には致されまじ、家業は讓られまじ、園にや入るべき、討てや捨てんなどゝ實に勞苦して、日夜不安堵のおもひのみなり、是れ子弟を持ても樂みにならず、安堵も致されず、却て子弟の爲心を苦しめ思ひを變する者世の中に甚だ多し、是れ程本意無きことは無きなり、是等の事何より起ると尋ぬれば子弟に八德を教ふる父兄これ無きの故なり、悲しと云ふべきか、愚矇と云ふべきか、實に言語道斷なり是れ皆父兄たる人の手作りの過なりと云ふべし、乃至世の父兄たる者を見るに、己は八德を知らずして、子弟の八德無きを叱り詈り、己は淫酒無賴の遊樂を致しながら、子弟に向て若き者は箇樣なる遊樂を致さゞるものと云ひ、己は無學無藝にして、子弟の無學無藝を叱り詈る類多し、是等は只年役にて妄に子弟に誇ると云ふものにて教と云ふにも戒と云ふにも非ざるなり然る故に子弟たる者亦其の父兄の仕置きに心服せざるなり、心服せざる故其の父兄の云ふ所を用ひずして、其の終り遂に父子兄弟相互に非を計へて相攻め詈り、甚だしければ子弟は父兄の病死を願ひ、父兄は子弟の夭死を幸ひと思ふ樣に成行きて人倫の大變極れり、悲哉、

都ての小兒、七八歲迄は天然の良智の儘にして姦邪の慾心これ無き故、其の心氣涼やかに

して怜悧也、八九歳以上人心地附て人眞似をするに至りて、彼の父兄たる人多くは無頼無能不作法なり、上にも言ひし如く、小兒は都て父兄の眞似をするものなる故、直に其の父兄の無頼無能不作法を眞似る故、折角怜悧に生れ附たる小兒ども、八九歳より父兄を眞似るに隨つてそろ〳〵と馬鹿に成り始まり、其の上に十四五歳より色と貨との慾心起つて、終に惡業成就して身を亡ぼす也、是れ天より稟け得たる性質は怜悧なれども之を育つる父兄等無頼不身持なる故、子子孫々相續いて皆馬鹿になる者多し、父兄の恥是より大なるは無し、是より甚だしきは無し、父兄たる人能く〳〵工夫を加へ、身を顧みて子弟を育つべし斯樣な譯であるから、各々には三歸に依て、本心に歸るといふことが、御受戒の前に當て、大々必要な次第である。

又我が大師は、還愚痴とて、念佛の行者は、愚痴に立ち歸へれよと仰せられたが、此の御言葉も、克く〳〵玩味してみると、矢張り本心に立ちかへれとの意味である。

其處で還愚痴の愚痴は、顔回は愚なるが如しとか、曾子は魯鈍の如しとか、又老子の所謂、大辯は訥なるが如しとか、いつたやうな言ひかたと同意で元より始めつからの、愚痴をいつたものぢやない。卽ち一代の法をよく〳〵學すと雖、一文不知の尼入道の無智の輩に同じうせよとの仰せが、愚痴に立ち歸へりし有樣であるのぢやから、禪宗で所謂、悟已而同未悟の意である。

『悟ても柳は同じ綠かな』とか又は夢想國師の、

悟とて常にはかはる思こそ
迷の中の迷なりけれ

の歌の通りである。彼の禪家の、百尺竿頭に一歩を進めよといふも、卽ち此處のことで、百尺頂上の悟の竿頭から、猶は一歩を進むとすれば、卽ち竿の本に立ち歸る外よりはない。竿の本に立歸りし處が、悟り已るといふと未悟と同樣で、其の未悟の境界が、やがては本心到達の有樣、本心到達の有樣が、直に還愚痴の狀態といふ處ぢや。してみると念佛の行者たるものは自然のうちに、三歸三寶の實修をなしつゝある譯である。是れが三歸の歸といふ一字の說明である。

次に依とは、よりかゝるといふこと、何に依りかゝるが如く。本心に依りかゝれとのこと、卽ち三寶の柱や、杖に依りかゝつて居れとの意味である。彼の基督敎ですらも、『眞理は宇宙を支ゆる「オームナ」(柱)にして、之に依り賴むものは、靈と眞とを以てせざるべからず。』(約翰傳四章二十四節)とまで云ふて居る。其處で、彼れの信仰といふ語、卽ち「ヘエミン」He'eminてふ希伯來語の信ずるといふ言葉は、「アーマン」卽ち『支』ゆるといふ意味で、『オームナ』といふ柱の語根から來たものであると、說いてあるじや。してみると彼の基督敎で、「アーメン」云云と唱へるのも、今の支ゆるといふ『アーマン』の變化語

で有て、眞實の神に眞實を以て、依りかゝるといふ意味となるのである。東西、教は異ても、中には如此く相ひ契合した點も認め得らるゝのである。故に、佛教では此の三寶といふ、宇宙の大眞理を以て太しき柱ともして、之れに歸依せよ、之れに依り掛れとの仰せである。總じて事物には。眞實絶待の獨立といふことは到底出來得るもので無いから、是非とも依り合ひ持ち合ひといふことを致さねはならぬ。例せば彼の廣大なる地球や月球や太陽などが、無限の空間に克くまあ懸てあることよと、不思議に思はるゝも、是れは相互に遠心力と吸心力との二力で以て、言はゞ相互に依り合ふて居る結果となつてあるから、衝突もせず落下もせず、安全に斯くは運轉して居るのである。梅花の馥郁たる、樹木に依りかゝれば、いつしか暗香浮動の匂ひが、袖や袂に移るやう、又泥土に塗みれたるベンナや腰掛に依りかゝれば、衣服が、穢れるやう、本心の德に依りかゝると、本心より遠ざかつて、煩惱妄念に依りかゝるとの相違で、迷悟の差別が生じて來るのである。依りかゝるといふ事は、勿論必要ではあるが。惡い物に依りかゝらないで、善い物に依りかゝらねはならぬ、彼の蛇は其の體既に曲りに曲りたるものではあるが、是れでも竹筒に入れると直に眞直ぐとなるでは無いか、加藤清正の論語を愛讀せし時にも、彼の猿猴さへも論語を讀んだとある。清正海に航して、肥後に歸る時ぢや、天地丸といふ大艦に駕して居られたが、艦の艙間で以て、日日論語を讀みては、朱墨を以て自を句を附けられた。然るに公の愛育せられつゝある猿猴も、又遊戲し

つゝ少しも側を離ないで居ましたが、偶ま公が起ちて厠に行かるゝや、例の猿猴その其の不在を閧ひて、窃に朱筆を把て、巻上を縦横に塗抹した。公座に歸りて之を覩給ひ、あゝ有難いものぢや、畜生ですらも日夕さし依るものに依て、斯る讀書のまねをはするに至た。本んに汝も又聖人の道に志あるかと、仰せられたとある。然や是れたに依て、各々に於ても本心の德たる三寶にさし依るやう、致さねはならぬ。卽ち梵網經序文に、「夜は心を攝めて三寶を存念せよ」と、御示しありしも、此處の譯である。以上は歸依の二字を話したのであります。

佛寶の解說

佛寶、是れから一體三寶中の、佛寶に就て辯じませう。偖て、本心の德たる佛寶の佛とは梵語で、具さにいふと佛陀といふ。之を漢語にては覺者と飜譯するので、日本の國語では、之をさとれる者と訓譯致します。さとれる者とは、抑も何をさとれるのでせうか、言はずと知れた、自心を自心の通りに了解證悟することで、其の自心といふのが、卽ち一切衆生本具の心性であつて、此の心性をは、心性其の儘にさとるのである。歸らは衆生本具の心性、本來の面目は如何といふに、心性は元來心念の相を離れ、言說の相を離れたもので、無始より以來、迷悟の境界もなく、生死の差別もなく、一立古今然として、常住不變の有樣である。故に迷へることもなければ、又悟れる要もない。既に生滅起伏の相も無いから不增不減である。喩へていふと、空間のやうであつて、空間其物は、既に長いの短いのといふべき、長短廣狹大小の差別の、心念も言說も離れてしま

心性本來の面目

不增不減と空間論

うて居る。又、春が來て樹木が生長しても、空間は一尺も延びない、卽不增である。冬が來て草木は枯凋しても、空間は一分も縮まない、卽ち不滅である。大地震や大噴火で、江河山嶽は生滅起伏しても、空間其物は一立古今然として居て、常住不變本の儘の姿である。黑雲暗霧が空間を覆ふた處が、一點の汚點も得附着しないのであるから、空間其物は、既に汚れるといふ境界以上に居て、醜汚の相を離れて居る。又、日輪晝を照らし、月輪星林光輝を集めて夜を照らしても、空間其物は、既に淨くなるといふ境界以上に位して居るから、淸美の相を絶してある、卽ち空間其物は淸淨ともいへず、醜穢ともいへず、實に言亡慮絶の無相であると申さねばならぬ。

夢の世と思ふも今の迷ひかな
もとのうつゝのなしときくには

いづくより生れくるとも無きものを
かへるべき身と何になげくらん

さかぬ花いでぬ月ぞと見る時は
心にかゝる春秋もなし

など詠じ給ひし夢想國師の御思召は、卽ち此の常住不變にして、絶待平等の心性の上にあるのである。斯くの如く、心性の當相は、常住不變で、絶待平等のものであるから、從て又因

緣に依ては、千變萬化して、絶待差別の姿を顯はしてくるのである。喩へは、空間其物は長短廣狹が無い、其儘で而も又長短廣狹に應ずるものである。空間其物は光もなく暗もないが、而も月指し昇れば空は忽ち明かに星稀れになつて、光明世界となり得るのである。又黑雲覆ひみつるといふと、空は忽ち黑白も分かぬ眞の闇夜となつて、闇黑世界を現じ得るのである。卽ち平等であればこそ、斯くは差別もすることになり得るのであるから、差別の其の儘で平等なので、平等の其儘で差別なのである。故に、又不來不去の儘で去來もあるのである。不增不減の儘で增減もあるのである。如此き妙境を以て居るものが、衆生本具の心性と稱するものであります。

大願の聖人淨土より來る。來といふも實に來なし。深心の凡夫淨土に去る、去といふも實に去なし。彼より此に來らず、此より彼れに往かず、而して聖凡會遇して、兩ながら交際し得ることは何ぞや。彌陀の光明は淨滿月の偏く十方を照らすが如し。水淸くして而も淸なるときは、則ち月全體を現す。月、水を取て、而して遽に來るに非ず。水濁て、而して動くときは、則ち月、定光無し。月、水を捨てゝ遽に去るに非ず。水に在るときは、則淸濁動靜あり。月に在るときは、則ち取捨去來なし。乃至一切の佛を知る、猶し影像の如く自心は水の如し。彼の諸の如來は此に來至せず、我れ彼に往かず。我若し安樂世界の阿彌陀如來を見んと欲せば、意に隨て卽ち見たてまつる、是れ知りぬ、衆生の注念定て彌陀を

見奉ることを。彌陀の來迎と極樂は遠からざることを。

と、『淨土指歸』に記るされてあるのも、卽ち此處の理合であります。之を要するに、自心所具の心性は、我國の八咫鏡の正直を德とし居る如きもので、鏡體其物は平等にして、美醜好惡の差別の相は忽論絶して居るのである。既に鏡體其物に、美醜好惡の定相が無いから、小野小町や支那の西施が來れば、沈魚落雁閉月羞花の艷麗微妙の美相を變現し得るので、鏡は至極正直である。又板額や支那の無鹽といふ醜婦が來れば、『燒きもちは燒かねど顏はくすぶりて鼻はひしやげて尻はほつてり』の醜相を映現し得るので、鏡はなか〳〵正直である。いかに賄賂を使ふても鏡は正直だから、醜相を美相には現はしてくれない、如何に立腹させはとて、鏡は正直だから美相を醜相にも變へて現はしやしない。公明正大にして、而も物に應じて千萬無量に映し別ける處は、眞に本具心性の德を喩へ得て妙である。然而して佛とは此の心性を心性の通りに、悟入して證悟し已り給ひし、所謂覺者でましますのである。さとれる者でましますのである。故に佛の眼に在ては見、耳に在て聞き、鼻に在りては嗅ぎ、口に在ては言ひ、手に在ては把り、足に在ては行きと、いふ工合ひに、物に應じ緣に隨て、千變萬化縱橫無盡に、應用自在で、而も樂を樂として其の樂に愛着し給はず。苦を苦として、其の苦を執着し給はず。洵に鏡體の正直なるが如く、公明なるが如く、正大なるが如く、應化無窮、隨類無邊にして、明々了々たる妙境においはしますのである。道元禪師の歌に、

水鳥の行くもかへるもあと絶えて
されども道はわすれざりけり

の如く又、天衣懷禪師の、

如雁過長空影沈寒水雁絶遺踪之意水無留影之心。

と申された如く、如來至極の妙境界は、卽ち斯うしたものである。

之に反して凡夫は如何である。同じ心性は具備して居りながら、而も心性を心性の通に悟入し證悟して無い悲しさには、如來のやうに、應化は公明に隨類は正大に、なか〳〵まるらぬのである。所謂凡夫は、至極不正直で、四苦八苦充滿の苦の世界をも、苦とも思はずに還て反對に樂なりと確信して、愛着の念なか〳〵強い。又不淨醜穢の人身に對して、之をしも猶は美麗なり、清淨なりと、執着して、紅粉惟れ事として居る。此の如く眼の色に對しては、忽ち分別の心を起して、意に叶へは直に愛着し、叶はざれは忽ち厭憎する有樣は、實に衷心相互に恥しい次第である。二と二と合せば四ではあるが、不正直なる凡夫は、利欲の爲めに四圓の品物でさへも、八圓の九圓のと僞りて賣り附けるのである。鹿は鹿で、馬は馬に相違が無いが、乍併鹿をも馬にしてしまふたこともある、卽ち秦の世、二世皇帝の時、中丞趙高といふ人は、秦の權を自分で自由にしやうと思ひ、もし群臣の聽かないといけないといふので、乃ち群臣が、いかに自分の言を用るるか否やを試みんとて、鹿を持參して、二世皇帝に

獻上しました。そして之れは馬で御座ると申上げた。皇帝笑ひて、丞相誤るか鹿を指して馬となすとはと、仰せられて、近侍の群臣に何うじや、是れは鹿たらう馬ぢや無からうと申された。群臣も心では眞に馬鹿にした話で、勿論之れは帝の御言葉の通ぢやが、さりとて政權の隆々たる趙高殿が、馬と云はるゝからには、御同意しておかねば、後のたゝりが恐しいと、云ふので群臣皆な〳〵之れは確かに、馬で御坐ると申上けたとある。さあ鹿は、鹿に間違ひ無くても、權家に媚びんとしては、遂には之をも馬にしてしまふ世の中である。斯くばかり、不正直なのが卽ち恥しくも、相互の凡夫の當相であるのである。是に於てか、無始以來自心本具の心性の德より遠ざかりに遠ざかつて、立ち歸るべき本具心性の本家をも知らずに、三毒五欲の煩惱に驅使せられ、竪に三世を作り橫に六道を認めて、生死の苦海に頭出頭沒、果てしも無く今日といふ今日まで、斯くの有樣で居るのである。さすれは、今、佛寶に歸依せよと勸めるは、自心を自心の通りに合點せよといふのである。心性の德を認知して、心性の德に契合せよといふのである。詳く云へは、如來樣の通りに、公平に執着なしには行かずとも、せめては不淨を不淨として、極樂の淨を願ひ、苦界を苦界として娑婆の苦しきを厭ひて、端心正意と鏡體の正直に一致するやう、致しませうと御歸依申すので、始めて茲に歸依佛竟と相成る次第であります。

× × × × × × ×

歸依佛竟の眞意

備考語學上より見たる「さとり」の意義

◉備　考　さとりの和訓

和訓さとりの意義を考ふるに『さ』とは『しか』の左樣と書くべからず、必ず然樣と書くべきである。次に『とり』とは取りの字にして、さとりとは『然る通りに取る』といふ意義である。苦を苦として取り樂を樂として取り乃至惡を惡として止め善を善として行ずるが卽物事を然る通りに取たといふもので斯くするものをさとれる者と申すのである。約音とは二音の約りて一音となりしものにて二音の上なるを父音といひ(原音ともいふ)又下なるを母音(次音)といふ。而して約りし音を歸音といふのである。

『しか』の二音約りて『さ』となるは左の如し。

さ	し	か
歸音	父音	母音

さ	く	て
そ	せ	す
母音	き	か

此の如く父音の行の五字と母音の行の五字とを相並べて扨父音より母音に渉り母音と同列位なる父音の行の字を歸音とするのである。

往生の意義

往生淨土に就て

佛寶の下に於て不來不去といふことを說いたが。往生淨土といふ其意義を實大乘の意を以て解釋すれは如何といふに住生の生とは、第一に無生にして而して生であるといふこと、

第二に生にして而して無生であるといふことゝの、二點から心得ねばならぬ。

無生而生　佛教の極意は中道實相を以て主義としてあるから平等といふも差別に卽しての平等。差別といふも平等に卽しての差別で、一波揚がれば其れが直ちに四海の波、一瀾酌めば其れがやがて百川の水であるといふのである。指方立相を旨とはするも無方の方無相の相で中道に卽して居るのであるから念を注ぎて西方に思を致しても心性の己心を離れざる西で無方の方である。『極樂遠からずして而も十萬億刹の西に構へ彌陀己心に在て一座華臺の形を現す』と大師が大原問答で仰せ給ひしは卽ち此處の理合である。故に十方に遍滿したる西方といひ得らるゝのである。一念心遍にして一塵亦法界に遍滿であるから十萬億刹も唯の咫歩の間のみである。然れば念を以て唯の念とし生を以て單に生とするは常見の所失、無念を以て唯の無念とし無生を以て單に無生とする是れ邪見の所感。故に念而無念生而無生なるを第一義諦とするのである。是を以て終日念佛するも而もこれ無念の念佛であつて單の念佛では無い、故に念佛は無念に乖かないのである。燦然として往生するも而もこれ無生の往生であるから單の往生で無い。故に往生にしても無生に乖かないのである。其處で凡聖は各自位に住して居て而も感應道交して居る東西相ひ往來せずして居て而も心は淨土に往生するのである。

生而無生　前段無生而生とは平等卽差別の意にて說明したので今は差別卽平等の見地から

說明するのである。水と氷とは同體同性で二者平等ではあるが其の平等であるといふて居るうちに而も水は流動體氷は固形體の差別があるでは無いか。如何はせ二者の平等を主張しても水の流動的氷の固形的の事實を否定し了ることは出來ないのである、其の平等より言へは東西相ひ往來せずして居て淨土に往生するといふけれども其の氷と水との差別から申せは矢張り捨此往彼蓮華化生の來往の事實は燦然としてあるのである。故に十疑論に云く智者燦然として淨土を求生し生の體不可得に達する是れ眞の無生なり。生の外に別に無生ありといふに非ず。淨名に云く諸佛の國及び衆生空なりと知ると雖而も常に淨土を修して諸の群生を教化す此れ之の謂なりと。其れ故に諸法の平等といふことに體達すれば指方立相の淨土の相にも住しない、又既に斯くも無相の相と知りつゝも常に念佛するといふと則ち平等にも滯らずして平等差別の二邊を飛び越ゑ中道實相に從容として念々が彌陀の法身に契合してゆき。聲々が薩婆苦海に流入して參る譯だから臨命終の曉には決定して往生することが出來る何んと難有い尊いことでは無からうか

× × × × × ×

× × × × × ×

法寶、法とは、法度法則の義で、各々所具の心性の法度法則を稱して、法寶とするのである。其の心性の法度には、任持自性と軌生物解との二義が有て、法則となつて居るのである、

任持自性とは、天地間の森羅萬象には、皆な夫れ〴〵自性を任持して居るといふことで水は物を濕らす自性があり、火は物を燒く自性があり、陽電氣同志は、相互に衝突する性質を持て居る、陰電氣同志も、又相互に衝突する特性を持て居る、陰陽の兩電氣ならば相ひ包合するといふ性質が有て、少も衝突はしないといふ。又梅は酢いし唐辛は辛らいし砂糖は甘いも、鹽は鹽はゆいし、皆な悉く自分自分の持前氣質が、異て持て居るのである。此の如く柳の綠りなるが如く、花の紅なるが如く、男は剛に女は柔に、君は仁慈に、臣は忠節に、親は慈愛に、子は孝順に、夫婦は和合に、兄弟は友愛に、朋友は信愛にといふ工合に、皆な夫れ〴〵自性を任持してあるが、之れを心性の法度法則といふのである。而して法度法則は、私心を以て曲げることの出來無いものので、得手加手に出來無いのが、卽ち眞の法則である。故に水を以て物を燒くことは出來ず。火を以て物を潤すことはならず。砂糖を酢くしたり、鹽を甘くしたり、なぞ、することも到底出來ない相談である。卽ち二と二の和は、何處までも四で無けねばならず、三角形内の三角度の和は、必ずや二直角で無ければならず、といふやうに、天地の法度法則は、如何に東郷大將の起死回生の活力を以てしても、如何に乃木大將の難攻不落の旅順を落した狂力を以て變化したり、私曲したりなをすることは、到底出來ないのであります。是れ如來にさへ三不能のあるといふ所以である其の法度を曲げ得られ無い、法則を變じ得られ無いといふは、畢竟ずる處、萬物には夫れ〴〵自性を任持して居て其の自性其

物をは、變化し得ることの出來無いからである。して見ると、萬物は必ずや、各々の持前通りの自性を順守して、其の自性通りに動くといふこと、卽ち親は慈愛に子は孝順にといふやうに、其の任持しつゝある性質のまゝに、動かねば無らないのである。家を建てるにも橋を造るにも、必ずや二二が四の規則、三角形の内角の和は、二直角といふ公理に、何處までも順守し屈從し行かなければ、草の庵も小川の土橋も、建造し得られ無い如くに、人として社會に處するにも、又親となり夫となりて、家庭を造るにも、是非々々任持自性の法度を順守し、法則に屈從して行かなければ、ならないのであります。彼の近親結婚は此の心性の法則上許るすことの出來無い、違法の行ひである。故に强ひて行へは、白痴や、不具者が生まれる、又閨門の亂れともなる、一夫一婦も、此の心性の法度上、正當なる理法である。然るに强ひて、一夫多婦の蓄妾主義を實行するといふと、中菩の醜閨門の穢、之れより出で來たることがあるのである。茲に法竇を捨てゝ、順守せざりし違法の結果に就て、太田錦城先生の筆に聽くべきことがあります。我々は涙を飲んで。之を聞かねばならぬ。

遠き昔の兄弟夫婦となり玉ひたるは、別論なり。近く堀河院の中宮篤子は、後三條院の第四女にて、父方の姑なり。年、帝より長ずること十九歲、二條の中宮妹子は、鳥羽院の皇女にて、是亦父方の姑なり。今は民間にても其等の事は爲さず、されは教の民を遷すは如何樣にもなるべき事なり。偖又二代の后の事はしばらく措て論せず。後宇多皇后聆子は、

後深草の長女、從兄弟なり。永仁の初、龜山上皇密かに通じ玉ふ、姪なり子婦なり父子麁を聚にするなり、又後嵯峨の皇女ともいふ。されば、後宇多の姑なり。龜山法皇には姉妹なり。二條局と云しは、後宇多之を嬖して良治親王を生めり。後醍醐之に烝して、世良親王、世尊法親王を生めり。父子麁を聚するなり。三條局と云しは、伏見院之を嬖して、道熙法親王を生たり。後伏見之に烝して。長助法親王を生みたり、是亦父子麁を聚にするなり。龜山の宮女民部卿三位は、後醍醐之に烝して、祖孫麁を聚するなり。中務の醜聞門の穢此の如し。故に元弘建武の大亂を生じて、王室は益卑微になり給へり、可畏の甚しき也。後醍醐帝の準后は、寵愛し玉ふて、其腹に出生し玉へる、義良親王(後村上なり)を立玉はんと思食せども、關東より持明院派大覺寺派二流の帝王、十年更代の法を立てゝ、我子に世を嗣がせ玉はなんと云ふこと、思も寄らざることなり。故に北條家を滅さんと、御隱謀の念起りしなり、是れ元弘建武の大亂の根源なり。亂匪降自天生自婦人と聖經の言、萬世に涉て違ふことなし。此の準后の尊氏直義に賄賂を納れて護良親王を讒訴し幽囚となし、直義の枉害せるに至りしこと、王室不振の第一事なり。其罪最も深し。

斯く史上の事實に徵してみても、法寶違反の結果は、恐しいもので、天子將軍とても、少しも容捨はしないのである。且つや心性の法度は、一切衆生の心法であるから、彼の畜生の如きすらも、自然と自己心性の法則に從ふ有樣なをは、還て人間も及ばない位で、いや早や御恥しい、次第である。其れは賴山陽の記るしたる事實文編に、左の一記事がある。

浪華に、夫婦與に居る者あり。夫、惡疾に罹り、而して妻の之に事ること、甚だ謹めり。夫、其の他に適かんことを、勸むれども、未だ肯せざるなり。一日、屋後を觀るに、其壁腰、蔽ふに杉皮を以てし皮裡に一螻蜒あり、釘に貫かれて猶は蠢々然たり。之を怪み數々驗視するに、其雌往來して、之に哺す。故に久しくして、而して死せざるなり。妻爲めに悽然として、以て夫に告げて曰く蟲豕すら且つ其の儷を護りぬ。況や人をや。良人、未だ死せざれば、妾將た何くに之かんと。夫猶は自ら安せず。因りて速に死なんことを計り、河豚の人を殺すを聞き、買ひて而して之を食へば、血を吐くこと數升にして、而して其疾立ところに愈ゆ、終身夫婦たりき。

卽ち彼れ蠢々たる一介の蟲類ではあるが、夫婦雌雄の相愛の法度法則は、如此きものにまでも、嚴として存在して居て、任持の自性に從ふてゆく有樣は、眞に心性の法寶たる所以が解るのである。以上は任持自性に就て辯明したのである。次に軌生物解とは、軌は御手本といふことで、心性の上から申せば、森羅の萬象は能く軌範となりて、物の解了を生じて來るとの謂である。換言すれば、宇宙の萬物は能く智識を生じさす軌範であるので、彼の蘇東坡が云ひし如く、溪聲は廣長舌で、山色は清淨身であるである（溪聲廣長舌山色清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何擧似人）故に飛華落葉を觀じて、世は無常なりとの、解知を生ぜし緣覺もある

よし。又

かくしても住めば菫の花にさへ
憂を忘るゝ蓬生の宿

と、一輪の菫花の、知足の解知を生じた古人もあるのである。故に活眼を開いて、心性無邊の宇宙の萬象を觀渡すといふと、皆な能く軌範となつて、解知を生じさすので、其の解知や卽ち萬世不易の一大法則となるのである、彼のニュートン引力の發見は、如何である。唯一個の林檎が、軌として物解を生じさせて、物理學上、天文學上、重大なる學理たる、宇宙に於ける引力なるものゝ大發見をなし得たのでは無いか、アイサックニュートン氏、時に年甫めて廿三歳、獨、庭園を逍遙した處が、不意に樹梢より、一個の林檎が、憂然聲をなして落下し來た。沈思にふけりしニュートン氏は、此時も尙は『空間と運動』に關しての研究に忘らざりし折りも折りとて、遂に斯る林檎落下の一小事實にさへも、心を傾け意を注ぎ來て、正に一大眞理の伏在することを觀破したのである。引力、先づ地球の中心に向ふて諸物が落下する傾向。此傾向に關する問題は、當時既に一般の學者に認められて、あつたのではあるが。彼等は唯此力は地球に接觸する物體の上にのみ働くものと知られて居て、其地球以外の天體、卽ち月や星や太陽の引力といふ觀念は、此のニュートン氏の前までは、何人にも想到だもせられ無いたのである。そこで、ニュートン氏想ふやうには、此の林檎を樹頭の小枝より引着けたる力は、更に又幾千萬倍高い位置よりしても、亦能く之を引き着けることが出來る筈である。して見れば宇宙間到る所に、此の引力は働きつゝあるに相違が無い譯だ。之をヒマラヤ山の絶巓に至るとしても、毫も此力に減殺を感ずることは無い譯である。然則ち人の到り得られ無い、月球や星林にも、此力の及んで居ることは、明了であるから、常に月球をして、其軌道に沿て廻轉させて、吾地球から、一定の距離以外に、逸しないやうにして居るのも、全く此の一引力の作用に、相違ないと推論し來たのであります、何んと有難い心性では無いか。彼の日露の役、敵は屢、輕氣球を揚げて、日本軍情を探たが、其の輕氣球の發明は如何である、ステフエン氏、一日火の傍に在りしに、ストーブに掛けありし、リンネルの襯衣が輕暖なる空氣の上昇につれて、俄に上へ飛び揚がる樣子を觀破して、偖は空氣よりも一入輕い瓦斯を用るたなら、必ず天空へ飛行することが出來るに、相違無いと想到して、遂に輕氣球の發明の端緒を得たのである。何んと尊い法寶では無いか。其他、ガリレオの振子の振動を見て、時間測度の原理を發見したる、ワットの鐵瓶の蓋の上るを見て、蒸氣機關を發明したる、數へ來れば、實に僕を替へても足りない位である。

擧世皆宗李杜詩、
不知李杜更宗誰、
能探風雅無窮意、
始是乾坤絶妙詩、

といふ有樣で、宇宙は軌範である、萬象は法則である。然れば善因善果、惡因惡果の因果と

佛陀の發明

いふ法則も、又法體恒有（物質不滅）の教理、業力不滅（勢力保有）の教義も、諸法實相の至極の法門も皆是れ前來述べ來りし、任持自性軌生物解の一方面から、無邊法界の心性の上に於て、發見發明したる、萬古不易の一大法寶と申すものであります。故に大聖世尊が、八萬四千の御法門を御發明遊ばしたは、如此き宇宙萬象の無邊の心性を師匠として、金剛座上に於て獨證獨悟遊ばしたのである。然れば佛教で說く處の法寶とは、萬代不易の宇宙の法則を以て、眞の法寶としてあるのであるから、宇宙以外の者ならばいざ知らず、苟も此の宇宙以內に棲息する以上、物といふ物、人といふ人は、悉く此の法度法則に違戻しては一日寸時も居られ無い筈なのである、夫故に法寶に歸依をせよ、常住不斷に之れに依りかゝつて居れと說勸むる所は、以上の如き甚深の意味より申すので有て、必然的に順守せねばならぬ、眞個の珍寶であるのであります。然れば今日より以後は、斯る尊い法寶の杖や柱に依りもたれて、自性のまゝに正しく活動致しませうと、御歸依申すので、茲に始めて歸依法竟と相成る次第である。

歸依法寶の眞意

僧寶の解說

僧寶、僧とは梵語の畧言で、具さには僧伽といふのである。其の伽を省いて、單に僧と稱し來たので、僧の字の音を取て、其の義は取らない。然るに世俗では、僧といふ字義に意味ありとして、偏狹なる漢學者などは、出家を僧と呼ぶは、元來出家も元は普通の人間なりしが、今や乞食して世を渡り行くから、普通人間では無くなつたのである。其處で人偏に曾と書きて、曾て人間なりしも、今や人ならぬ非人乞食であるといふ意味から、僧といふのであるなどゝ、嘲罵的に、牽強附會なる說明をする者もある。如來が淸淨自活の法として、乞を以て自活せよと、出家人に仰せられたのが、遂に後世には一種の弊害を生じて、出家を以て世渡る橋となし、行乞を職業として、天下の遊怠民となるに至たものであるから、斯くは嘲罵も受るやうになつたのは、寧ろ自ら招きし過であつて、慚愧至極である、彼の淸少納言が『法師はゞ世にうらやましからぬものはあらじ人には木の端のやうに思るゝよ』といひけん、洵に慚汗背を流すばかりじや。

淸少納言の僧侶觀と慈鎭の歌

是れをしも誠の道と思ひしに
猶世を渡る橋にぞありける　　解脫上人歌

何卒、世渡りの橋ならで、彼岸に渡る橋と致したいことである。

和衷協同

さて其の僧とは、先にいふ通り梵語で、具さに僧伽といふ。之を漢譯して、和合衆といふのである。能く世間でいふ處の、和衷協同と同意義である。而して其の和衷協同は、一切衆生所具心性の德分であつて、此の心性が緣に隨ふて宇宙の萬象を變現して、居るのだから、從て宇宙萬象、有情も非情も、皆な悉く和衷協同の性質を持て、和合の形相を顯はし、和合の上に活動しつゝあるのである。先づ考へて見らるゝが善い、和衷協同といふことの反對は、不和衝突である。彼の先章に所謂『打ち解けて氷と水の中直り』といふやうに、氷が水と和合

するに至るのは、氷と水とが元來平等にして不二の性質があるからである。故に和合の根底は、平等不二(中道的)の性に歸着する。されば之れと同時に、不和衝突の根底は、差別不一(偏頗的)の性質にあるので、二物が何處までも、自他と別れ彼此と離れて、絶對的に差別したきりの物であるといふと、所謂何千年待た處で、到底其の二物の調和は見得べからざるものである。其處で心性其物が、平等ばかりか差別ばかりの、唯一方ぎりの性質であらは、到底心性の上には和衷協同の美德は、見得ることの不可能な譯であるけれども、佛教所說の心性は、唯平等唯差別のものでは無くて、卽ち常々示す通りに、平等卽差別差別卽平等の、中道實相上のものであるから、遂に其の隨緣の諸法、卽ち宇宙萬象も、皆悉く和衷の形を現し、協同の働をなしつゝあるのである。故に僧寶とは換言すると心性の平等卽差別、差別卽平等のことを指して申すと、合點されたいのである。

總じて、和衷とか協同とか調和とかいふことは、二物が平等に卽したる差別的の物であればこそ、二物は二物のまゝにて兩立しつゝ、能く一致し得て始めて調和となり、協同となり和衷となり來るのである。萬一其異なれる二物の中間に、平等的關係が無かつたならば其の二物は何處までも衝突のみして、一致することも調和することも到底出來無いので、相ひ和せず相ひ容れない結果は、遂に一方の破壞滅亡を見ねば、止まないのである、例を以て申せば、男と女とは性の上に於て、異なれる差別的二物ではあるが、而も其中間には又平等的關

係を持て居るものだから、此の二物は至極克く一致し調和して、和衷協同の實を擧げるのである。謂く男女の平等的關係とは何ぞ、是卽ち二者の生殖欲(色欲)と、生存欲との關係が、相互にあるからである。小野小町に向て文屋康秀が三河椽になつて、『あがた見にいでたゞじや』とて、誘ひし時に、

わびぬれば身を浮草の根をたえて
誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

と返歌したやうな工合に、康秀と小町との中間には、平等的に『戀愛』の情が關係して存在するから、斯く一致し調和することが出來る。世に夫婦が能く調和して温かき家庭を造るのは、心性和合の德の現れである、僧寶和合の働きである。君主は船で臣民は水で、二者は異た者ではあるが、能く船と水との調和を得て、船は船の働き水は水の働を各完うすることが出來る。山水の景色でも又其通り、山だけでも水だけでもいかぬ。白沙青松長汀曲浦、皆な山と水と相和合した處で、景色が出來てくる。

卽ち日本三景と稱せらるゝ、松島も宮島も天橋も、皆夫れ〳〵山水兼ね調和して、僧寶の御蔭で景色が妙絶となつてをる。

千利休は、茶道の宗匠であるが、始め茶儀を左海の人紹鷗に學んだ、紹鷗は利休の才を試みやうとて、命じて庭中を掃除させた、利休受けたまはりて往きみれば、茶亭の前、帚根拭

ふが如くで、林樹濶濯青翠滴らんとして居て、纖塵も留めてない。斯く既に奇麗に掃除が行屆てある以上は、流石の利休も手のつけやうが無い。

竟に林中に入て、試に一樹を搖すといふと、忽ち淡濃參差として、落葉風に翻り、片々として地上に點して、庭石苔草の上、一段の風趣を添へた。乃ち先生の處へ復命して、謹みて命を奉じ掃除を致しまして、御座りますと申上げた。既に立派に掃除の濟んである庭前、彼れは如何やうなことをなせしかと、先生の紹鷗が往て見らるゝといふと、帚目清き庭中の、石や砂や苔の上に淡く濃く紅葉した落葉が墜して有て、風景にも云はれ無い感じがした、あゝ何した才子であると、忽ち其の奇才を賞して、茶儀の祕訣を傾けて、皆授け畢たとある。何んと而白い話ぢや無いか。是れが卽ち清き庭と、風趣ある落葉とが、調和して一種言ふ可らざる雅趣を生じたので、是れも僧竇和合の德から斯くなつたので、言はゞ利休は、僧竇を掃除に應用したのである。坊主ばかりを僧竇と思ふて居たら大間違で、庭前掃除の上にさへ、僧竇があるのである。

詳言すれば、落葉は元來塵芥であつて、穢い筈の物で、箒木で掃かれるものである。然に清き庭中と、此の塵芥たる落葉との、二物の異なれるものが、奇妙にも調和した處で、斯樣に雅致ある風趣を生じたのであります。

斯く前來引例したる君臣の中間には、平等的の關係としては、君主は臣民の補佐に依て、

國家を隆盛にしやうと思ひ、臣民は君主の盛德を賴みて、國家を平安ならしめんとしやうと想ふ、二者相思の衷情が、均しく存在して有て、茲に始めて差別したる二物の上に、調和を見得らるゝのである。是れから推して行けば、兄弟の調和、朋友の和合、國と國との平和なり、皆其の中間に相ひ思ふ處の、等しい平等的關係があるから、立派に調和が出來和合が出來、平和が出來てくるのであります。

有情ばかりでなく、非情物でも又亦其通りで、太陽と地球、月球と地球、諸星と地球、是等が今日衝突せずして、同一軌道を保ち居て、相互に克く調和し、和合して、參りつゝあるのも、皆兩者の中間に、遠心力と吸心力とが存在して居て、平等的の關係が具備してあるからである。此の如く山河草木、大地大海等の、宇宙森羅の萬象は、皆是れ心性平等の發現である。故に其の差別したる當相の上には、悉く平等的の關係が離れないで存在してあるから、萬象は調和和合を以て、本來の面目として居るものと、合點せねばならぬ。恰も覺者の目から視て、『我々は死ぬる爲めに活きて居るのでなく、活きる爲めに死なゝければならぬ』と喝破したやうに、宇宙の萬象は、時として衝突や破壞があるけれども、其は調和を得んが爲めの衝突、平和を得んが爲めの破壞であると、覺了せねばならぬ。晴天とならんが爲めに、雲は曇り雷は鳴りて、雨は降り來るので、目的は卽ち晴天白日の上にあるのである。司馬法が云ひし如く、『以戰止戰雖戰可也』で、戰爭をする爲めの戰爭では無く、平和を得る爲めの戰

爭であるから、目的は矢張り和合や平和の上におかれてあるのである。故に繰りかへしていふ、宇宙萬象の本來の面目は、調和である和合である僧寶である。是れ列強が戰備に汲々としつゝ、其傍に萬國平和會議のある所以で、人は今日の世を武裝したる平和といふけれども、是は平和を得んが爲めの武裝と換言せねは至當の言とはならない。然あ斯うして見るといふと、佛家に僧寶を立てゝ、各々に歸依僧とて、僧寶を珍重せしめ、尊敬せしめて、之れに歸依せよと勸むる深意が、略ぼ了解されるであらう。

然るに今日社會や家庭の有樣は如何である、平和を得る爲めの戰爭ではなくて、戰爭の爲めに戰爭するといふ有樣、調和を見んが爲めの衝突ではなくて、衝突の爲めの衝突といふ現狀、師匠は金で學問を切賣りに學校を經巡ぐりて、師匠らしき德はなく、弟子は月謝で學問を買ひ取る花客で在て、弟子の禮なく、師弟囂々として衝突し排擠して、相互に惡德をはぢくり合ふといふ狀況である。親は子を喰物にして、子は親の早死を希望しつゝ保險金をねらひ、夫は妻を玩弄消欲の器物と視なして、閨房一人で猶しも始末がをへず、紅燈の下に銀釵ゆらぎ、三絃しめやかに、音させて、燭を秉て夜遊するを、紳士の本領と考ふるといふ家庭の狀態、怨恨嫉妬諂詐呑噬、誠に痛ましい次第であるでは無いか。是れ畢竟萬象本來の面目を忘却し去て、僧寶の妙趣を覺了しないからである。何卒是等の迷を翻して、歸依僧竟と成て貰らひたい事であります。

第四　懺悔

贊題、心地觀經云、若能如法懺悔、所有煩惱、惡皆除、懺悔能出三界獄、懺悔能完菩提華、懺悔見佛大圓鏡、懺悔至於寶所、

◎江河の地、爛壞腐尾縱橫接連すれども、而も人之を掬して飲む。唯夫れ江河は大にして爛壞目に觸れざるが爲めのみ、社會の廣き人類の多き、罪惡の爛壞腐尾は、天下に橫溢すれども、容器の大なるが爲めに、唯それ人目に觸るゝことの稀れなるのみ、人天是を逸視すと雖、佛陀の慧眼よりすれば、盆盂の水に鼠尾の一曳を見給ふ思ひあらん。故に勉めて人類の罪惡を揚抉して、自家の爛壞腐尾を自覺さすべきなり。

◎此の懺悔を詳說して後、受者をして懺悔の式を行はしむを可とす。

懺悔

漫然、世を見渡し見る時は、紳士あり學者あり、貴婦人あり高僧あり君子あり偉人ありて、蘭菊美を競ひ紅紫色を衒らふて、世は錦繡を延べたやう、何の汚點も、何の醜狀も、少しも見當ら無い。唯もう奇麗で立派であるといふより外は無いのである、卽ち『是れは〳〵とばかり花の吉野山』といふ有樣である。

肉眼で、林泉一杓の眞清水は、誠に清淨無垢であるけれども、一度之を精巧極緻の顯微鏡下に移し視るといふと、前の清水は今や濁水と變じて、無數の穢塵無數の汚菌が含有され

てあつて、忽ち嘔吐を催さんばかりに、今更のやう臭氣が發して居るかの如くに感ぜらるゝのである。

畢竟、凡夫は淺墓なる肉眼で、然も體格檢査や徴兵檢査のやうに、せめてもに赤裸々たる裸體にした上で見ることか、多くは之を爵位や門閥や金錢や財産等の着物の上、飾り物の上を通して觀ずるから、穢塵も見當らず、汚菌も見附ら無い、恰も宿屋の番頭や、料理屋の女中なぞゝ同樣で、着物で客人を判ずるやうなこととして、自らは純淨無垢の紳士で、未だ一度も法律にさへ觸れたことが無いなぞゝ氣焰を吐いて君子ぶつて居るのである。吾人は晴天白日の身分で、既に嫌疑も晴れて今や公然無罪の宣告を受けた位であるから、天下往くとして毫も憚る處が無いなぞゝ、大言壯語して居るものもあるのである。

が併し、金殿玉樓のうちにも、下水管や糞尿管が白壁の中に、塗り込めてある如くに、花の吉野山の土や石や草の下には、臭穢なる塵芥もあり、醜陋なる腐蟲もかくされてあるので、之を今如來樣や神樣の顯微鏡で以て、一々檢査した日には、忽ちに爵位とか金錢とか門閥とかいふ假面も着物も飾り物も、エッキス光線で透き通したやうに、徹見十方内外映徹して紳士も紳士らしからずして、業障深き罪人と見顯はされ、學者も學者らしからずして、曲學阿世の罪人と露見し來り、貴婦人も貴婦人らしからずして、嫉妬怨恨の罪人と暴露し了りて、流石に無始の昔より、生死の海に沒在して、今も猶浮きつ沈みつ、涯際の無い愚痴の凡夫人、

十惡の大罪人でありけることよと、心附がるゝのである。

孟子の語にも、『西施も穢を被れば則ち人、鼻を掩ふて而して過ん』とある如く、彼の聖人といひ君子といひ偉人といつた處が、宗教の顯微鏡で見るといふと、いづれも罪惡の穢を被ら無いものはなからう。故に如來の御前に出でゝは、我が宗祖大師さへも、『愚痴の法然房十惡の法然房』と慚愧あらせられたのである。

請ふ少しく、人間の罪惡なる現狀を考へても見られよ、司馬温公は支那の大君子で他人に向ては御自身の胸中、何に一として物語りの出來無いことは無いと申されたが、今時の人間に、斯樣なことの出來るものが、一人は愚か、半人も無からうでは無いか、否な他人どころでは無い、肉親の父母にも打ち明けられず、二世の妻女にさへも祕し立てをせねばならぬやうな事ばかり、多いのではないか。卽ち最明寺時頼の歌の通りである。

我心鏡にうつるものならば
さてこそかけのみにくかるらめ

よしや、犯非造罪がちの中からも、時に逢ひ折りに觸れては、人は往々に向上の一路を憧憬しつ善を想ひ德を慕ふ殊勝な心事も無いでは無いが、然れば是れあるが故に人は純淨無垢の身にして、如來に對て罪惡の凡夫なぞゝ、卑屈な感想を起すべき要を見ないでは無いかと、或は申す人もやあらん。併し是れは不養生をして、大病人となつた患者が、俄に服藥や攝生

セントポーロの言

罪惡の影と能因法師の歌

基督の宣言と心地觀經

をしつゝ、健康體の本の身に立還らんと熱中して、如何はと希望したからといつても矢張大病人は同じ大病人で、毫も健康體の人では無いのである、即ち罪惡の病人にてあることは、到底免れ無いから、早く自ら煩惱具足の罪ある身なりと謙遜卑下して、發露懺悔をせねばならぬ。況や世に立て善を行ひ德を積んとしかけるといふと、其はなか〳〵に容易な業では無い、即ち非常なる決心と偉大なる勇氣とを以てして、而も尙は且つ苦戰奮闘を續けなければ、成功の曙光さへ見ることが出來難い。是れ豈にセントポーロか、『我れ善を行はんと欲するときに惡の我れに居ることを知る』と慨言せし所以ではないか。

特に如何なる人物にても、既に煩惱を具足する上からは、其の煩惱の形に隨て、造罪の影のあることは、何んといつても否定することは出來ぬ。是れ豈に源俊頼朝臣が『世の中は浮身に添へる影なれや思ひ捨てゝも離れざりけり』と悲歎せし所以では無いか。既に罪といふ無數の黴菌が存在するとすれば、懺悔の日光に曝さねばならぬといふ必要が生じてくるのは、當然である。

故に、彼の基督教でさへも、洗禮として罪垢を洗ひ清める式や贖罪といふやうなこと、があるばかりか、彼の基督が、猶太教を改革して、新宗教を樹立しやうとした時の最初の宣言の如きは、即ち『悔悟せよ、天國は近つけり』、

Repent ye, for the kingdom of heaven is at hand.

といふ、眞摯なる言葉であつたのであります。悔悟すれば天國が近づくとの謂は、早く既に、心地觀經に於て、

『懺悔すれば寶所に至る』

と、如來は宣示あらせられました。

即ち基督教ですらも、既に如此くである、況してや佛教に懺悔滅罪の法あるは、勿論のことで、今更之を事新しく喋々する必要も無い。

然るに、此の授戒の前、三歸の後に懺悔の法を行ふのは、戒は是れ白淨の法であるから、之を容るゝ相互の身の上たる法器が、克く清淨で無ければ、進受に堪へぬのである。故に妙樂大師は、『如淨潔縠易受染色是故に先教懺悔洗淚亦如浣故衣先以灰汁後用清水』と御示しなされた。さすれば最初に懺悔といふ灰汁を用ゐて、衣服を洗濯して置て、其れから後に授戒の清水で以て、すゝぐといふと法器清淨と成て、如來金色の染め模樣が、立派に染めあがるやうなものであるとの喩で、實に巧妙なる御說明である。

戒を容るゝ法器

妙樂大師の語

あはれ、佛滅澆季の世正法日に沈淪し行き、邪風月に競ひ扇きて、世界を擧げて傲慢、虛榮、猜忌、嫉妬、怨恨等に、充滿しつゝあるのである。然も時としては、正法を聽受して信根を起すものも無いでは無いが、是れとても水に畫くが如く、砂上に造立するが如くで、久

しく相續もしない、又成就もしないといふ有樣。惟ふに是れ惑障深厚にして、見執鑑然なるに由る譯であるから、頗る悔悟して、慇重の心を以て、懺悔しなければ、罪障は消滅しないであらう。罪障消滅しなければ、清淨なる戒品は、到底具足し得ないことゝなる故に其の懺悔の法に三種類があるのであります。

上品の懺悔、五體を地に投じて、泰山の崩れ大波の摧くるが如くして、身を攻め心を警めて毛孔より血を流すはどに、慚謝し奉るのであります。

中品の懺悔、自ら犯しゝ罪過を白狀して、前非を悔い後罪を犯さじと誓ひて、悲泣して涙を流すはどに懺意を盡くすのである。

下品の懺悔、通じて自己の過咎を陳べ、師の教に隨て一々罪狀を口言するので、然も諸佛諸大菩薩を請戴し奉りて、自己の懺悔の證明を仰ぐのである。

以上の三種、各々の意に任かせて、修行すべきではあるが、今時の衆生では、上品は愚かな、中品の懺悔も、下品の懺悔も、眞實には修しかぬるであらう。何者人間は兎角に、虛飾心が有て、自ら思ひ切て、自己の罪狀を白狀するやうな、勇氣のある人が少ない。何うかして隱くしおふせらるゝだけ隱して、澄ました顏がしたいのである。夫故に、發露懺悔といふやうな、大丈夫らしいてきはきした事は、得しないので、遂に罪根の繁茂するやうなことをするので、洵にうら恥しい次第である。心地觀經に、『若覆罪者、罪卽增長。發露懺悔、罪卽消滅。』

と說かせられて、其の有樣の樹木の根に土を覆ふやうで、樹木が益榮るばかりである。故に罪を覆ふは、樹木の根に土を覆ふので、之れと反對に、犯しゝ罪狀を白狀して、發さ露はすは、樹木の根の土を發き露はすことになるから、其の樹木も發露懺悔だにすれば、自然と消滅するに違い無いとの、仰せであります。故に懺悔の要は、罪狀を自首して、覆ひ隱すことをしないにある。斯く云へばとて、戒師の面前に出でゝ、罪狀自首なぞゝ、裁判所目いたことは、しにくいことでもあらうから、何卒如來の御前に、禮佛懺謝する度びごとに、心中深く往犯を恥ぢ、かゝる犯非は未來斷じて止めはやと誓ひつゝ如來樣へ自首なされるが好いです、百年垢衣も、一日に於て澣ひて鮮淨なるが如く、百千劫の中に集むる不善の罪業も、唯々禮拜淸淨の水のみあつて、能く衆生罪業の垢を洗ひ落すのであるから、各々には丹誠を抜きいでゝ、禮佛懺悔をなされるが宜敷い。況や普導大師は、念々稱名常懺悔とも御示し遊ばしてあるから、口稱一行の各々の身は。既に法器淸淨にして、受戒に堪へたる立派な身分であると、悅び勇みて禮拜を勵まるゝやうしたいものである。中江藤樹曰悔は凶より吉に趣くの道なり强く悔ゆるものは反りて先非の病抜けざる根なり、昔あやまちたる過失の今は跡方もなくなりて心氣替りたることは思ひ出てゝも悔はなし、唯餘處の事の如し、思出して首を掻き汗出づるは未た其過失の根、伏藏して又も其境をあらはすが故なり

子貢曰、君子之過也、如日月之食焉、過也人皆見之更也人皆仰之

此の懺悔に就て、松島坦の著はしたる、行雲樓遺稿に、好い話が書いてあります。昔、京都に穀物を賣る商人が有て、妻を娶りました。四五日してから、俄に女房が離縁を請ひました。今更のやう良人は驚いて其故を問ひますと、女房の申すには、はい良人が御商法の樣子を見まるらするに、買ふ時には大斛を以て買ひ、賣る時には小斛を以て賣て居られるが、是りや不善を日々に御積みになつて居るので、妾は後の禍が懼しう御座いますで、御暇を願ひました次第ですと申した。良人も女房の正い言葉に感心して、成程私が惡かつた、然らば今から賣るにも、買ふにも斛を均しくしやうと約しました。女房の申すに良人が斯く御商法を成れてから、幾年になります。十年にも成りますが、其れでは今日から、斛を改められたからとて、其の既往の罪はなか〳〵消滅しないです。宜しく今後十年の間は大斛を以て穀物を賣り仕込みの時、小斛を以て穀物を買ひ取り給はゞ、乃ち前罪を贖ふことが出來ませう。其うしますれば、ふつゝかなる妾でも、女房にしてもらひますと申した、良人は愈よ女房の諫言に敬服して、女房の言葉通りに行ひましたが、果然十年を出ずして、遂に家は大に富んだといふことであります。

是に於て、各々は能く合點せらるゝが肝要である。即ち十年間相續して犯た罪であるから之を消滅するにも十年間相續して、善根を積まねはならぬとの數理的の諫言を、女房がしたので、誠に條理なる詞である。然るに今各々の罪過も、又亦如此く數理的に懺悔をせねはならぬといふやうなことであらば、相互の無始以來多劫の罪過は、實に一朝一夕に消滅し得られ無い筈であるが、難有いことには大集經の中に、

百年の垢衣も一日に於て滃ひて鮮淨ならしむべきが如し、是の如く百千劫の中に集たる所の諸の不善の業、佛法の力を以ての故に、善く順ひて思惟せば、一日一時に於て盡く能く消滅すべし。

とある、金言を頼みとして、頓に法器清淨の人となり得るのであります。百年閉鎖の暗室も一穗の燈火に依て忽に黑暗を消滅さするやうな、佛智不思議の懺悔滅罪の正法であると、確信せられるが好い

露霜と結へる罪のくやしさを
思ひとくこそ朝日なりけれ

◎備　考

◎涅槃經曰、譬へは金色の花千斤あるも眞金一兩に如かざるが如く、罪を作ること多しと雖少善の德に如かず。佛に對ひて偕を作すは盲人の自ら視ざるを以て人も己れが惡事を作

せるを見ざるべしと思ふに同じ、故に佛前に於て大衆に懺悔せよ、罪は本と自性無きが故に善縁に從へば必ず滅せん。

◎四十二章經曰、人衆の過ちあり、自ら悔いて頓かに其心を息めずんば、罪來りて身に赴くこと水の海に歸して漸く深廣と成るが如し、若し人過ちありて自ら解りて非を知り、惡を改め善を行はゞ罪自ら消滅すること、病の汗を得て漸く痊損るが如くならん。

◎懺悔とは梵語にて具に懺摩といふ此に譯して悔過といふ、梵漢兩語を取合せて懺悔といひならしゝなり、南山の云く懺とは未來の非を止斷するをいひ悔とは心を往犯に恥づるをいふ、若し往を恥ぢ深く來を斷ずるを勤るにあらずんば修法歲を累ぬとも罪滅するに由しなし愼まざるべけんや。

◎懺悔しやうとせば逆順の十心を運べとある。天台大師の大止觀懺淨の文中に出でたり。今參考の爲め列名すべし。

一には妄りに我人を計す。二には外、惡友を加ふ、三には他の善を喜ばす。四には三業を縱恣にす。五には惡心遍布す。六には晝夜相續す。七には過失を覆ひ諱む。八には惡道を畏れず。九には慚無く愧無く。十には因果を撥無す。以上の十を順流の十心といふ。是れ生死の流れに順ふの罪なればなり。則蟲の則を樂みて自ら覺にさるやうなもの。眞に痛ましいことである。

次に逆流の十心とは生死の流に逆ひて彼岸に到る法である。賊を破るには先づ賊の牙城を突くと同じて前とは反對に次第に逆上するのである。

一には正しく因果を信ず。二には自ら愧て尅責す。三には惡道を怖畏す。四には瑕疵を發露す。五には惡念相續念の心を斷ず。六には菩提心を發す。七には功を脩し過を補ふ。八には正法を守護す。九には十方の佛を念ず。十には罪性の空を觀ず。

× × × × × × × × × ×

第五　發心

贊題、發心者先當繼念十方諸佛爲所期果是故經云若能念佛得見佛心佛心復以慈悲爲本。慈悲乃以弘誓居先是故弘誓爲菩提因——受菩薩戒儀

◎諦諟の內、蛟龍を生ぜず、培塿の上、松柏を植ゑず。故に發心の內、菩提心の上ならでは戒體納受せざるなり。是れ此章のある所以。淮南子に石上、五穀生ぜず。禿山、麋鹿遊はずとの謂は卽ちこゝ、故に初に心戒相應の理趣を說きて授戒と發心との關連を領解さすべし。

◎次に淨土門の發心は聖道門のそれに比して最も發し易き長所の存する所以を縷說して發心の目的に說き及ぼすべし。

是れより發心の御話である。三歸と懺悔とに依て、芝居の舞臺は既に清淨に掃除せられ裝飾せられて、いざ是れより藝題相應な道具建を爲ねはならぬのである。所謂心戒相應して、始めて戒體を受領することが出來る、心とは道具建、戒とは藝題、戒體とは俳優とでも申さうか。此の三者が具はねは、一の芝居は演せられ無いのであります。小中村博士の師たりし、伊能穎則といふ人が、詠歌のことに就て申されし言葉に、此の事が面白う喩へられてある。歌詠み出んと思はゞ、其の題と景物と、似合ふか似合はぬかを、能く思ひ分くべし。畫所の像、寫すも同じ事なるべし。蘆原は雁の在處、萩は鹿の妻、柳は幽靈と、畢竟斯く似合ひたることが、歌に取りては極めて秀逸なり。其を引換へて、萩の蔭に雁あざり、柳の下に鹿たゞずみなば、如何に見惡しからん。歌としては、痴歌なるへし。今の世、芝居といふものも、心はへ均しく、彼の忠臣藏一段目、足利殿鶴岡社參の幕、大名旗本列座の處へ、綿見ゆる黑小袖に、大小落し差しにさいて、月代二寸ばかり延び、破れ傘持ちたる定九郎ナイ〳〵と呼びつゝ出でなば、興醒めぬべし。又五段目の並松立てる深山の閑道、黑幕仕掛の場處へ、由良之助、二巴の紋附きたる黑綾の羽織をすべらかに着なし、眼隱してよろぼひ出づるに、仲居とかいふ遊びの使女をも、紅廡の前垂れして、掌打鳴らしつゝ、手の鳴る方へと打ちをよみて出でなは、如何につきづき〳〵しからざらん。かいなでの者の歌には、斯るが見ゆ此の境を能く明らめて、歌數のみ急がず、似合不似合ののけぢ目を了得して、

今よりは蘆原には雁、萩には鹿、序幕の鶴岡神前には直義、顔世　御前、黑幕の松並木には、定九郎と、地歩を失はぬやうに、心懸くべし。豈に唯歌のみならんやで、圓頓菩薩の授戒も、又々此の似合不似合が肝要なのである。彼の巡禮の乞食ともが、さも有難さうに、御詠歌をあげつゝ、而も袖口の虱をぽつり〳〵と、捻り殺しつゝ拜んでまはるやうなことでは、如來も納受ましまさぬと一般、白淨無垢の戒法を受くる身分が、苟且にも、我利々々亡者であつた日には、卽ち鶴岡の社前へ定九郎が出て來るやうなもので、薩派利芝居にはならいのである、故に心戒相應といふて、能受の心と所受の戒とが、至極能く似合なければならぬのであります。然らば如何にせば相應し、似合ふかといふと、他なし上求菩提下化衆生の大菩提心を發すといふ道具建てが、必要なのである。授戒の鶴岡社前の場には必ず發菩提心といふ奇麗な顔世御前が出てこねは、不似合であるのである、乃ち第五に、發心の章ある所以であるのである。而して所謂菩提心とは、四弘誓願のことで、今之を三誓と省約して、示し申さう。

- ○三誓
  - 誓て一切の惡を斷ぜん——攝律儀戒——三聚戒
  - 誓て一切の善を修せん——攝善法戒——
  - 誓て一切〻の衆生を度せん——攝衆生戒——
- ○三身
  - 法身——至誠心——○三心
  - 報身——深　心——
  - 應身——回向發願心——
- ○四弘誓願
  - 衆生無邊誓願度
  - 煩惱無邊誓願斷
  - 法門無盡誓願知
  - 無上菩提誓願證

既に佛戒を受けて、諸佛の位に入らんとする當成の如來たる各々には、是非此の四弘誓願を起して、今日より未來際を盡くして、苦諦の境界に對して、衆生無邊なれども、誓て濟度せんとの弘誓を發し、集諦の境界に對しては、煩惱無邊なれども、誓て斷滅せんとの弘誓を發し、道諦の境界に對しては、法門は無盡なれども、誓て了知せんとの弘誓を發し、滅諦の境界に對しては、菩提は無上なれども誓て證悟せんとの弘誓を發すのであります、此の中、衆生無邊誓願度は、三聚淨戒の中の攝衆生戒で、三心の回向發願心に當ります。煩惱無邊誓願斷は、攝律儀戒で至誠心に當ります。法門無盡誓願知と、無上菩提誓願證とは攝善法戒であつて、深心に當るのであります、何者、律儀は斷惡であるから、卽ち至誠心よりして、惡を斷ずることゝなる。攝善は修智であるから、卽ち深く信ずる心よりして、智も修せらるゝことゝなる。攝生は利物であるから、卽ち還相回向の發願心より、物を利益しやうとするのである。既に斯く三心具足の上の發心なる故に、念佛の行人には、此の發心は玆て六かしいことは無い筈である。是を以て鎭西國師は。斯く仰せられてある。

又菩提心に二あり、一には菩提心願、二には菩提心行なり。菩提心願とは、所謂四弘誓願なり。今此宗の意は、薄地底下の凡夫、斷惡證理の觀行すること能はず。入聖得果の根機に堪へず。是故に念佛の一行を修して。先づ近くは淨土に生せんと願ひ、次に遠くは佛果に歸せんと願ふ。此是れ菩提心願なり。故に今家釋して云く、唯一念を發して苦を厭ひ、

諸佛の境界に生じ、速に菩薩の大悲願行を滿じ、生死に還入して、普く衆生を度せんと樂ふ。故に發菩提心と名くとなり。（徹選擇下）

是に依て考へると、淨土門の菩提心と、聖道門であれは、此の世に於て四弘誓願の菩提心願を發して、同時に其の菩提心行といふて、六度萬行をは實地に修行して、成佛得道を期せねばならぬ。然るに、此の淨土門の發菩提心は、願心のみは此の世に於て發すれども、正しく菩提心行の修行は、往生淨土の後に在て、實行するのであるから、誠に爲易いことである。特に道綽禪師は、安樂集に於て、「願往生心者 願作佛心也 度衆生心也」と御說きなされて、各々が念佛を唱へ、三心を具して、往生を願はるゝ目的はといへは、願作佛心で、卽ち上求菩提に當るのである。又其の願作佛心を發す目的はといへは、卽ち度衆生心て、是又卽ち下化衆生に當る譯だから、今授戒の前に事々しく發菩提心の道具建てを申してそすれ。相互の念佛の同行人に在ては、既に〳〵念々稱名常懺悔と掃除せられた、檜木舞臺の上に菩提心の道具建ても遠から新調せられであるのであります。さすれば心戒相應とて、忠臣藏一段目の舞臺には、鶴岡社前の道具建ても出來てあるから、正授戒の莟さへ引き開けなば、忽ち戒體領受とて顏世御前等の俳優が打ち揃ふて出て來て、防非止惡の芝居をするに相違無いのであります。以上は、心戒相應の必要を述べたのであるが、今もう一つ發心の理由がある。其は、

我れだにも先つ極樂に生れなは
知るも知らぬも皆迎へてん　　惠心僧都

の歌の通り、溺者を救ふには必ずや岸上の人で無ければならぬやうに、人は最も始めに必要なことは、自立の點にあるのである、喩へは慈善的事業をなすにも、公共的事業を行ふにも、先づ自身が自立してからのことである、餘力が出來てからのことである。卽ち匏瓜でない以上は、自身の口には物も食はなければならぬ。木石でない以上は、自分の身には衣服も纏はねばならぬ。未だ自分の腹に、食物滿ずして飢饉にせまられながら、猶、口を輟てまでも、人を惠むといふやうなことは、到底不可能である。未た自家の形に、衣服を蔽はずして裸體のまゝながら、猶形を露はしてまでも、物を施すといふやうなことは、到底至難である故に古語にも、「飢饉の春は朋戚を賑はさず、多稔の秋は嬰、四隣に及ぶ」とある如く、物は有る手よりこぼれ、無い袖は振れ無いのである。

世尊の體力回復

大聖世尊が、成道の初め尼連禪河（ナーイランジャナー）の東岸にあたる前正覺山（ブラグボヂ）に、一處を卜し給ひて、靜座觀行の道場となし、父王の贈り給ふ資糧をも謝絶して、唯々乞鉢の行に依りて、六年の長日月の間、日に一麻一米を食し給ひての、大苦行を修しつゝ、禪思を凝らし給ふたことがある。如何に、大聖世尊なればとて、自然界中の一人間としての應化身たる以上は、裸體では道中が出來ず、腹が空いては仕事の出來ないは、當然であるから、遂には勿體なや、枯木のやうに形骸憔悴して、御疲勞のほどは申しやうもない、慘狀であらせられたのである。是に於て、自ら思惟し給ふやうには、道は慧解によりて成じ、慧解は根によりて成じ、根は飮食によりて補はるゝものである、然るに今、食物を斷つは道を得るの因では無い。我れ當に食を受けて、道を成ずべしと、御決心遊ばして、乃ち起ちて、尼連禪河に沐浴して身垢を洗除して、先づ身體の衞生を計り、苦行林中の側らに、牧女難陀婆羅（ナンダバラ）といふものの來りて、世尊の御足を禮しつゝ、恭しく乳糜を奉りしを受けて、之を食して滋養物の供給を計られしが、漸くにして體力の回復によりて、菩提を成就するに堪へ給ふやうに、御成りなされたのである。然るに、常に御側に從ひて苦行を同うせし、憍陳如（カウヂンヤ）等の五比丘は、今、目の當り世尊が乳糜を食し給ひしを見て、非常の驚きと怪みに打たれて、思ふやう、あゝ世尊にして、既に此の苦行に堪へず、不淨の乳糜をさへ口にし給ふとは、這は道心の退轉である、修行の墮落である、我等は斯る無道心者には、既に從ふ必要が無いと、見放してしまつて、遂に世尊を見捨てゝ、西方波羅奈（バーラーナシ）といふ地に赴てしまつた。苦修苦行を以て成道の正因となし來りし、印度の習慣を打破して、然も不淨の乳糜をさへ、食し給ひし劇變も劇變、非常の大劇變を敢行し給ひし、世尊の此の行爲に對しては、憍陳如等が失望驚愕は、寧ろ當然である。又世尊にしても多年の苦行を一朝に捨てゝ、體力回復の爲めに、不淨の乳糜を食し給ふには、勿論隨從者や社會の反抗の斯くあるべきをば、豫期し給ひしに相違が無からう。既に從者にまで見捨てら

れ、社會からは同情を失ひ果てゝまでも、御自身の體力回復に向て、敢行邁進し給ひし所以のものは、卽ち自立の必要を御感じ遊ばしたからであります。

果然、體力舊に復して、身意共に爽快安靜となりし世尊は、獨、遊行して佛陀迦耶に達し給ひ、畢波羅樹下の金剛座上に、淨輭の草を敷き、結跏趺座して、無上正覺を成就遊ばされたのである。

今や在座の各々は、如何である。既に今日此儘の有樣にしては『澁柿やいくらむいても同し事』で、凡夫は何處までも凡夫であつて、到底能救の器どころか自立だもなし難いはどに衰弱し果てたる惡凡夫では無いか。あはれ他を益すべき自行妙修は、身軀を倒さまにして、打ち振ふとも、其樣な美德は一微塵も出ない身分ではないか。然すれば、今生にして、濟度衆生の大行は、望みて得らるゝ筈のものでは無い。唯々往生成道の後にのみ、期待するばかりである。故に在座の各々が、自立して菩薩度衆生の大行を成就するには、先づ願往生心に依て、往生極樂を期待し、彼處の華臺に坐して、三昧淨食に、無始以來の衰弱したる身軀を肥滿させて、體力の回復を計るより、外には一縷の望みも無いのである。依て今や授戒の前に、菩發提心を勸むるのも、畢竟は往生淨土の上で、先づ自家の自立を計りて、自行妙修に暗からぬやうに、十地願行自然彰の、尊い能救の身分となさしめんとの所以で、あるのである

× × × × × ×

◉備　考

◎淨土布薩式に云く今發菩提心に就て卽ち二種あり一には直成菩提心卽ち此の娑婆濁刹之中に於て直に無上佛果を成せんことを求むるの心是なり。二には隔時菩提心。則直成の修行に堪へず。故に穢土を厭ひ淨土を欣ひ凡身を捨てゝ聖身を得。二土に分ちて隔時隔念得益を求む。故に隔時隔土の菩提心と名くるなり。今此の教に勸むる所は隔時の菩提心是なり。

第六　問　遮

◎第六の問遮とは正授戒の作法の場に、七遮罪の有无を問ふことにて其の式を行ふさまは常の如し。問遮の一題に就ては特に一席の講說を用うる要を見ず。是れ短時の布教場裏に於て此の講說よりも他に重要の諸問題を餘すを以てなり。

◎故に今は教家の參考までに、其の大要をのみ、說きおくべし。

問　遮

若し遮難の身に存ずることあれは、其の人は縱令ひ發心の相を知りて四弘誓願を起すとも、破れ目のある水器には、貯水し得られざると同樣で發戒することが出來ぬ。故に正授戒の式場には此の問遮を一應は行ふのである。但し授戒道場に入るはその人であつて、此如き七遮水の身にあらふ筈がないとは萬々信じ得らるゝなれども、圓頓大戒の庭に入る前であるから

形式だけなりとも、是非に實行せねばならぬ。喩へは近時外國より歸來する人が、上陸の前に當つて檢疫所に於ける檢疫醫の檢査を受くるやうなものであらふ。其の七遮難とは梵網經には、若し七遮あれば爲めに受しなべからずとあつて、非常に恐しい罪なのである。第一、汝は曾て佛身より血を出さゞるや否やと問ふ。第二、父を殺さゞるや否やと問ふ。第三、母を殺さゞるや否やと問ふ。第四、和上を殺さゞる　否やと問ふ。第五、阿闍梨を殺さゞるや否やと問ふ。第六、羯磨僧を破らざるや否やと問ふ。第七、聖人を殺さゞるや否やと問ふ。以上の七問のたびごとに、受者をして「无し」と應へさすのであります。委曲は正授戒式場作法譜說の時に申すとしやう。而して此の七遮罪のない人は破れ目も瑕瑾もない完器の人だから戒品の淨水を貯へられることが出來るのである。

第七　正授戒

◎第六までは序論にして第七正授戒已下は卽ち本論ともいふべし。其の第十二勸持の一章は卽ち結論なるが故に、授戒の首腦は當段以下に在て存す。時に、攝律儀戒を詳說せんが爲めに第十の說相といふ一段下に、梵網の十重禁戒に就て、持犯開遮の諸要件を提供して、最も精細に講筆を傾注したれば、是に依憑して教壇に立たん教家は、又其心して講辨あるべきなり。

◎三聚戒の中に就て第一の攝律儀戒の說相中、全受分受の教義に依て、教家たるものは受者に向つて個人間の惡癖惡習の一若くは二を强請的に改悔さするの要意あるべし。十重禁戒を說いて全受全持を期することは、近時濁惡の世潮に漂へるものに對しては餘りに過望といはざるべからず。故に分受分持を勸奬して先づ禁烟とか、節酒とか、禁獵とか、朝起とか、の一二なりとも嚴格に誓持せしむべし。彼の弄花などを嚴禁する誓約を要請することは最も緊要有益の事項とす。是れ授戒の花によりて獲得すべき一種の好菓實ならずや。あはれ授戒をして芳香ある花にのみ止まりしめずして、宜しく以て豐艷なる菓

實を獲來つて、筐裡に充溢せしめよ。

三　聚淨戒

贊題、正授戒者、先畧示三相乃至言三聚淨戒者、所謂攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒。

須辨三聚廣狹偏圓之相、以作行者期心之本。――受菩薩戒儀、

是れより三聚淨戒の御話しである。偖て此三聚淨戒の名目に就ては本業瓔珞經に說かれてあるのが、如來一代三聚の最初といふべきであらふ。但し瓔珞經にては『聚』の字が『受』となつてある。故に瓔珞經では是を三受戒と命名してある。が其の實質は同じである。又三聚淨戒のことは心地觀經にも詳かに說かれてある。然るを台疏に『此三聚戒名出方等地持不通三藏』とあつて瓔珞經に出でることを看過せられたは、天台が千慮の一失なりと古德も評せられた。

此三聚戒に就て通途は三門に種別するのである。其れは第一が顯了門の三聚、第二が斷惡門の三聚、第三が戒具門の三聚といふ三種別である。

第一顯了門の三聚とは左の如しである。

顯了の三聚
- 攝律儀戒――比丘二百五十戒、乃至優婆夷五戒
- 攝善法戒――一切自利善法、
- 攝衆生戒――一切利他善法、

這は善戒經又は瑜珈論等に依つたので律儀が顯然として義門自から明了なる故に、稱して顯了門の三聚といふのである。

第二斷惡門の三聚とは左の如しである。

斷惡の三聚
- 攝律儀戒――十重禁戒
- 攝善法戒――前三十輕戒、八萬四千法門、
- 攝衆生戒――後十八輕戒、慈悲喜捨。

這は本業經及び義寂の疏に依つたので、十重禁戒は十惡を斷ずる處から、是れに仍て斷惡門の三聚といふたのである。併し別して攝律儀戒の一聚に約しての得名である。前門の七衆の共戒を以て總して攝律儀戒としたのと同じうないだけである。

第三戒具門の三聚とは左し如しである。

戒具の三聚
- 攝律儀戒――離惡、
- 攝善法戒――行善、
- 攝衆生戒――教化、

這は一々の戒に於て離惡の點を律儀とし、生善の點を攝善法とし、利生の點を攝衆生とするのであるから、戒々に三聚を具することとなる。故に業疏に、殺の一戒の如きは具に三位（三聚のこと）を兼ぬ。諸の殺緣を息るは攝律儀なり。常に慧命を行ふは要ち攝善法なり。前命

を護るは即ち攝衆生なり。此の一既に爾り餘のもの例して然りといふてある。詳しいことは諦忍の梵網經要解或問に就て見られるが宜い。

聚の義

而して此の三聚の聚といふ字義はといふと、聚は包攝を以て義と爲すので、所有一切の戒法を此の三種の戒に包み攝めてしまふといふ意味である。即ち第一の攝律儀戒といふ中へは、惡といはるゝ惡を斷ち離るゝ處の一切戒が包め攝められるのであるから、十二門戒儀要解には『律儀は惡を禁ず、惡として斷せずといふことなし。所謂、殺盜婬妄等乃至煩惱无明永く盡きて、法身の佛を成するを名けて斷德と爲す』と說かれた。第二の攝善法戒といふ中へは、善といはるゝ一切の善行功德を包み攝めるので、同書に之を『攝善は善を修す、善として集めずといふことなし。所謂智慧を發起して世出世間一切の善法を修習し六度萬行取らず捨てず、方便を習行して自利利他し、報身の佛を成するを名けて智德と爲す』と示された。第三の饒益有情戒といふ中へは、利他と名の附くほどの一切の善行美德は皆な包み攝まるので、之れも亦同書に『攝生は生を利す、生として度せずといふことなし。所謂六道、四生、含靈、抱識、方便導引して同く佛道に歸せしめ、應身の佛を成するを名けて恩德と爲す』と申された。

第一攝律儀戒、淮南子に兕虎後に在れば、隨侯の珠、前に在るも掇るに及ばず。先づ患を避けて而後に利に就く、とあるが、成程一利を得んとする前に一害を除くといふことは、向上の正しい順路であらう。況や惡人は惡を行ふて、冥きより冥きに入るやうな行爲は、一害を得んが爲めに一惡を行ふことゝなるのだから、其の愚や實に言語に絶した次第である。今此の第一に攝律儀戒を授くる所以のものは、先づ向上の順路上如何なることであらふとも、惡いといふ名の附くことは斷じて行ふまじとの戒であつて、一大發願を立てゝ惡と名の附く事柄には、身口意三業の上に於て、必ず遠ざかり離れやうと金剛の決心をなすのである。唯、心にのみ之を行はうと決心したまでゝ、いざといふ場合になると、免角に實行の伴はないやうなことでは、所詮がないではないかとの疑念もあらふ。這は成程尤もの次第ではあるが、其處即ち澆季の凡夫である。否な濁亂の世潮である。這は必ず理性に訴へて必ず遠離せねばならぬ、惡い事であるとは決心して見ても、身の習はし世の習ひ、因襲の久しき何心なく行ひ來れるやうな事柄に對しては、强いて己れ獨りのみ之を斷じて止めるといふと、云何にも奇を衒らうやにも思ひなさるゝことのないでもない。然れば唯々心のうちに、我れは此の如き惡しき業には、生々世々近づかずしてありたいものよと、激越の感慨を起して、念じ誓ふやうにするのが、此の戒のやがては實行振りといふものである。旡始曠劫の昔より今日といふ今日まで、六道に輪廻のみして生死の濁淵に出頭沒頭して險嶇しつゝあるも、皆是れ惡業、不善根にのみ近づいてのみ居たりし證據である。然るを今何の幸ぞ、此戒を受くる身ともなりて、惡業を離れ不善根に遠ざるやうにしたいものよとの一念皓々の白き光の閃めき初めたが、即ち三界の暗を免れて彌陀慈父の月光を拜し奉る前兆とも前表ともいふべきものであるよと

第一攝律儀戒

淮南子の語と向上の順路

攝律儀戒の護持の心態

ひたと心に法悦法喜の有難さを感謝せねばならぬ。をこがましくはあれど、予が嘗てものした歌の中にも、

山の端はいよ〳〵黒く見にけり
　峯より今し月の出つらん

と詠じたこともあつたが、悪業を離れやう、不善を遠さけやうとの皓々たる淨滿月が峯よりさし昇りかけるといふと、山の端がいよ〳〵黒みて見にくゝるのである。是れがやがては其の淨滿月の慈光を、全身に浴びる前兆前表であらふ。何んと之を思ひ浮びては、法悦の人とはなれずには居れぬ。法喜の身とは、なれずには居れない。

次に此の攝律儀戒を護持して惡を離れて渾身總て清淨になるといふのは、本來自性清淨の本具の德に立ち戻つたことなので、言はゞ自家の本領に立ち歸へりしことである。自家元來の本領はといふと、雲はれて後の光りと思ふなよもとより空に有明の月といふ、本具自性の月光には、一翳の汚點も无い无垢清淨の光體である。其れを倒想煩惱の雲翳の下から見るから。春の夜の朧月のやう、將た仲秋无月の空のやうに見にるまでゝある。彼の夢想國師が、足利尊氏を諭された歌にも、

雲よりも高き處にいてゝ見よ
　しはしも月にへたてやはある

と云はれし如く、此の戒の護持に依て、惡業の雲を離れてしまふて、高い〳〵處に立ち出てゝ見れば、自性本具の淨滿月には何等一翳の隔てもなくて、淸淨无垢の光體は常恒に赫々として居るばかりである。故に月光其の物からいふと拂ふべき雲もない、離すべき惡もないといふやうなことゝなる。是れ卽ち天柱禪師が、寒山拾得の贊をするとて、先づ寒山に代りて、

拂ふべきはこりもないに常持つ
　人の心ぢりとなりぬる

とある。倒想煩惱の人の心から塵芥を造りいだすので、自性本具の庭には淸淨にして拂ふべき塵芥の无いことをいはれた。然るに又人といふものは兎角に偏執の爲易いもので、倒想煩惱の塵芥が无いといへば直に其の无いといふ空无に偏執して、倒想煩惱の假有を忘れるから、今其の妄を破する爲めに、更に拾得に代りて

拂ふべきはこりも无いといふ人を
　はらはん爲めの箒なりけり

といはれた。本具自性の德に立ち歸つて、无明永く盡きて法身の佛を成し、斷德遂に茲に圓滿した端的の大光景は、空有の二偏を離れて、中道實相に契合した无限果であるから、有限の言詮や思慮では何んとも表はしがたい。卽ち冷煖自知の境界といふものである。

之を淨土宗の三心に配當すると、上卷に示した如く、至誠心に當るのである。其の理由はといふと、至誠心とは卽ち眞實心のことで、法性本來の面目一毫の虛假もなく一點の虛僞もない、宇宙萬有の實相なり當相なりが其れであるのである。惡業は此の至誠心をあざむいた上でなければ、作られないことなのである。故に此戒の本旨たる惡業を離れ不善を遠ざからふとするには、必ず不知不識のうちに至誠心となり眞實心となつて居るのである。故に至誠心に契合した上の行爲が攝律儀戒となつてくるといつたやうなものであらう。今其の例證として楠正成公が小楠公に遣はされし遺訓狀といふものを御目にかけやう。

志不信にして得業すること難し。予れ若年より一心の觀法に心を傾く、或時山中に白雲の橫きるを見て心驚きしより、氣前の法を得て(氣前とは末然に風雨雷電等を豫知する法)且つ休すると雖、是れ實義に非ず。故に道の全からんことを欲し、功を費して身安からず。或時南都春日の社へ詣でける時、其行路に一人の僧の鳩を飼むを見て吟句して去るに逢ふ、予れ安問七郎を以て此の僧を呼び返して先の吟句を問ふ、僧吟じて曰く、

『道は其れ不明不暗。歷々として玄妙なり』

予れ問ふ、如何なるか是れ道、僧答ふ、天に非ず地に非ず物に非ず佛に非ず神に非ず、鳥獸に非ず、死情に非ず、人事是れ道、予問ふ如何なるか是れ人事。僧答ふ、善に非ず惡に非ず、行に非ず法に非ず、卽心是れ正に人事。予問ふ如何なるか是れ卽心、僧答ふ、君の問ふ心は君が卽心、我が答ふる心は我が卽心、此心變せずは一切の觸目總て皆な道なり。此心變じて思となるを凡と名く。予問ふ尙は密義ありや、僧曰く、公が名は何ぞ、予答ふ楠多聞兵衞正成なり。僧、正成と呼ぶ、予應諾す。僧曰く是れ何ぞ。予時に心中豁然として大悟す。

是れより此の僧を請じて慈誨を蒙る、唯恨らくは此の僧幾許もなく世を去りて道を問ふ事僅に八ケ月ばかりなりしことを。然りと雖此の道を授りて家を興し名を擧ぐること師恩に非ずや。是を以て今此の書を汝に附屬す。云云云云

三讀三思して克深く其の趣を得來れよ。洵に此の師ありて後、精忠大楠公の如き武人の典型が世に現はれたのであらふ。開口一番、志不信にしては得業すること難しと喝破し給ひて、宇宙萬有の實相當相たる至誠に一致せよと御示しなされたのである。成程世上を見渡し見るに、彼飄々たる才子風の男が、何等の自信もなく何等の節操もなく、恰も浮草の風のまに〳〵水の誘ふまに〳〵、東漂西泊定めなくして、幇間的に藝者的に、『世の中は然樣然らば御尤もさうでござるか然かと存せぬ』といふ鹽梅に胡麻化して事を成さうとするものがある。是等は何等の事も爲し遂げ得らるゝものでなくて愈よ動いて愈よ事を壞るに止まつてしまふ。所謂、此心變して思となるを凡と名づくとある如く、至誠なるべき卽心の心が虛譎詐に變じて、種

種の小刀細工を行ふ思慮分別はかりとなつて、其處好い加減に其場ぎりのことをしてのけて通るといふ工合であるから、社會の害にこそなれ益には少しもならないのである。然るに至極眞面目に至極シミな人物となつてくると萬事が眞摯である。言行が質實である。所謂、此心變ぜずば一切の觸目總て皆な道なりと、ある如く、一擧手一投足も天下の至道に契ふことになる。卽ち此種の至誠の人、眞實の士にして始めて天下に大業を爲し遂げ得るのである。大楠公の如きは、正しく此れを言ふて此れを行ひ、而して天下に大業をなし遂げられたのである。是れ卽ち攝律儀戒の御蔭ではなからふか。正成と呼はれて、ハイと應諾するのは至誠である、眞實である。是れ火を火とし水を水とし、正を正として邪を邪として一點も僞らない眞實のところであらふ。然るに心の僞りあるものは、權兵衞と己が名を呼はれても之を僞りて、否や私は吉兵衞でござるなどゝ、そろ〳〵虛僞の申立をして不善業を行ふ準備に取りかかるのである。故に惡行をなし、不善業を働くものは、必ずや此の至誠から、自然と遠離しておる。之に反して攝律儀戒を護持してゆく人物となれば、不覺轉入眞如門と不識不知のうちに至誠となり眞實となつておる。故に至誠心のある念佛の行者は、自然と攝律儀戒が持たれてゆくのである。

第二攝善法戒、　既に前戒に依て惡を離れて穢を落とし、不善と遠ざかつて、嗅垢を洗滌したのだから、卽ち恰も法身斷德の法水に沐浴したやうなものであらふ。斯く沐浴してすつかりと清淨な身となつた以上は、もう再び何んとしても嗅垢穢醜の裁衣をは纏へないことである。是れ荀子に所謂、『新に沐せし者は其の冠を彈じ、新に浴せし者は其の衣を振ふ』といひしも此處のことなのであらふ。是に於てか又向上の順路に於ける一轉進として、第二の攝善法戒といふ妙戒護持の必要が出來てくるのである。卽ち是れは如何なる事であらふとも、善いといふ名の附くことは是非に進んで行はんものと、身を勵まし心を勇ましむる戒である、故に善と名の附くことには如何なる少善微德たりとも先づ之より進んで、之れに近づき之れに親しみて、造次にも顚沛にも掛け隔たり遠ざからぬやう、小心翼々として之れが實踐躬行を心懸けることが攝善法戒行ひ振りである。

河に入て魚を捕へたらば、其手は必ず濡れて嗅くなるであらう。林を分けて梅を手折つたならば、其の袖は馥郁として薰ることであらふ。然れば其の善と名の附くことに大小の差こそあれ、少善根も善といふからには必ず之に近寄りて行ふやうにさへすれば、遂に積りし多善根となつて、渾身善薰と法水とを浴び來つて、香氣皎潔早や一分の清淨持戒の菩薩となつてをるのである。

大事を爲さんと欲せば、小なる事を怠らず勤むべし、小積りて大となればなり。凡そ小人の常、大なることを欲して小さなる事を怠り、出來難き事を愛ひて、出來易き事を勤めず、夫故に終に大なる事をなす能はず、夫れ大は小の積んで大となることを知らぬ故なり。　暨

へば百萬石の米と雖も粒の大なるにあらず、萬町の田を耕すも、其業は一鍬づゝの功にあり千里の道も一歩づゝ歩みて至る、山を作るも一簣の土よりなることを明に辨へて、勵精小なる事を勤めば、大なる事必ずなるべし。小さなる事を忽にする者、大なる事は必ず出來ぬものなり。

とは、二宮尊德が教である。

一善微なりと雖、日に養ふて害せざれば、遂に其德を成す。一惡小なりと雖、日に長じて除かざれば遂に其身を喪ふ。

といひ、或は又、

所謂善とは顯然事に著はれて後、之を善といふにあらず、一言一行の微と雖、亦害あらずといふことなし。故に聖人必ず勉を此に加ふ。人其顯然たるものに於ては、猶は或は能く之を勉めて、言行の微に至りては、却て忽にして察せず、此れ善の卒に進まざる所以なり。

所謂惡とは亦的然として行に發して後、之を惡といふにあらざるなり、一動一作の末と雖、亦惡あらずといふことなし。故に聖人必ず愼を此に致す。人其的然たるものに於ては、猶は或は能く之を愼み、動作の末に至りては却て輕んじて省みず。此れ惡の卒に除かざる所以なり。

とは伊藤東涯の誡である。而して斯る世教に事ごとしく訓誡することがらは、佛教では夙に左の如く我等に嚴戒してをるのである。

水の滴り微なりと雖、漸く大器に滿つ、刹那の造罪過が无間に墮す。——梵網經序

されば家庭に社交に日常の行狀たる言語動作の極々手近い處から、一惡あれば之を遠ざけ一善あれば之れに近づきつゝ實踐躬行をしてもらひたい、是れが直に攝律儀戒である、攝善法戒である。然るに佛教としいへは唯々高遠なる談理でなくは、卽ち世間や社會に至極緣遠き未來の事、出世間の事、往生極樂の事、死後の事のやうにはかり心得てしまつて居るやうである。曷ぞ知らん未來といひ出世間といひ往生極樂といひ死後といふことは、變て現在一刹那の直き次ぎに常に〳〵起りつゝあるのであるから、言はゞ我等は常恒に出る息入る息毎に未來と接觸し死後と連續しつゝあるのである。依て現在一刹那の一善が、直に未來の善果を引き、一惡が死後の惡果を招いて居るといふ狀態である、故に現在一刹那の間を、常に恒に清く潔くして、光明の裏に生活してゆくといふことが正しく此の戒の本旨であらう。是れを如來は『資生產業是佛道』とまで仰せられて、實行門に於ては極々卑近の處から徐々と段階を昇るやうにと、分受戒より全受戒に漸進する方法をまで規定せられてあるのである。故に佛教を以て單に未來教なりとのみ偏執したり、或は虛无空寂をのみ談ずる制欲主義の教なりとのみ半解して得々としてをるものが、世間往々相當の學者でありながら古今に是れあるのであ

る。誠に慨嘆の至りである。例せば華嚴の學者僧鳳潭が謁を徂徠に通じて、質すところあらんとして、會見したことがある。

鳳潭、物徂徠の謬見を笑ふ

鳳潭曰く、衲嘗て伊藤仁齋に見にたが、仁齋曰く、佛の道たる『空』のみと、然れども我が佛教は深遠多趣にして克く『空』の一字で以て盡くし得るものではない、仁齋の妄誕も亦甚しいが、先生以て如何とすると申された。然るに彼の徂徠は、節を擊ていふには、凡そ仁齋の言、一々妄誕ならざるものなし。然れども獨り其佛教を指して空となすは、妄ならずといふべしであるとあつた。流石の鳳潭も憮然としてしまつて、嗚呼緣无き衆生は度し難しと言つたまゝ、乃ち袂を揮つて出てしまふたといふことである。這は筆疇といふ書にもあり先哲叢談にもある。卽ち伊藤仁齋や物徂徠のやうな大學者でも斯樣な偏見を懷抱して居るのだから歎かはしい。

道は邇に在り

古人言はずや道は邇きに在りと、又言はずや、道は大地の如きか、天下地より卑きはなし。然れども人の蹈む所、地にあらずといふことなし。地を離れて能く立つことなし。況や華嚴を載せて重しとせず、河海を振めて洩らさず、萬物載するときは豈に其卑きに居るを以て之を賤むべけんや。惟々天も亦然り、人惟々蒼々の天を知りて目前皆是れ天なることを知らず、天は地の外を包み、地は天の內にあり、地より以上は皆天なり、左右前後も亦皆天なり、人兩間に囿して居る、豈に遠しといふべけんや、故に知る凡そ事皆當に之を邇きに求むべし、遠きに求むべからず、遠きに求むるときは則ち中らず。云云と、是れに由て想へば天も亦地の如く卑近なるものといふべきであらう。然も其の卑近なる地よりも最も卑近にして踏むところのものは心であらう。卽ち己れが身に最も接近したる心を以て心を踏みてこそ道となるのであるなれであらう。而して至微なる一善をさへ之を行はんとする攝善法戒は、正に最も近き心を以て心を踏みゆくのであるから、道は自然と邇きに在る道理であらう。是れ夢想國師が。

夢想國師の心の歌と或人の狂歌

偽りても賢を學べよ

終夜すから佛の道を求むれば
我が心にそ尋ね入りぬる

と道破せられた所以である。又或人が、

佛法はありける者を隣りなる
おやぢがさげた火うち袋に

と狂歌風に歌ひしも、歸着する處は同一である。

又進んでは大善根多善根を他人の實行するさまを觀たなれは、深き隨喜の念を涌起して、自己も又其のやうな大善功德の實踐者ともなれる身分となりし曉には必ず〳〵、彼の人のやうに其の芳蹤を踏み習らひたいものぢとの心を起すが卽ち攝善法戒の行ひ振りである。されば是れを以て僞善者なりと世間で言はゞいへよ、假りにも愚を學ぶべからず、狂人のまねとて大路を走らば則ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば惡人なり。矇を學ぶは矇のたぐひ。

舞を學ぶは舞の徒なり。僞りても賢を學はんを賢といふべし。とは兼好法師が訓戒である。況してや僞善的でなく眞實心から職を學びたい、舞を習らひたい、菩薩の眞似がしたいとの大善心を起すことをやだ。身業と口業とに現はして實行こそせね。既に此の心業にだけなりとも嗚呼己れも彼の樣にしたい此のやうにして見てたいとの善心を起せば、即ち是れ心業上の持戒者では无いか。又よし、其の始は僞りより出でゝも、後には誠ともなることがあらう。又誠より出でながら、後には僞りと變ずることもあるであらうが、要は僞りより事を起しても、後には善化せられて誠となることが多いから、兼好法師は斯くも奇矯なる訓戒をも敢へてし給ふたことゝ思ふ。

攝善法戒と深心

忍許と澄淨

之を又三心に配當すると深心に當るのである。其理由はといふと、深心とは深く信ずる心といふこと、何を信ずるにといふと、即ち信仰の對象は前の攝律儀戒の斷德法身佛で、換言せば諸法實相の姿である。

而して能く信ずるといふ信仰其物の狀態はといふと、忍許澄淨の二義が其れである。詳しくいへば、深心は即信樂で、信は忍許、樂は受樂となる。依て愛は信の功だから信樂といふが、但し寬狹があらう。苦諦の境と集諦の境を對象として緣するところの信は、信にして愛ではない、滅諦の境と道諦の境とを對象として緣するところの信は、信にして又愛である。今此に淨土宗の深心とは往生淨土を對象としての信だから、信にして愛である。唯識六に曰く

信は忍、樂は欲なり、心淨を性となす。不信を對治して善を樂ふを業とすとある。信を愛といふと貪愛と同じではないかといふであらうが、貪愛の愛は煩惱、今は信愛で善心である。愛樂佛法味なといふ愛である。

忍許とは忍び許るすといふこと、忍び許すといふやうに、聞ゆるが、なか〳〵其うでない。忍は認と同じで認め許すと見たら適當たらう。即ち世は无常なり生滅なりと認め許すが忍許。其の忍許の上に一點の疑ひといふ汚濁の无いところが澄淨といふのである。

英語に於ける「信」と深心との對照

即ち修智にて事物の上に疑ひなく忍許して澄淨となつたところが信仰の態容であらう。故に信仰に智的解信と情的仰信との區別もあるが、必竟は此の信仰たる深心は修智に屬した方であらう。而して此の修智から見渡すといふと、何うしても善根善事は行はずに居られない。即ち善法に近寄るには此の智的作用に依ることであるのたから、攝善法戒は智慧を發起して智德報身佛を成就することゝなる。依て此の戒は三心の中深心に當ることゝなる。彼の英語でビリーブ（Belive）『信ずる』といふは、サクソン語のリファン（Lyfan）即ち『許す』といふ語から來てをるといふ。又英語でリイーブ（Leave）『捨する、任せる、』と、リィブ（Live）『生きる』と、ラブ（Love）『愛する』の三語も又々此のビリーブといふ『信ずる』と語源が同一であるとのことである。されば一面信仰するといふことは、他人に許す、他人を認め許す

ことで、換言すると己れを捨てゝ他に任かするのである。己を捨てるところは知慧、他に任すところは信法で、茲に機法二種の信仰が包含されてある。今深心といふは我を哀愍し給ふ彌陀如來に我が身心を打ち任かし奉るので、其の時は我は我が自己の小さい力を打ち捨てゝ一心一向に任せ奉る、又任せ奉ることを我れと我が心に認め許るして、彌陀如來を愛樂し奉るのである。故に此の『信』の字を又『任かす』とも訓ずる、東望二都門一信馬行、とも使用してある。依て『信』の字に熟字させて、『信任』といふ語もある譯である。其他信賴するといふ語もある。何にしろ信仰とは信任信賴の意味である。斯く說き來るといふと攝善法戒は三心の中では深心に屬すべき所由が了解出來るのである。

第三攝衆生戒、　是れは饒益有情戒とも稱して、慈悲喜捨の四无量心を以て、諸の衆生を救はんと心掛ける戒である。衆生を救ふといふても、其の程度に應じて難易の種類があつて、今日在坐の我等では、何うしても氣のきいた救濟事業なぞは及びも附かぬ。なぞゝ意氣を銷沈させて仕舞ふ人があらう。故に古人も教へて激勵なされた。『百里を行くものは九十を半はにす』と、成程百里の旅行を爲し遂げやうと思へば、九十里も行つた處で、漸う半分道を經過した、また前程には五十里も殘てあると、斯う考へるやうにせねばならぬとの誡めである。即ち事を爲さうとするには、是非とも目的を高大な處におくやうにしておかずは、いざといふ場合にはなか〳〵思ふ存分に遂行が出來るものでない。されば念佛の行者に對しても我が大

師法然上人が、『一丈の堀を越えんと思はゞ一丈五尺の思ひをなすべし』と仰せ給ひしも此處のことであらう。

往昔三木牛之助とて、畠山高政に仕へし大剛の士があつた。五尺ばかりの鍬形打た冑を着て、『運在天見敵死退』、といふ語と、

人は唯さしいてぬこそよかりけれ
　軍にたにも先かけをせば

と詠んだ歌をは鍬形に書き附けて戰場に往來しなをとある。而して天文十一年正月、河內の合戰の時、一番鎗を合はして敵の大將を討取つたが、天文十六年七月二十三日には三好政勝入道宗三と舍利寺の軍に討死してしまつたことである。其後に或人が此の歌のことを秀吉に物語りしたところ、流石に進取的の秀吉はであつて、此の歌の趣意因循にしてよろしからず、吾れならば

人はたゞさし出るこそよかりけれ
　軍の時も先がけをして

と詠むべきものをと言はれたとある。（常山紀談）是等の話も必竟、目的を高大にして、本人の意氣をして成るべく鋭鋒を研ぎすまして、豪毅活達以て事に猛進する程の心得を示めされたものであらう。仍て衆生を救濟することも、矢張り此の進取的の意氣を備へて居て、心の

目的は高くなれ、實行は卑近より始めよ

能ふ限り身の及ぶ極み、公衆の爲めになる事柄には奮勵するやうにありたいものである。然るに目的ばかりを高大にして其實行の點に至ては、兎角に卑近なことを輕蔑して疎外して仕舞ふ人がある。這は大變な誤解といふものである。故に先づ其實行上に就ては極々卑近なことに細心の注意を拂ふて居るといふと、行住坐臥に攝衆生戒が持てゝゆくのである。例せば荷車が坂道にさしかゝつて、車挽が困難して居る時、嗚呼苦しいことであらう。いざ手傳つて彼れの苦を減じて上げやうと、後から諸手に力を入れてヤンと推してやれば、其れが直に抜苦の悲死量心で以て一分の攝衆生戒を護持したことゝなる。又小兒なぞが路傍に倒れて泣いて居る時、ヨゝ可愛想にと抱きおこして路邊の草花一本なりと手折り持たして慰めてやれば、其れが直に與樂の慈无量心で以て一分の攝衆生戒の戒善を行ふたことゝなる。其れから人の憂鬱に沈んだり、心配ごとで泣いたりなどして居る場合に、親切に慰藉して彼れの心意を喜ばせてやるやうにするとか、或は人の子や孫の善言善行あれば之を其親や祖父母に譽めて喜ばせてやるとかいふやうに心掛けるが、直に喜无量心を以て一分の攝善法戒を行ふたといふものである。

或は町内のことに村内のことに關して常に依怙の沙汰を止めて、至極公平无私の處置を執るとか、又は家庭に在ても常に公平に平等に婢僕等を取扱ふことが、纔て捨无量心を以て一分の攝善法戒を行ふて居るといふものである。救濟事業とて唯々金銀や米穀を施すばかりが能でもない。若しも救濟には金銀米穀が无くては出來ぬとしたらば、攝衆生戒は富豪ばかりの戒善となつてしまつて、一切人には持たれぬことゝなる。戒善は何にも斯樣な偏狹なものではない。然れば神社佛閣へ參詣することを勸誘したり、五重授戒の入行を勸めたり、將た又精神修養上の講話とか演說會とかへ人々を勸誘するなども皆な戒善となつて攝衆生戒を護持する立派な菩薩と申し得らるゝのである。

以上は三聚淨戒の持相の一端を示したのであるが、既に一旦此の戒を誓受した以上は、所修の善根功德は皆な悉く戒善となつて、戒香自然に身心に泌み渡り、煩惱業繫の凡夫根性が忽ち慈悲忍辱の菩薩根性となつて、末受戒前の時の心と受戒已後の心とが打て變つたやうになるのである。今其の前後の心情の差異點を畧示しやうなら、先づ斯うあるべきであらう。

受戒の前後に於ける心情の變化

未受戒前の心情

未受戒前の心情

(一)他人の缺點ばかりを見附けて、取るべき少しの長所をも隱蔽するやうになつて、他家の破滅を悦び他人の事業の不成功を愉快に感ずる氣風がある。

(二)寬仁大度の氣象が无くして、何事に附けても憤怒を發し、常に喧嘩腰になる氣風がある。

(三)兎角に傲慢で、无遠慮で、尊大振つて、物事に物體を附けて、親切とか柔和とか、謙遜とかいふ美風の少しもないこと。

(四)居常、憂鬱に沈み不平に滿ちて、心中怏々として、煩悶に煩悶を重ぬること。

(五)自分には是れといふ一定の目的が立たず、世の風潮に漂ふて、空想を逞うし、時に他人の成功をのみ羨やみ、恨み嫉むこと。

(六)事に向つて勉勵する心薄く、一足飛びの成功一攫千金の富みをのみ企圖して居常怠惰にのみ流れ居ること。

(七)規律を嫌ひ清潔を厭ひて、放浪散漫、怠惰因循にして、輕々しく事を興して又輕々しく事を止め、堅忍確固に事に從はぬこと。

(八)時間を空費することを何んとも思はず、唯々他人の惡評惡罵を逞うして白眼以て世上を見るばかりなること。

(九)獨立自修の念は少くして、漫に他人にばかり依頼し、人に依て事をなさんとのみ思念すること。

(十)神佛崇敬の念とては、毛頭もなくして、因果を撥无し、邪思邪念を以て漫然と世を送ること。

受戒已後の心情

(一)他人の美德をはかり見附けて、其長所を稱揚し、差の短所あるも能く之を忍容して、圓滿なる態度あり、特に他家の成功を隨喜し他人の事業の成立を自家の事のやうに同情を以て之を迎へて、嬉々として世に處する氣風となる。

(二)寬仁大度の氣風が出來て、何事に就ても容易に憤怒がましいことをせず、萬一喧嘩口論にも及ばんとすることをすら、能く无邪氣なる笑ひと化し了らしめて、痕跡を殘さぬやうにする。

(三)自己因緣成の果報に安んじて、分を守り足ることを知りて、謙退辭讓を以て世に處し、佛陀の光明中に嬉々として生活するやうになる。

(四)不平もなく憂鬱もなく煩悶もなく快感と法悅とを以て三業共に清淨になること。

(五)誠意と眞摯とを以て一定の目的事に着實に從事することが出來て、意志の磐石の如くに堅くなること。故に事多く成功するやうになる。

(六)目的を達するには、精勤と着實とが唯一最善の好手段として、寸進あつて尺退なく、步步に進捗して油斷なく以て安逸に耽らぬやうに注意する。

(七)能く一定の規律を嚴守するから、秩序整然として一絲亂れず。能く思慮して事を行ひ、然も蹉跌することあるも容易に挫折せず、隱忍以て勇往邁進すること。

(八)時間を尊重して、徒事に空費することを愼み、然も忙中の一閑を利用して、善念善思を以て、道業の增上に資すること。

(九)獨立獨歩能く自家の脚下を省慮して、謹直緻密、事に當て全力を傾注すること。

善變善化の功能と武田信玄の自像

（十）神佛崇敬の念厚く深く、堅く因果を信じ深く本願を仰ぎて祖先の祭事を大切にし、慈善の行爲に熱中し、優に人中の悟有人と世に稱へられて、歡喜光中に世を送ること。斯くの如く人間の生れ變りしやうに、善變善化して此世からなる菩薩となることが出來る。されば三聚淨戒を誓受して凡夫の醜き穢はしい心情を一變して菩薩の美しき清き心情と成りかはる心掛けが所詮である。今常山紀談に依て、一史話を揭げて、其の善變善化の功能を示めさう。

武田信玄、命數盡て死なんことを前知しけれは、茫然自失するもの良久しかりけるが、斯く女々しく嘆きたれはとて、天命は戻しがたく、已むを得ず、せめては武威を近國に振ひし我が姿形を遺さばやと、佛師運阿彌を呼んで我が像を彫刻せしに、日を經て成就しぬる程に、我が實體を鏡に照らして篤と視比べけるに、似たりや似たり左も似たり、所謂瓜二つになせしが如くにして且つ其像宛然生けるが如くなりけれは、信玄喜悅こと限りなく、佛師には數多の金銀を與へ。其後彼の像を中央に安置し、諸將を招きて申されけるは、我れ既に老ぬれは命數も近さにあらん、切めては後世に我姿形を遺さんと豫て佛師に申付け彫刻せし所既に成就せり。然れば我が无き後は、各々力を協せ、悴勝頼を輔け武田家の隆盛を謀るべし。又勝頼には老臣の輩諫むることあらは父が命と思ひ愼んで之に從ふべし。必ず身を高ふること勿れ。と、最と懇切に遺命ありしかは、諸將等皆拜伏して唯落涙に及びける。中に長坂跡部の兩人進み出で、誠に君の御姿を後世に遺し給はんこと此像だに在まさは君御在世も同じからん。御當家萬々歳此上なし。と、頻りに賞贊せしかは、眞田安房守昌幸、長坂跡部の兩人に向ひ、各々方は君の肖像を造らせ給ふを賞め給ふなれど、是れ大に然らず。隣國の諸侯、國郡を奪はれし者は、今君の威武盛んなる故に、小笠原、村上、諏訪の殘黨等、首を屈めて、或は北條上杉等の處に身を隱くし居れを、甲府に變りもあらは日頃の鬱憤を散さんものをと、手に唾して俟つ者其數を知らず、今にもあれ君御病死とあらは、諸國の大軍、此虚に乘りて押寄來るは必定なり。然るときは我々種々の手術を廻らし防戰なすとも、若も敵兵亂入せば先づ此像を鞭打たん、なまじひに像を拵らへ却て後世に恥を殘すことあらんも亦測るべからず。誠に益なきことゝ申けれは、長坂跡部何んと答ふる辭もなく閉口して居たりしが信玄熟々之を聞き、誠に眞田が申す處至極なり、我れ既に病死とあらは近國の諸侯競ひ來り先づ甲府に亂入り、是れこそ日頃の遺恨に思ふ信玄が像なりとて、必ず手足を切離し首を落さん、敵の手足に掛けられんことこそ口惜しけれ。由なきことなしたりと太刀抜き放ち、已に彼の像を切捨てんの勢ひなれは、昌幸之を制し、暫時御待ちあられたし、可惜肖像を今无解に切捨て給はんことこそ本意ならず、願くは某に給らは難有しと謹んで申しけれは、信玄何に致すやと問はれしに、昌幸答へて臣所存御座候へは、何は兎もあれ賜はれたしと乞ひけるにぞ、信玄も何にか仔細のあることならんと思され、然らは汝に與ふべしと其まゝ眞田に賜ひける。

て眞田御暇を告けて此木像を我が館に持歸り、一間の閑所に引籠り、一七日の後、信玄并に諸將を我が館に請待せしかは、皆々何事ならんかと到り見るに、座敷の正面に不動明王を安置し、香花燈明を供し誠に生るが如きの尊像なれは、皆な〳〵拜をなして信玄公を招待するに何故に不動の像を祀れしやなと呟やきつゝ、美酒珍肴の饗應に一同大に興を催し、酒既に酣に及んで信玄笑みを含み、何故に不動明王の像を祀りしぞ、汝が信仰せし故なるか、昌幸答て君には那(なん)を不動明王と御覽ありしや、信玄大に笑ひ繩を持ち劍を携へ後に火炎を負ふは何んぞ不動明王にあらずや、昌幸笑ふて那(なん)こそ先達て乞ひ受け奉りし君の正像なれ、是れ某が工夫を以て斯くは致せしなり、不審なし給ふ方々能く聞き給へ、折角君の御彫刻ありし木像を打碎さて捨んは、夫こそ君の思召を反古になすといふものなり、斯く不動に造り直せは像も捨らず、敵兵も不動なれは罰を恐れて迂濶には手を出すこと之れあるまじ。然れは君の御姿を損せずして後世にまで傳はらん、昌幸が捨て〳〵捨てざるは先づ斯くの如しとありしかは、一座の諸將皆感じ入り、暫時は言句もなかりけり。其の後善光寺に藏めおきしかば。果して天正十年の亂に、織田父子并に德川、甲府に亂入ると雖も、此像あることを知らざりしこと誠に眞田が明智と謂ふべし。因て今に其像遺れりといふ。以上の記事を讀んで各々方は何んと感ぜらるゝや。既に信玄其人の像である以上は、眞田が苦心せしと同樣、相互の心情とても未受戒前の凡夫其まゝの像で居た日には、死んだ後は勿論生きて居る內から人々の批

評の鞭に打たれねはならぬ。然るに信玄の像其まゝを不動明王と造り變へて善變善化した上では、如何な怨敵でも是れには刃向ふことが出來ぬと一般で、各々方の心情の像を三聚淨戒誓受の菩薩と造り變へたならば、衆怨悉退散ばかりか、世間から渴仰尊重せられて、自他の善業を增上することゝなるのである。故に何んでも此の淨戒を誓受して其の心情を善變善化せられたいものである。

第八　戒相（十重禁）

第一　殺戒

我も又惜しとこそ思へ惜しと思ふ
命は同じ命ならずや

行誡上人

戒題の命名は諸師各々不同である。天台、法藏、義寂等は殺戒と號された、石壁は殺命戒と云ひ勝莊は不殺戒と云ひ太賢は快意殺生戒と云ふて居られる。諦忍律師の梵網經要解并に戒山比丘の梵網菩薩戒迪蒙等は太賢に從て快意殺生戒とせられ智旭や在犖は天台に從て居られる。本宗は勿論天台に依るので可圓和上の戒儀錄要なとも殺戒と命名がして有ります。但し本宗の无量山學頭賢洲上人の无量山戒誡の如きは太賢に從ふて居られる。皆各々の意樂で名は異にして居ても義に於ては害ふことは无いと思ふ。而して七衆

同犯で、大小乘大同小異である。謂く、

制意

第一制意 生々の理は宇宙自然の大法則なる所以を示す

寓有の活動と生命 **植物と生々の目的**

第一制意　茲に制意と申したは此の十重禁戒の中に殺戒を設けられた理由の御話である。古迹記には二種の論點から之を說いてあるし蔵疏には十種の論點から之を詳しく明かしてあるが今は其の要を撮て聊か近世的の說明を致すことゝしませう。

易經の繫辭傳に日往則月來。月往則日來。日月相推而明生焉。寒往則暑來。暑往則寒來。寒暑相推而歲成焉。と說てあるが卽ち天地の萬象は皆な此の如くして活動して居るものであつて一物として生々して居ないものはないのである。活動するものは生命があるからであるとすれば日月活動し寒暑往來して時間は不滅の生命を保ち歲月は不死の壽命を持て各々生々の目的を遂げつゝあるのである。彼の植物は无機物たる鑛物性のものを滋養分として之を吸收して生々の目的を完うして居るし動物は又植物性のものを滋養分として之を吸取して生々の目的を保ち而して其の動物の排泄したる物は還て鑛物に歸着してしまふといふ工合に三者相互に往來活動して居る有樣を思へば實に好生は天地の心にして森羅の萬象は悉く各自の生命を大切にして夫れ〳〵に生存を意識的に將た无意識的に完全にしやうとしつゝあるのである

憂きことに馴れて雲間の嫁菜かな　　捨女

是れは寓意的に姑に善く奉仕する花嫁のことをいふたのではあらうが兎に角に植物が生存の

動物と生々の目的 **人類と生々の目的**

妨害をなす雪にも忍び馴れて而も克く嫁菜が生々の目的を遂げて居ることを詠じたのではないか、して見れば彼の植物の如きも无意識的に生命は大切なるものとして居る樣子が知らるのである。

食ひ持つも子ゆゑの道のちりひぢは
　輕げに見ゆるつばくらめかな　　飯田秀雄

是れは燕といふ鳥が子を思ふ親心にさすがは子ゆゑの道に塵土塵芥の如きをすら重きをも重しともせず、さも輕げに見ゆるはかりに運び來りて養育するを思へば彼の動物の如きは勿論有意的に生命は大切なるものとして居る有樣が了解せらるゝのである。

況や萬物の靈長たる人類に至ては此の生存の欲望は非常に發達したるもので言はゞ醫術の進歩といひ器械の發明といひ國家の進歩社會の改善等は其實生存の妨害物をより少くして平安なる生命を各自に保有して行かうといふ爲めではあるまいか。詳言せば旱魃、霖雨、暴風、落雷、等の天災から地震、洪水、饑饉、火山の破裂。船舶の難破等の地變、及び火事、厄難、疾病老死、離別、貧窮等の所有生存の欲望を妨害せんとする事々物々に向て之が豫防、逃避、治療等の種々の手段を講じやうとする唯一の目的は人類各自の生命を保全するのにあることは火を睹るよりも明かなことで、或人が『死ぬのは人のことよと思ひもにおれが番とはていつた

まらん』といひしも又老人が『世の中にさかさまごとがあればこそまともに行けは己れがたまらん』と詠せしも皆此の生命が大切にして惜いからである。

又或人の歌に

ひたるさと寒さと懇とくらぶれは
はづかしながらひたるさぶます

といひしとか、成程眞臘を得て居るでは死いか何んぼう寒いの懇しいのと言つた處で我慢の出來ないことは死いが喰ふべき食物が死くなつて飢餓に瀕した場合は卽ち生命を失ふ場合であるから何んとしても辛抱の出來るものでは死からう。彼の左傳十五年のことに宋の圍みには糧道を斷たれし悲さ易子而食、折骸而爨ともあるし、加藤清正の蔚山に圍まれし時も討死した人の肉を噉ふたとも言ふ位で大切なる生命を保全する爲めには斯くの如く孟子の所謂、人將相食、といふはさにまでなるのである。誰やらが、

業平もめし喰ふてからかきつばた

といひしも茲の事で、卽ち以て生命の大切なことが知れるのである。餘りくどいか知らんが序でだから橘曙覽の歌を揭けておかう、此人は嘉永安政年間の人で越前福井に住して居たといふことである。

たのしみは妻子むつまじく打集ひ
たのしみは雪ふる夜さり酒の糟
あぶりて食ふて火にあたるとき
たのしみは朝おきいでゝ
たのしみは晝寢せしとき
たのしみは夏の夜ふけて
たのしみは秋の夜長に
たのしみは冬の夜さむに
たのしみは春の野に出て
たのしみは麥搗いて
たのしみは物を食ふとき
たのしみはあき米櫃に米いできて
今一月はよしといふとき

頭ならべて物を食ふとき

卽ち貧苦の中からも不足ながらに食物あつて身命を支へ得らることが最第一の樂みであるといふことに歸着する譯である。此の如く大切なる生命ゆゑに義に依て生命を賭さうとしても、やゝともすると途中から命が惜しくなつて義を捨てゝも命を拾ふとするものが世には往々あるのである。卽ち

慶長年中の頃なりし、本多忠勝朝臣が卒去の砌、其の臣何某といふもの平生の御恩義に酬いまゐらせんとて潔く殉死したりしに何某の家僕も又其の主人の爲めに殉死しかゝつたが、いやはや生命は惜いもので正に愈よといふ場合になつてから偖ては涙にも咽びつゝ『死にともなあゝ死にともな君のなさけの今はうらめし』と詠じたといふが實にや生命はかりは萬金にも賣りがたく珠玉にも換へがたい程、大切にしたがるものである。否な身命の大切なことは智論に云はれしことく設滿世界寶無有直身命是則菩薩濟物爲心而施極怖便失其性（古迹記下經三十參）とある通りで大切にしたがるのではない眞に大切なものなので

近世刑法學者が進んで死刑廢止論を唱道する所以なのも大に理由の存するところである。這は別項の所論を見て承知してもらひましやう、斯く生命は大切なものであるからと言ふて義に背き道を捨てゝまでも身命を大切にせよとは勸めぬので此處誤解をしてはならぬことである。風雅集に源の致雄が歌ひし言葉に

命をばかろきになして武士の
道より重き道あらめやも

とある如く、忠義や國家の上に比較すれば泰山よりも重き筈の命が又鴻毛よりも輕きに比して潔よく命を捨てねばならぬ場合もあるのである。が然し今は通常の場合に就ての御話に及んでをるのである。

然れば有情非情に拘らず、山河大地を始めとして、植物界も動物界も皆な各自の生命を保全せんとして瞬時も其の組織體たる物質分子は其の活動をやめない。故に生々は宇宙自然の大法則であると稱しても善からうと思ふ。成程見やうに依ては、天災地變や疾病老死のある點から立論すれば、宇宙の萬象に於ける自然の法則は、破壞を目的として居るかのやうにも思はるゝふしの无いではないが、是則ち建設の爲めの破壞と見れば、破壞も又眞の歸空的の破壞ではなくて、建設に對する第一必然的の準備と見るではなからうか。況や生命あるが故に活動するといふ點から申せば、人が死しても其人の組織體たりし細胞は永久其の活動を決して止めないのであるともいふから、其實人の死も眞の死ではないと、近世醫學は立證して居る位のものである。且つや破壞其物も一種の活動であるから、破壞が矢張り一種の生命であるとも言へるでは無からうか。彼の化學者が物の腐廢するのは、火の燃燒と同樣であると云ふ點から思ふて見ても、腐廢も燃燒も共に物質分子の生命ある活動といふものである。其處で上來の諸說も歸納して申せば卽ち茲に生々の理は宇宙自然の大法則であるといふことが立證出來やうと思ふ。

故に衆生の五陰を相續せしめて其の生命を保全さするやうにしてこそ、宇宙生々の理にも契ひ同情慈悲の旨にも遵ふものなれと言ふべきである。然るを今此の生命の相續を斷じて未來相續の連鎖を遮するやうな行爲は實に慘忍とも非道とも言ひやうのない惡業であるのである。（戒疏卷下云、今言殺斷他命故、五陰相續有衆生而今斷此相續故云殺也）特に、之を梵網古迹記下本に世間所畏、死苦爲窮、損他之中無過奪命云云と說かれし通り死は實に苦痛の極點といふべきもので、纔か其の肉體の一部たる頭痛の如き齒痛の如きさへ隨分と苦しいものである、其れを況してや、人體全部の斷滅であるから、其の苦痛は如何ばかりであらう。死苦はつぎめをたつに似たり、悲しみ叫べどもたましひ去りて語らされば妻子はなけよども更にかくまでとも知らず』と父子相迎卷上に仰せられしもさてこそ想ひやらるゝのである。されば、此の生命の貴重なることを思ひ考へて、益もなきに物の生命を斷つといふこと

風雅集の歌と武士の生命
生々は自然の大法則
建設の爲めの破壞
化學上の燃燒作用と腐廢作用
宇宙生々の理と殺戒
死の苦痛
父子相迎の文

は斷じて愼まねばならぬ。

* * * *

山鹿素行曰く、天地の間に盈ち、造物の功をなす所以のものは、陰陽なり、天地人物の全體なり、互に消長往來屈伸生々、息むなきなり。——聖教要錄。

又曰く、天地生々息むなく、唯自ら疆めて已まざるなり、之を復して天地の心を見る、終りて復た始まる、始終なきなり。其德至大至公正大にして天地の情見るべきなり。——聖教要錄。

第二制意　古來より人類は社會的動物なりと言ひ傳へて居るが、成程さうである。「木曾殿と背中あはせの寒さかな」で、單に機械的にのみ他人と交際したからといふて何等の愉快も感せられるものではない。即ち「こちら向け我も寂しき秋の暮」で、相互に精神的交際を行ふて他人の幸福にも同慶の念を起し他人の不幸にも同痛の思をなして眞の同情と愛情とを以て交際してこそ又眞の愉快も慰藉も相互に得らるゝといふものである。其處で人類は社會を組織して所謂利害の共通を相互になして行くのである。勿論各自に獨立して生存競爭をなすことも無いではないが、從て是れあるが爲めに社會共同の性質をまで失ふといふことは死い。何處までも共同團體を組織して、國家統一の目的に合ふやうに、精勵するのである。是即ち人類の心の奥に、同情の念愛情の想があるからである。今之を一歩進んで申すといふと、

第二制意人類は社會的動物
利害の共通と同情

宇宙は熱き同情を持てり
植物上の同情
礦物界の働力の平均
生物界の治癒の働作
空氣上の同情
大鹽中齋の話

宇宙の萬象も又亦自然に利害共通の法理に順して、恰も同情の念愛情の想のあるかのやうに感せられる現象が往々にしてあるのである。例せば一本の樹木が若し其の一枝を折られるか又は傷を付けられるかした時には、全木全枝全葉悉く其の養汁を放捨して彼の損所を治癒しやうとて、鋭意養分を送りて、何時しかとなく肉を附け皮を捲きて元の通に直してしまふものである。即ち南枝の不幸にして、恰も同情の涙より自分は養汁を割いて、南枝の不幸を幸福あらしめやうと勉めるのではあるまいか。又彼の空氣の如きもさうである、ガリレオが自然は眞空を厭ふといひし如く、或空氣中に氣壓の稀薄な處を生じた時には、四面の空氣は此の損所を充實さそうとし、依て以て平衡を保たうとして、其の處に向て進入し流動するので、所謂濃厚なる部分は自家の空氣を割愛してまで、其の稀薄なる部分に供給し、以て平均を得て始て氣體の流動を止めるのである。斯る現象を鑛物界では動力の平均と稱へ、生物界では治癒の働作と云ふてある。此の如く推論し來るといふと、宇宙は又暖き同情の涙に滿ち充ちてあるものと思はれる。然すれば向ふ山の火事も我が身の上の災難で、朝鮮の天災も日本の不幸、米國の地變も日本の災禍であるといはねばならぬ。大鹽中齋の洗心洞劄記の中に

有二血氣一者至二草木瓦石一、視二其死一、視二其摧折一視二其毀壞一、則令二感傷吾心一以本爲二心中物一也。

といひ又、

中齋の平等觀

頻陀大悲の感衆

中齋の同情的大悲劇

人之嘉言善行則吾心中之善而人之醜言惡行亦吾心中之惡也、是故聖人不能外視之也。

とある。草木瓦石の如きも心中の物なりとして其の摧折にも毀壞にも自己の心を感傷せしむる大鹽平八郎は實に平等觀に住したる唯心唯識の行者といつても善い。況してや。他人の嘉言善行を以て自己心内の善として之に隨喜し、他人の醜言惡行を以て又自己心内の惡として之を悲歎するなどは眞に如來の慈懷に一致して居ると言て善からう。されば彼の平等一子地に住して衆生の善惡に新行爲をなすたびごとに悲喜交も到りて淚の乾くひまもなく造次にも顚沛にも衆生は如來を忘れ奉りても如來は衆生を露忘れさせ給はずして、とはに〳〵親緣近緣增上緣の三緣力を御掛け遊ばすといふ大悲の攝化は畢竟ずる處卽ち此處の靈泉より涌出するのである。偖てこそ大鹽平八郎は天保四年全國の大飢饉に際して其の慘狀に坐視なしがたく、遂に自家の藏書一切を賣却して、其部數一千二百價は六百五拾兩に上り、之れで一萬枚の切手を製して、以て窮民に施したとある。猶も町奉行山城守に逼て、賑恤の爲めに大に倉廩を開かしめやうとしたが、山城守還て大塩の行爲を非難して上申を採用せざりしかは、時艱を救はんとして燃え立つばかりに思ひつめた平八郎の大慈悲心は茲に忽ち爆破し來て、遂に天保八年二月十九日を以て大阪に兵を揚げて一大悲劇を演じたのである。然も事遂に成らずして、養子格之助と諸共に暴吏の手に懸ると肩とせずして、三月二十六日火を放ちて自ら焚死した。時に年四十有四であつたといふ。是れ所謂身を殺して仁を成したので、何んと天晴

大内義隆の夫人貞子と同情の歌

なものではい乎いか。斯くばかりに深刻なる同情や愛情に富んで居るのが卽ち大悲を以て體とする菩薩と稱するのであります。昔、周防の城主大内義隆が夫人の貞子（萬里小路內大臣秀房の女）の外に愛妾を抱へられて燭を秉て夜遊することも數々あつて、夫人の方の愛が、とすれば衰へ勝で、夫人が孤閨に泣かれしことも思へば隨分痛ましい位であつた。其處で或人が夫人に向て、少しは嫉妬をなされても善いでは御坐らぬかと、燒き立てましたとき。同情深い夫人は涙に咽びつゝ取り敢へず斯く歌はれた。

身をつみて人の痛さを知られける
　戀しかりけり戀しかるらん

同情と蟲聲

此の同情の矢丸のみは、流石の大内義隆も防ぎかねて、忽ち悔い改め、愛妾も又宏量にして同情ある夫人の言葉に感激して、自身から永の御暇を頂戴することにしたとある、實に其の戀しかりけりとて、夫人自身の戀情から、又推して戀しかるらんと愛妾の身の上を思ひ遣りたる至誠慈愛は何んと絶大なる美觀では無からうか。身を殺して仁を成せし大鹽中齋や、讎に報いるに德を以てした大内義隆の夫人やなどの非凡な同情は兎くとも、せめて親しきより漸次疎きに及ぼして、同胞相愛は勿論、動物の虐待なども斷じてせぬやうに心懸けたいものである。

行水の捨て處なき蟲の聲

嘸々

今上陛下御仁慈と中宮祠の鹿

なその慈愛き心の程は單に詩趣の深遠なる外に、尤限の同情がはのめいて居て、仁、禽獣に及ぶところか喞々たる秋の蟲にまでも及んで居るのである。是に就きて想ひ起し奉るは　今上陛下の御仁慈であります、卽ち左に『聖德餘聞』十四の記事を拜寫して餘光を奉拜致しませう。

中宮祠の鹿

明治九年の夏、東北御巡幸の折かとよ、六月八日の朝まだき、日光の行在所を出させたまひて、中宮祠に行幸あらせらる。囘馬村にて、伊藤幸七といへるもの〻家に憩はせられ、そこよりは山路いと嶮しければ御輿に召し代へて上らせ給ふ。をりふし夏の最中なりければ、御輿の簾高く捲かせて、道すがらの景色を御覽じたまふに山深き習とて六月といふに木々の梢なは綠深く、吹き來る風もおのづから薫りたり。いと憐と思しつゞけ給ふ折こそあれ、一叢の黑雲、黑髮山の頂に覆ひひろがると見る間もなく、驟雨さつと降り來りぬ。縦、栂などの梢を始め小笹、篠、竹風に騒ぎて、あなやとはかり、供奉の人々は、ひた濡れにぬれつゝ、あはてまどひて、御氣色いかにと、伺ひ奉りけるに、陛下は、御袖もて靜に雨の飛沫を拂はせ給ひながら、御輿の上ゆたかに、溪山の雲のたゝずまひをいとをかしと愛でさせ給ひ、天機ます〳〵麗しくおはしましけり。

やがて雨晴れ、雲も又收りぬれば、人々はと息つぎて、衣の袂絞りあへるなど、行旅の習とはいひながら、雲の上なる御身には、いと珍しと、御覽じたまふなるべし。かくて正午近き頃、かねて行在所と定めさせられたる、中宮祠の社務所に著かせたまひぬ。

陛下の御聖德と禮記

晝の供御めされて後、端近う御座をうつして、湖山の勝景を御覽じたまふに、中禪寺の湖、碧水鏡の如く澄みわたりたる、四方の山々の滴るはかりなる新綠の倒に其の影を涵せるさま、得も言はぬ眺望にて御興とり〳〵にいと濃かなり。をりふし二群の村民、社務所に參りて『此の曉しも、一頭の大鹿を獲て候へば叡覽に供へたてまつらむとて生ながら率きてまゐれり』と、申し出でけり。人々『めづらしの獲物かな、さこそ興がらせたまふべけれ、よくぞ獻りたる』とて、やがて大御前に率かせければ、

同情は宇宙自然の大法則

陛下、御感斜ならず、村民に多くのかづけ物賜ひて、歸らしめたまひけるが、やゝありて、侍從を召し、『あの鹿、放ちやるべし』とぞ命じたまひける。侍從等は此の鹿を今宵の供御にこそなどひそかに思ひ居たるに、かゝる大御言下したまひつるを承りては聖德宏大にして御惠の光溫かにかゝる禽獣にも及べるを感じ奉りて、驟雨に濡れし衣の袖を、重ねて感涙に濡しけるとぞ。

斯る御聖德の深遠なるを思ひ奉りて、禮記の所謂『諸侯死レ故不レ殺レ羊、士死レ故不レ殺二犬豕一』とある聖人の意に相ひ比較しまるらせても、流石に大御心の愈よ仰げば愈よ高きを拜し奉らるゝではありませぬか。上來の諸說を歸納するといふと『同情』といふことは卽ち宇宙自然の法則であつて、有情非情の差別なしに平等に冥々のうちに行はれついあるものであるといふ

結論に到達したのであります。換言すれば宇宙の萬象は同情の交換に依て始て成立しつゝあるので如來が衆生相互に恩ありと稱せられしが此處の道理である。然るに此の自然の法則に背き此の萬象成立の基礎を破壞して天地の間に生命あるものを無益に殺すといふことが大罪であらずして何う致さう。故に藏疏に曰く

同情の理と殺生戒

藏疏の三理由

戒の次第

制意者一由斷生命業道重故。貪此重業不堪入道是故大小二乘道俗諸戒皆悉同制

二由違害大悲心故、瑜伽云若有問言菩薩以何爲體應正答言大悲爲體、尙須爲物捨身況害彼命

三背恩養故下文云、六道衆生皆父母生々死々不從是而生豈得害云云

以下七箇の理由を列擧しあるも今は繁を恐れて畧しおく、詳しくは梵網經要解卷三四を參觀せらるべし。

次に戒の次第である。聲聞戒では婬戒を先とし菩薩戒では殺戒を先とするのであるが是れには二箇の理由がある。聲聞は元來自利主義であるから自家の修養が先である。而して自家の最も起し易き罪といへば殺戒よりも寧、婬戒である、故に第一に之を愼むといふが一理由である。次に此の婬欲は三界に繫縛さすには重い煩惱であるから、彼の聲聞の如く早く此の繫縛を斷ちて涅槃を證せんとするには最も戒心すべき煩惱である。故に第一に之を戒むるといふが一理由で、以上二種の理由から最初に婬戒を提供して戒めたものである。然るに菩薩になると元來が利他主義で、先づ自家は菩薩の位に居ても、他人をして早く佛果を得せしめやうとするのであるから、從て自己に關することよりも寧、他人に關する方面から戒法を護持してゆくのである。卽ち菩薩の萬行は大悲を以て本とせざることなし、行本を存せんが爲めの故に先に制するなりといふが第一の理由。有情の重ずる處は形命を以て先とせざることなし、物命を救はんが爲めの故に先に辨ずるなりといふが第二の理由で、各々此の如き所以あつて次第順序を異にして居る譯である。

文意

若佛子

文意

若佛子、若自殺教人殺方便殺讚嘆殺、見作隨喜。乃至咒殺殺因、殺緣、殺法、殺業乃至一切有命者、不得故殺是菩薩、應起常住慈悲心、孝順心、方便救護一切衆生、而反更自恣心快意殺生者、是菩薩、波羅夷罪

若佛子　若の字には『汝』といふ訓もあり又『如』といふ訓もあるけれど今は『如』と云ふに從ふべし。是れ『汝』といふ時は現在其處に居る者のみを指していふことゝなつて卽ち現機に局在して其の意は狹くなるが、今之を『如』といふ時には廣く現在の者にも未來の者にも通ずるから戒意に契ふて善いのである。靈空や澤山なぞは之を『汝』と訓じさせて居るが何うも善くないとの定說である。佛子とは既に大心を發して此の大戒を受け以て佛家を繼紹すべき嗣子であるから、斯く在座受戒の面々より當來受戒せんとする人々に向て、佛子よと御呼び出

若佛子の解

自殺の解
自殺の種類
自殺に關する動機の種別
次
惡心自殺

し遊はした御言葉で、實に勿體ないはゞ有難く感せられる仰せ言ではありませぬか。

自殺　明瞭の跡に依ると自殺に二種ありとして、第一が卽ち自ら手を下して他身を殺すこと、第二が自ら手を下して他身を殺すことゝの二つで、而も自身を殺す動氣に就て、三種の區別あることが示してある。卽ち左の如くである。

自殺
- 自身
  - 第一――惡心を以て自殺す。
  - 第二――身を厭ふて自殺す。
  - 第三――生の爲め道の爲に身を亡して物を濟ふ。卽ち身を殺して仁をなす。

而して此の中前二種の自殺は、聖教に違背して俱に輕垢罪を結するといふ。何者經には身は无常なりと說かれたなれど、而も其身を厭離せよとは說かれてないのである。然を厭世の結果、遂に自殺するに到れるは、卽ち聖經に背く行爲であるといはれた。後の一種は福をこそ得れ、犯罪の點は毫末もないとの說である。

惡心を以て自殺するとは先づ何んなことであらうか。所謂世俗にいふ憤怒の餘り面當に怨恨ある家の庭前に行て縊死したり切腹したり井戸に陷入たりするやうなことであらう。彼の道樂息子が兩親の切諫に出會ひし時、燒糞となつて、己れ見て居れ今に死んでやるわいなどといつて遂に自殺するやうなことも、惡心を以ての自殺であらう。彼の嫉妬深き惡女が、自分の男を寢取られなどした時にも、腹立しさの餘りに己れ今に惡靈となつて取殺しくれんなどゝ書置きして、剃刀で自害するやうなことも惡心からの自殺であらう。

厭世の自殺
藤村操と人生不可解
村上博士の處世觀

身を厭ふて自殺するとは既に澤山あることで、彼の藤村操が華嚴の瀑に投身してからでも、世間幾多の青年が厭世の爲めに或は淺間山に、或は阿蘇山に、此の世からの地獄たる火坑を尋ねて、自殺したなど例證はいくらでもある。藤村は宇宙や人世が不可解であるからとて世を厭ふの極、自殺したのであるが此種の問題に就て、村上博士の左の數語の如きは、最も翫味すべき幾多の教訓があるやうに思はれる。

人の目は世界の極端は見にぬが近處は明かに見にるのである。遠方の見にぬも事實で近處の見ゆるも又事實である。故に視力の及ばぬ處は疑問の裡に葬りおくと同時に視力の及ぶ近處の事までも疑問の裡に葬ることは出來ぬ。梅の花は何故に奇麗で好き香を持て居るかは到底解釋の出來ぬことではあるが、人は之を自然に愛することを知る。解釋が出來ぬからとて梅は愛することが出來ぬであらうか。又、人生の目的は生を愛するに在り、其生を愛するは自然や天然を愛するなり。人生の目的が生を愛するとせば道德の標準も亦明に生を愛するに在ることが了る。生を愛する行爲が善で生を愛せざる行爲は惡である。其生を愛すると云ふは己れ一人の生を愛するのでなく他人の生をも愛し施いて動物の生をも愛すべきなり。

宇宙は既に無限のものである。然らば有限の人智を以て此の大理を極め盡さうなどゝは既に

常識を失ふた一種の狂者である。氣が狂ふて遂に自殺するに至りしも本來生學問の結果で華嚴經に所謂、牛飲水成乳、蛇飲水成毒、智者學之成菩提、愚人學之成煩惱。と仰せられし愚人の學問は實に如此き危險なものである近世、多く此種の愚人が學問することの流行するのは誠に寒心の至りである。其他學生の試驗に落第せし結果、意氣忽ち銷沈して捲土重來の勇もなく、悒々鬱々として遂に自暴自棄して自殺したり。或は商人が實業に失敗して勇氣頓に沮喪し、

世の中を渡りくらべて今ぞ知る
阿波の鳴門に波風もなし

など人世行路の艱苦に堪へ兼ねつゝ卑怯にも自殺して依て以て此の慘たる苦痛より脫れ去らんが爲に終に自ら命を損すやうなことをするのも皆此の第二種に入るべき人なのである。世には自分の身命は自分の所有であるから之を勝手に殺さうが生かさうが將又斷うが突うが自主自由の權利であつて、隨て他人の迷惑にもならないから、決して自殺の如きは罪惡では死からうではないかなどゝ誤解して居る人が、往々有るやうである。處が善く〳〵考へて見ると云ふと、自己の一身は直に宇宙の萬象に關連して居て、一身は卽ち社會の一員、國家の一人であるから、喩へていふと大廈高樓を組織する數多の柱木の中の一柱木であるのである。故に其の柱木を勝手に切斷したり引拔いたり時には、忽ち其の大廈や高樓の弱味となつて他の數多の柱木に忽ち影響して、遂には大廈の傾き高樓の倒るゝ素因をなすのである。特に因緣あつて父母より受け得て然も天地の恩惠に浴して成長したる身命は直に父母の遺體である。直に天地の所有である。想て茲に至れば自分の一身は決して自分の物では死くて卽ち一種の公有物といふべきものではあるまいか。斯る尊い公有の一身命を僅かなる私情に驅られて輕々しくも勝手に自殺するといふことが何んと罪惡にあらずしてどう致さうぞ。故に最明寺時賴の歌にも。『いたはりて親の育てし甲斐もなく身をあだになす人ぞはかなき。といはれてあります。生の爲に身を亡すとは如何なる事であらうか。是れは多くの生類を救ふ爲に一身を犧牲に供するのであるから、日清戰役の砌、彼の丁汝昌が旅順に於て部下の多くの將士を救はんが爲に、白旗を揭揚せしめて日本に降參したと同時に、自分が將士の身代になつて毒を仰で自殺したなどのことが、正しくこれである。道の爲に身を亡すとは如何なることであらうか。是れ卽ち忠孝仁義の爲に自殺するのであるから、例せば武田勝賴の夫人が良人の戰死後、其の後を慕ひて髮を切り捨てつゝ、

黑髮の亂れたる世ぞ果てしなき
思ひに消ゆる露の玉の緖

と歌ひて自害したるが如き。又貞操の爲に袈裟御前が、良人渡邊の渡に代りて

露深き淺茅が原に迷ふ身の

智者の學問と愚人の學問
行路難の歌
自己の一身と社會國家の關連
國家の一員と杜木の喩
一身は一種の公有物
濟生の自殺
丁汝昌の自殺
爲道の自殺
武田勝賴夫人の自殺
袈裟御前の捨身

いと〳〵暗路に入るそかなしき

と辭世を殘しおきて、彼の遠藤武者盛遠の刃にかゝつて、自殺同樣の他殺を受けしが如き皆な是れである。上來、生の爲、若くは道の爲に身を殺して物を濟ふのは同じ自殺にした處が既に其の自殺の原因たる動氣に於て是は善心であるし、其結果に於ても世道人心に裨益すること莫大であるから、此如き有益な自殺は社會組織の木柱を鐵柱に扱き換へたやうな理合となつて居るのである。故に聖教に隨順して福樂を得る善の自殺といふものであります。

教人殺　法藏疏に依ると、人を教へて殺さしむるには、二種の場合があるとて、第一に他人に教へて自死せしむる場合、第二に他人に教へて殺生せしむる場合との二つであるといふてある。是れも生の爲、若くは道の爲に他人に教へて自死又は殺生せしむる場合には其の動機は善であるから從て其の行爲は犯罪ではなく還て福德を得べきであるが、今は私情の惡意より出で〻教他する場合を說くのである。

其の種別

惡意の教他殺

長曾我部盛親の教人殺

長曾我部盛親は家兄を教へて自死せしめ、依て以て自ら其の家督を取てしまつたことがあるが、後、德川家康は此の盛親を引見せしとき侍臣より此の罪惡を聞かれて嗚呼元親の子にして此如き暴戾背德のものがあるかとて遂に座より立たしめたとある、成程是れが人に教へて自死せしめたる教人殺といふものである。

額朝の教人殺

又賴朝が彼の僧昌俊に教へて弟の義經を京師堀川の邸に殺さんとしたことが鎌倉史に出してある。初め昌俊が京師に入りし時、義經の士、江田弘基が其の從騎の餘りに多人數なるを怪みて走て義經に告げたから、義經は弘基に命じて昌俊を召さした。處が昌俊はなか〳〵出て來ない、更に辨慶を遣はして呼び出したが昌俊仕方なしに出て來たのである。而して義經が何故に直に來り見ないかと詰問すると昌俊の曰く、臣が此度の入京は七大寺參詣の爲で今や其の齋時に在るのであるから大人に見ん申さなかつたと申上げる。然らば何ぞ寺詣で位に多人數の從騎を率るるや。否は是は他の盜賊に備ふる爲で他意あるのでは御座らぬ。義經笑ひつゝ曰く吾れ之を知れり、汝、二品の旨を奉じて我を窺るが爲に來れるに相違ない。今汝を捕へんとは思へども汝は兄の使者なり。吾れ先に手を發するは道に非ず。暫時汝を許さんのみと言はれた。義經は中々見上げた心懸けである。時に昌俊は手から誓詞十紙を書きて舍に還た。然るに義經の侍姬靜御前が、戶の隙より昌俊の擧動を窺ひ知て義經に忠言すらく、彼昌俊が將に去らんとする時、邸中を顧眄して最も其の目を厩に注いで居たのである。恐くは彼は異志を懷いて居るに違ひ无いと申上げたが、義經は素より昌俊を易りたれば爛醉して寢に就き、將士は皆歸休してしまつた。唯、留り宿直するもの僅に七人のみであつたから靜御前の心は獨り安ずることが出來ないのである。卽ち靜は二童子をして往て樣子を探らしめたが久しくしても還て來ない。怪しやと又も一婢を使はしたが、婢は趨り還て言ふには二童は皆既に門前に殺され、門內の人は甲を擐、馬には鞍を置いて居ると、上申する言葉の終ら

ぬ内に早くも第外は大に騒譟して人馬の音は響き刀槍の光は輝き來たつた。靜は心も心ならず急ぎ義經を揺したけれど眠りなか〳〵寤めやうともしない。貧乏人の子は茶碗と箸の音に目を覺ます。武士の子は馬の靴輪の音に眠を覺ますといふが。さても靜が鎧を取り出して之を振ふた鏘然たる音には忽ち燗酔熟睡の義經の目を覺まさしめた。卽ち蹶然として起て叱咤一番大門を開かしめ騎して飛び出でゝ呼で曰く、方今誰れか敢て我を圖る者ぞと吐鳴り立てた。昌俊は門內に備のあらんことを疑ひて敢て寸歩も進み得ずして唯々兒玉黨の六十騎と環射するはかりであつた。然る處へ義經の士卒の歸休せるもの皆、此の變を聞きて四方より集り歸た。行家も又來り救ふた。流石の昌俊も此の有樣に敗走するに至た。義經は徑ちに法皇の宮に詣りて奏して申上ぐるやう。臣の儕めざる斯く天聽を驚したてまつることのあらんとは然れども賊は已に走り去りぬ、願くは聖慮を煩し玉ふ勿れと。乃ち自邸に立歸たところが義經の胄に矢の集れること蝟の如くで其の箙に殘り在るは唯三箭のみであつたので皆今更のやうに義經の勇に感心したといふ。昌俊は北に走りて鞍馬山に匿れた。山僧は義經と舊交ありしが故に之を僧正が谷に捕へ獲て縛して送り來た。乃ち義經は彼が誓詞に背きし所以を詰めし時、彼れ對て曰く誓ひし者は此の昌俊であるが殺さんとして襲ひし者は正しく二品（頼朝）である。義經怒りて其の面を毆つたが昌俊意氣豪然として曰く我が面は足下の兄二品の面であるぞ、弟にして兄の面を毆つ何する所爲ぞやと。何んと此の昌俊の言葉は面白いでは

ないか。成程兄頼朝に教へられて義經を殺さうとしたのであるから彼が斯く抗言するも道理である。遠の義經も其の對を壯なりとして意の內で彼を釋さうと思ふて居たが昌俊より速に死を賜へと請ふたから遂に義經は之を嗟賞して斬てしまつたといふことである。是れが卽ち教人殺といふものである。尤も昌俊は謀殺未遂なりしかを頼朝の方では明に教人殺となつて居るから引例にしたのである。

方便殺　方便とは殺前の方法で所謂水雷を敷設しておくとか地雷火を伏せおくとかいふ總て殺す爲の方法である。故に殺業を遂ける時には手を降さずして彼をして終に死せしむるやうにするのである。故に要解には方便殺とは或は縛り或は繋ぎ是如く方便を作しおけば彼れ自ら死するぞと知て更に刀杖等を加へず、彼をして終に死せしむるを云ふなり云云とある

讃歎殺　是は或は殺生する人を讃歎して君は獵獸の名人ぢや、君が銃丸は百發百中ぢや、實に其の手練の程は見上げたものぢやなどゝ譽めそやして彼をして愈よ殺業を遑うするに至らしむるなどのことである。或は殺生するてたてを讃歎して殺事を成就せしむるので、獵銃の手入れの行屆さあるを讃して是れならば素人にでも甘くやれるであらう、況や君の手腕を以てして是れたもの、卽ち鬼に金棒ぢや、僕が見て居るから君一發鳥でも何んでも射擊して見せ給へなどゝ、讃歎して殺生さすやうのことで、斯ることは心得て居ないとつい〳〵不覺に犯罪するものである。

方便殺の解

讃歎殺の解

惡意の讃歎殺

善意の讒謗殺

見作隨喜の解

信長の首實檢

家康の首實檢

呪殺の解

又同じ讒謗殺でも、彼の仙臺萩の芝居に正岡が我子の千松を忠死せんことを平生より譽めおきて遂に主君鶴千代の身代に毒を仰で死んだ時、『譽められたさが一杯に』云云の愁歎を正岡が演ずることがあるが、是等は其の動機に於て既に忠義の爲といふ觀念から來た讒謗殺であるから、善業であつて犯罪では无いと言はねはならぬ。

見作隨喜　殺事を見聞し、又は人の死を見聞して、自心に喜はしく思ふのである。或は又自分の隨喜に依て、彼の人の死するなどのことである。昔、武田勝頼が天目山に戰死したとき、其首實檢を行ひしに、信長は彼れ多年の怨敵が戰敗して今日あるに至りしを非常に隨喜し狂喜して而も傲然榻几に憑りしまゝで勝頼の首級に對して汝今日の面目果して如何ぞ、本んに善い氣持ちや、汝の樣を見ろよ。とてさま〴〵に罵譬したことがあるが是れが卽ち見作隨喜である。然に流石に、信念深き家康はなか〳〵是とは雲泥の差である。勝頼の首級を回送して家康の陣に運はれたとき、さては武田殿も遂に武運に御盡きなされたかと、敵をも敵とせずして香華を手向け榻几よりねざ〳〵起ちあがりて、丁重に一拜せられたとある。其他本書上卷に信長の性質を叙したる條下は當に此處に引例すべき恰當の話材であらうと思ふ。

乃至呪殺　呪殺は印度婆羅門ぢもの行ふたもので、是を吡陀羅殺といふさうしや。優婆塞五戒相經などに見ゐてあるとのことで、先づ何んなことをするかといふと、茲に一死人がある、其の死體の生ま〳〵しい內に其の屍人を清潔に澡浴さして衣服を著せ手に刀を捉へさして、さて呪文を誦するといふと何と不思議なことぢや。電力でもかけたかのやう忽ち屍人が全身を動し起ちあがるといふ。其時、心に念じ口に言ひて曰く汝今某の處に往て某の人を殺せと。恰も催眠術に罹た人のやうで此方の暗示通に忽にして彼の屍人が命令の人の處に至て殺し果すといふことである。然るに若も當の人が禪三昧に入てをるとか大呪師に護せられてゞも居るか若くは天神佛菩薩に護せられて居る時は彼の屍人の力では殺すことが出來ない卽時に本處に立歸て先に頼みし人を還て殺すといふことである。普門品の中に呪詛諸毒藥所欲害身者念彼觀音力還著於本人と說れたは是れである。此の呪殺の變態として日本では田舍などにゆくと神木に釘を打ち藁人形に釘を打ちなどして呪詛して人を殺さうとする。備前に骨皮道通神とて大蛇を神に祭てある處がある。其の神に祈願して怨恨ある某を呪殺せんと念ずるといふと其の人は哀や骨と皮とに瘦せ衰へて死んでしまふさうである。是等は一種の迷信には過ぎないけれども、祈られた人は此の風聞を耳にして自ら神經を痛めて瘦せるのでもあらう。乍併念力は恐しいもので善惡ともに强勢なる一念力に思ひ込められたときは。心靈の靈感作用で隨分念じ殺すことも出來るであらう。

因緣法衆の解

殺因殺緣殺法殺業　是は殺事を成就する形式を明されたものである。いざ殺してやらうと思た最初の一念が殺因といふもの、其の最初の殺心を助成する後念の心が殺緣といふもの其れから刀劍を用意する、ピストルを買ひとる、手を運ぶ足を運ぶ等の總ての方法手段が殺

法といふもの、遂に最初の殺心に殺緣殺法が結び附て彼の命根を斷ちて殺事を究竟するを殺業といふのである。孰れの場合を問はず殺事の業道を成就するには必ず此の四を具足せねはならぬ。故に一殺事を遂げた者には必ず此の如き殺因等の四ありと如來は仰せられた。既に此の四の原因あれば未來には又其果報が必ずや添ふてくるのである。瑜伽論第八には事、意業、方便、煩惱、究竟、の五支を說かれて此の五支具足して必ず業道を成就すといはれ若し一支をも闕けば業道を成せずと示された。而して今の四支も此の五支も開合の異で實質は二者同じであるのであるとの古迹の說は尤もである。卽ち左に圖示して廣略の相を述べやう。

五支と四支の開合

瑜伽論
- 事
- 五支
  - 意業 ― 殺緣
  - 方便 ― 殺緣
  - 煩惱 ― 殺法
  - 究竟 ― 殺業
- 支
  - 方便 ― 殺因
  - 煩惱 ― 殺法
  - 究竟 ― 殺業

此の如く殺因を分類すると第一に煩惱といふ惡い奴が心中に潛在して居るから、異境に觸れるといふと忽ち堪忍袋が切れてきて遂には己れやれ生かして置くべきかとの一念殺心が第二にむら〳〵と起り來るのである。

彼れ信長が或時將士をして酒を飮ましめたことがあつた。其時の酒盃に出した品は物もあるべきに今川義景と淺井長政の頭骸骨であつた先づ光秀をして此の觴を擧げて飮まさしめた光秀隱忍して強て一杯を飮み了ふせたが。一杯二杯又一杯と强て進められた。餘りのことに再三之を辭したけれども信長はなか〳〵に許さない。許しがなくとも人情上何んとしても重ねては飮めない。飮まずに躊躇してをると將士列座の眞唯中で迅雷風烈忽ち信長の打擲を受けた。續いて森蘭丸の鐵扇で以て武士の眞額をしたゝか打たれた。早くも流血淋漓たる有樣となつた時、嗚呼光秀心內の煩惱魔が勃然として頭をむくり揚げかけた。嗚呼無念なりや殘念なりや、如何に御主君とは申せ這は又餘りの成されかたである。最早や斯くも生恥を蒙る上からは信長は主君でもない光秀は譜代の臣でもない。己れやれ今にぞ思ひ知らせくれんずとて、

煩惱と殺因

信長に對する光秀の殺因

信長に對する光秀の殺法殺業

心しらぬ人は何にとも言はゞいへ
身をも惜まじ名をもをしまじ

と述懷して一念殺心を起し來たのである。故に殺因の中には此の煩惱と殺心との二支を具足してあるから瑜伽論には斯く詳說されたものであらう。其れから光秀が本能寺の堀の深さ幾尺なりやと探りしなどは殺法で瑜伽の所謂方便である。遂に本能寺に於て信長を四十九歲を名殘として殺して終つた處が殺業で瑜伽の所謂究竟といふことである。

一切有命者の解

一切有命者　此の句は輕を擧て重を誡めたので罪輕き殺生すら猶作すべからず況してや

上品の衆生たる諸佛聖人父母師僧等を害して逆罪を得たり。又は中品の衆生たる人や天部を害して重罪を犯したりなどなしてはならぬ。故に下品の衆生たる禽獣虫魚(四趣の衆生)等の有命者をも故らに殺しては相成らぬと誡め給ふたのであります。故に此の一句は下品の衆生と言はれた禽獣虫魚に就て无益の殺生を誡められた有難い御旨趣であるから昆虫學上より少しく御話を致しませう。

加賀の千代が我が子を死なした時に手向けたといふ句に、

蜻蛉釣り今日は何處まで行たやら

ともある通り日本の子供は何處も同じで此の蜻蛉を無暗に取りたがるものである。或は網して捕へ或は雌蜻蛉を以て雄蜻蛉を釣りなどして東に西に狂するばかりに執へたがるのである大分市の如きは此の蜻蛉釣が處の名物となつてあるともいふ位であるが。昆虫學上から論ずるといふと此の蜻蛉こそ實に害虫を喰ひ殺してくれる植物の爲の一大益虫であるのである。即ち此の蜻蛉あるが爲にキリウジやカガンボなどいふ害虫を捕て食ふのであるから兒童をして此の蜻蛉を捕へ殺さしむるは消極的には一の殺生罪を犯し積極的には一の植物の繁茂を害することゝなるのである。故に兒童に授戒をさして此の理を善く合點さしておけば一擧兩得右手に不殺の功德を積て左手に植物の繁茂を得て個人にも社會にも各々公私の幸福を得ることゝ相成るのである。又、枝尺蠖といふ虫があります。此の虫には二百五十種乃至三百種の異種類があるさうたが、此の尺蠖虫の蛹が、蛾といふものになつて桑の木の葉裏などに八百程も卵を産み附けるのである。其又卵が孵化して蠶の如く四度起きて四度化つて又始の如く繭を造るといふ。此の蛾は蚊擬蜂といふて肉食をする益虫なのである。故に是等は殺してはならぬのであるが知らぬが悲しさ、つい之をも殺す人があるのである。即ち此の尺蠖虫が黒くなつて倒れて居ることがある。其時此の死體を調べて見ると小さな蚊のやうな奴が尺蠖虫の卵を産みよつたのだらうばかりも現はれてくる。然るに世人は此の蚊のやうな奴が尺蠖虫の卵を産みよつたのだらうと思ふて直に尺蠖虫の死骸を捕へて燒いて仕舞ふさうなが、是りや大きな間違であるのである。先に言た如く此の死骸から現はれてくる蛾は正しく蚊擬蜂で、此の益虫の蚊擬蜂の母が、どうか自分の兒が成長するまで食粮の十分ある處へ産みおきたいとの慈悲心から探した揚句遂に此の尺蠖虫の卵へ注射して産み附けるのである、處が五日ほど經過すると其の卵が蛆となつて尺蠖虫の肉を食ふのである。尺蠖虫は此の身中の虫の爲に遂に食ひ殺されて仕舞ふと反對に蛆が成育して、蛹となり、羽も生えて空中を飛行しつゝ害虫を喰てくれるのである。此如き益虫が此外種々あるのであるから尚更に一切有命の者は殺さないが善いのである。

梵網迦葉上卷には虫水の事に就て左の如く示された。又虫ある水を用ゐなどすること皆此の戒に背く、律の誡なり、水を用ゐる時は必ずこまかなる絹をもて漉して用べし、五戒の優婆塞にすらよく虫水を漉して用べしといへり。況して菩薩戒を受けたる人は細に心を附

くべきものなり。凡そ水を漉すことは虫の命を救ふをもて詮とすれば、たとひ水嚢を用るとも雖、或は木綿或は布をもて造るは律文に契はずたとひ絹をもて漉すと雖、水嚢をよくすゝぎかへさゞれば、其の虫みな死ぬ。是れ死下に慈悲なきことなり。されば昔、二比丘あり、共の佛のみもとに至る。一は路にて死し、一は遂に到る。佛。到る者に問ひ給ふ。汝が伴は何處にかある。答て曰く彼は路にして渇すれども虫水を飲まざるが故に死しぬ。吾れは佛を見奉らんとて虫水を飲みて茲にいたれりと。佛のたまはく、汝、戒を持たずして我を見て何にの益かある。其の路にありて死せる者は天に生じて既に此處に至り、法を聞て道を得たりと。

汝、戒を持たずして我を見て何にの益かある』とのあはれ是れ此の如來の一語。在座授戒の方々よ、ゆめ〳〵あだにな聞き過し給ひそ。隨分の戒をも護持せずして經を讀み佛を念じたとても又亦何にの益かあるやである。元祖大師が我は戒も持たぬ十惡の法然房なりと仰せ給ひしも三學の中の戒に就てこそいはれたれ。隨分の戒に就ては仰せられないのである。左すれば大師は隨分の戒を自らも持ちて念佛申し給ひ他にも授けて念佛申さしめ給ひしことは御傳を見奉れば燦々としてあるではないか。故に念佛申さんはその者は必ず〳〵此の菩薩隨分の戒を護持して佛意に隨順しつゝ唱名せらるゝが肝要であると思ふ。

舊教の基督教では禽獸虫魚は造物主より人間の食料品として與へたるものと唱へて盛に肉

食をやるのである。佛教は或一部の地方を除て總じて菜食主義で、肉を喰へば大慈悲の性種子を斷ずとて此の肉食を成るべく嚴禁したものである。尤も開して肉食を許すこともあるが此の開遮のことは後段に至て總括して述べませう。是れに就て參考の爲めに梧窓漫筆後編上に書れた太田錦城の說を揭げておきませう。

我邦は四面大海故、魚類極て多し。故に人、獸肉を食ふことを不好、四足を食へは穢れなりとて國家の令申にもあり。世人も斯く覺なて忌み嫌ふ。是れも佛法仁柔の餘功なるべし。然るを香川修德と云へる者、邦人は獸肉を食はざる故に虛弱なりなぞゝ云ひおぞせし故に、近年は山國の人のみならず海邊の魚肉多き處まで皆な好で食ふことになりたり。今は江戸なぞにも冬月の獸店夥し。夫が故に惡瘡を發し中風に類する病を發する者少からず實に虛弱の人は牛肉鹿肉を寒月に小々食せんは補虛の功も有るべし。熊肉、猪肉は毒ありて其害少からず。偖、此國の人、飢饉亂世なりとも人を食はざるは獸肉を忌むの大功なり。今より此の如く獸肉を喜び食せば遂には人を食ふにも至るべし。殘忍の心も習より長ずれば虫を殺して止まざれば魚に至り、魚を殺して止まざれば鳥に至り、鳥を殺して止まざれば獸に至り、獸を殺して止まざれば人に至る。目出度風俗の邦なりしを大に香川の爲に破られたり。仁人君子は殘暴の源を塞がずんばあるべからず。云云

人文開明の今日特に衞生とか滋養とか八ヶ間敷くいふ此の時に當て肉食禁止とか若くは太田

錦城の如き説を今更のやういひ立てゝは世間或は一笑に附して仕舞て又も舊世紀の陳々腐々たる佛説かなぞゝ罵倒し去るかも知れないが、乍併虚心平氣に爲て克く〳〵考へて見ると又大に古を温ねて新しきを知り得る眞理が認取出來るのである。佛教の律制では食は朝と晝との二回に限られてあるが、近世理學の大斗發明の大偉人トーマス、エヂソンの平生は極少量の二食ださうで、人の長生して活動せんとするには食量は少分はど善く又二回位に限るとの持論ださうである。又周易にも『節飲食』といひ、論語には『无求飽』といひ、蘇東坡は三養の中に胃を寛くして以て氣を養ふともいひし如くで小食は實に養生養福の術である。然るに文明と言つて生羨の洋食を度々食ふては腹中に條虫を涌かして疾病を起し又は惡瘡を發するなぞ現に事實としてあるから仕方がない。特に君子は庖厨を遠くるといふが人道の人情なるに彼の西洋の宣教師とも稱する身が、火炎の中へ鷄を抛げ込で之を生き燒きにし呱々として苦しまぎれに鳴きつゝ口を開けてちたはたする處へ可愛相に其の口へ醤油をつぎ込むで後、さて之を平氣で以て料理して喰ふといふに至ては、

牛喰ふと聞けばおろし讃美歌や

といふよりも寧、其の惨忍にして獰猛なる鬼の如き性情に喫驚せざるを得ないのである。斯くては習ひ性と爲て遂には人をも食ふやうにまで自然と大慈悲の性種子を失ふに至るであらう。孟子の『人將相食』と言つたは實に想像ではなくて或は事實となるかも知れない。故に衛

律僧の二食制とエヤソン博士の二食

蘇東坡の三養

庖厨

無情なる肉食者

生とか滋養とかに漫に藉口して餘り盛に洋食などをやるといふと還て不養生となり毒となつて天壽を全うすることが出來なくなるであらう。顔眞卿は八省の尚書なりしが而も俸米少くたとのことであるから小人どもが洋食の支那料理のといつて朝夕に珍羞を食ひむさぶるは冥覧瞿然として回顧し恐懼しなければならぬ。而して斯る眞面目なる信念の涌起するのも如來が一切有命の者を故らに食す勿れと御意遊ばした聖訓を拝授する御蔭といふものである。依て道俗ともに佛事の時だけなりと、せめては此の肉食を嚴禁して精進料理で以て勤められるが好からうと思ふ。

古聖の蔬食説

佛事禁肉

蛇食ふと聞けは恐ろし雉子の聲

あの聲でとかけ食ふかやはとよぎす

不淨の肉食をした口で誦經回向も何にとなく蛇食ひし雉子の聲、とかけ喰ひし杜鵑の聲ともたやう思はれるからである。

不得故殺の解

故殺と誤殺

不得故殺　是は故殺と特に仰せられて、誤殺の罪ならざることを示されたのである。而して故らに殺す場合には、善意を以てか若くは惡意を以てかの場合で有て、今は其の惡意を以て故らに殺すを得ざれと云はれたのである。尤も善意を以て故らに殺す場合は、福を得て犯とはならぬ。戒に開遮の設けある所以で後に至て詳説すべし。然に此の誤て殺す場合は先

誤殺と無記心
正法念經の五事無殺罪說
醫家の投藥殺
无記心の誤殺の有罪无罪

づ无記心でやる折が多からうと思はれる。其の无記心の殺生は毫も惡意の有てしたことではないから正法念經には无記不得殺罪と說かれた。卽ち其の經に之を細別して

有五因緣雖殺无罪。一道行无記心。二无心傷殺蟻蟻等命。三若擲鐵等无心而殺生。四醫師治病爲利益故與病者藥因命終。五然火虫入火死。如是五種雖斷生命不得殺罪

と說かれた。實に御親切なる慈誨と申さねばならぬ。

或劫盜が兒分を數多供にして某の醫師方に拔劍して押入た。すると其の醫者殿、いざござんなれと、怯む氣色微塵もなく一の藥匙を持て刃向ふた處が、何時になく劫盜の親分はう〳〵の態にて逃げ行たとある。兒分をも親分の今宵の卑怯なりしことを詰問すると、いや貴樣等は彼の恐しい匙を知らないか、刀劍もピストルもなか〳〵以て及びもよらぬ彼の匙は既に己に今日までに何千人といふ人を殺し來た滅法かい恐しい殺人劍ぢや。夫故に怪我のない內にと逃げたのであると言つたさうだ。實に世の醫師達は病を治する利益の爲に藥を與へて還て病人を誤殺する場合が今も多いのである。斯る誤殺は勿論無罪なりとの經意ではあるが。さりとて是れあるが故に粗漫なる診察をして漫然投藥するやうなことがあつては矢張り故殺の類罪に入ることゝなるであらう。是等は大に注意を要することゝ思ふ。

但し、賢愚經第九には无記心の誤殺も罪を得る趣を明し、藏疏に依るも无記心の誤殺に有罪說と无罪說との兩點を併舉せり。業道不思議なれば犯人の因緣に依て一規を以て準しがたきことあらん无記心殺生无罪なりとの常途の說相に剛致して業道を輕視することもあらは這はゆゝしき大事なり藏疏に世有愚人飮用虫水。曰我但用水本不害虫。虫若自亡固非我咎此不識業道不見聖教深可悲愚矣。といへり。

常住慈悲心の解
恣心快意の解
波羅夷の解

常住慈悲心云云　常住不變の如來を學して慈悲心を起せよと見る是れ一說。心恒に常に慈悲に住せよと見る是れ又一說。台疏には二義を揭けてある。要解も又前說に同じ。故に慈悲心は下化衆生、孝順心は上求菩提、常住の佛性には此の二を具する故に常住の如來を學するはやがて上求下化の二を行ずることゝなるのである。恣心とは數々殺行を行じて都て慚愧のない放縱の心なる故に上品の煩惱を以て犯ずる場合を示したのである。快意とは殺し終て悔いざるところか。甘くしてやつたりと愛樂歡喜する場合をいふたのである。下の戒皆之れに準知してよいです。波羅夷とは舊語で新語では波羅闍以迦といひ又波羅市迦といふともある。而して譯語も色々にいふが先づ極惡と翻譯してある方が一番解り易くて好い。以上文意の大要を講辯し了る。

拾遺　拾遺

佛戒は活殺自由の妙を極む
普通條理と特別條理

第一　開　遮

殺生は極惡なるが故に斷じて爲すべからずと遮し止めるのが遮門の方で普通の場合である然るに此の如き極惡と定めたる殺生をも時と場合とに依ては進で開き許して殺業を行はしめるのが開門の方で特別の場合である。故に戒は表に遮門を構へて消極的に否定主義を推し立てるけれども又其の裏には開門を設けて積極的に肯定主義を推し立てるのであるから、佛戒は活殺自由與奪自在にして運用の妙を一心に極めつくすことの出來る天空海濶の活きた戒法である。是れ敢て戒法に於て然るのみではない。世間のこと又亦此の一を知ると同時に其の二をも知らなければならぬ。茲に一の靜物あり、之に力を加へて動すといふと其の進行する や必ず一直線に走りゆくべき筈で是れが普通の條理である。而るに一々の物を檢して見ると直線にのみ走らずして地球引力の加減や空氣の觸れ工合や物體の形狀やなどその影響を受けて隨分と曲線に走ることがある、是れが卽ち特別條理といふものである。故に殺人は極惡の大罪で之を犯した者は絞罪に處せられるは普通の條理である。然るに此れあると同時に戰爭に出で、敵人を殺したときは忠なり勇なりとして之を感賞するは卽ち特別條理といふものであるのである。國家の爲めとか天皇陛下の爲めとかいつて、公益の爲め、忠義の爲めに殺人するのは既に其の動機に於て善意なるのみならず、其の行爲が既に善行といふべきである。故に特別の場合、特別の條理ある時に限て殺戒を開放して殺生を許すのである。彼の司馬法が

司馬法の格言と智旭の說

殺人安人殺之可也。『攻其國愛其民攻之可也。以戰止戰雖戰可也。』といひしも此の點からであらう。されば智旭の合註には「護生須是殺盡始安居也」と說かれたは同巧異曲で日清や日露の戰役の如きは全く東洋人護生の爲の戰爭であつたのである。さすれば怨敵を殺盡する底の終極まで進行してこそ東洋平和の眞の安居が得らるゝ譯だから、斯る時は天皇陛下や國民の命に代りて奮戰勇鬪せぬねばならぬ。

殺戒開門と古歌

幾度も主の命に代るべし
二心こそ長き恥なれ
大君の命に代る玉の緒を
何にいとひけん武士の道

日露戰役と殺戒

橫槊吟の一節

なといふ古歌こそ誠に殺戒開門の本旨に契ふた教訓といふべきである。予嘗て日露の戰役中『橫槊吟』を著はしたが其の中に此の間の趣旨を左の如く歌ふておいた。

しのゝの里に　これをさへ　忍びしのびて　早や十年
今ぞ平和と　人道の　爲めに躍然　起つが弓
弓矢八幡　神かけて　正義の旗に　なびかせん。
彼得斯堡　何のその　いざや進みて　敵を斬れ
殺人劍は　やがてこれ　文明平和の　活人劍

佛はこれを　　ほめましぬ　　利益殺生　　菩薩軍。
釋迦大聖も　　其のむかし　　正義の軍を　　興したる
善業いみしく　　報い來て　　金剛不壞の　　身を得つと
說かせ給ひぬ　　さては我が　　果報も金剛　　不壞ならん。

此の歌中の大聖の金口は涅槃經にあるのである。故に殺生戒を受けたからとて、何にも武士が武士としての戰場の活動に支障を來たすべき筈はないのである。然るに世には往々誤解して、佛教に從へば柔弱とのみなりて武人の氣骨を失ふやうに思ふのである。這は今も斯く誤解しつゝある人もあらうが、昔にも此の誤解があつたと見えて、斯ういふことが古事談といふ書に出してある。

前攝津守滿中、多田の宅に於て出家の日、同じく出家するもの男十六人、女三十餘人、云云件の日、惠心僧都戒師たり。受戒の時、第一不殺生、眠りて保由を稱せず（能く持つや否やと問ひしとき能く持つと答へざりしなり）第二戒より皆、保由を稱す。其夜、夜半ばかり新發意唯一人、密々僧都の宿所に向ひ云云。第一戒の時、心中には深く保由を存すと雖家人以下あなづりもぞし侍るとて候ふ、眠れる體にて、保由を稱せず、定めて御不審候ひつらんとて子細を申さしめんため參らしむる所なり云云
こある。是れ武人としては殺生戒は受けらぬものと誤解しての所爲であつたのである。惠心僧都の戒師のことであるから、懇切に此の誤解を御解きになつたに違ひないと信ずるが、兎に角に佛戒を融通のきかない、至極固陋な四角四面のものとのみ思ふ人が世に多いのである。此等の人達は活眼を開いて能く開遮持犯の相を洞視せられたがよいと思ふ。

一殺多生の利益殺生といふことがある、是は瑜伽論四十一に出てある話で今之を和文にして紹介しやう。『若し諸の菩薩、菩薩の淨戒律儀に安住して善權方便して利他の爲の故に諸の性罪に於て少分現行す。謂く菩薩、刼盜賊の貧財の爲の故に多の生を殺さんと欲し或は大德の聲聞獨覺菩薩を害せんと欲し或は復多の无間業を造らんと欲するを見るが如き是の事を見已て發心思惟すらく、我れ若し彼の惡衆生の命を斷せば當に地獄に墮つべし、如し其れ斷せずんば无間業成して當に大苦を受くべし、我れ寧ろ彼を殺して那落迦に墮すとも終に其をして无間の苦を受けしめずと、是の如く思惟して彼の衆生に於て或は善心を以てし或は无記心にして是の事を知り已りて當來の爲の故に深く慚愧を生じて憐愍の心を以て彼の命を斷ずるが、此の因緣に由て菩薩戒に於て違犯する處無くして多の功德を生ず』已上即ち多人を救ふ爲に一人を殺すといふ意趣は國家を組織する以上必ず、存置の必要があるので換言すれば國家に刑法權を持て居て罪人を刑罰に處する原理も又亦此の利益殺生から出たものであるのである。何にも國家と罪人個人と比較して國家の方が個人よりも強いから所謂強者の權利といふやうな冷酷な觀念から刑罰權を持て居るのではない。畢竟ずる處、或一惡人の存在を國家が許し

ておくといふことは國民多數者の不爲めばかりでなく國家が國家として發達してゆくといふ上に非常な妨害となるべきものであるから。遂に其の一人の生命を國民の犧牲として國家が刑法を加へるといふのである。而して又惡人が刑法を加へられるといふことは本人自らは痛苦を一時は感ずるかは知らぬが爲に國家の發達が增進したとすれば又還て之が本人の幸福といふもので、國家發達の恩惠には其惡人も又生存して居れば良民と同樣に其の恩惠に浴するからである。設令ひ死刑の宣告を受て當人は刑場の露と消てしまふとも國家が多人數に對する慈悲心の程を公平に思考すれば甘んじて瞑目すべき筋のものである。何者本人も又罪前には其の慈悲を共受すべき多人數の中の一員であつたからである。されば國家に刑罰權の存在するのは決して强者の權利といふ點からで无く一殺多生の慈悲心卽ち高遠なる倫理上より附與せられたる眞理にして且つ慈愛ある權利と解釋せねばならぬと思ふ。而して此の性罪たる殺生などを開して行ふに就ては天台、南山、圓測の諸師は一向上位の人の所行で、なか〳〵凡位の者の行ふべき事柄でないと云はれた。但し大賢師のみは凡位の者も行ふて可然と定められた。小人珠を懷て罪ありといふこともあるから凡位の者の輕々しく行ふべきことではなからう。乍併國家の上位に立つやうな人とか又凡位でも事理に明なる賢人ならば好からう。況してや戰爭の時の如く大賢の將軍より指揮を受けての上ならば凡位とても行ふて然るべきである。以上は重に人類を殺す場合に就ての話ちやが。彼の稻田や山林などにて害虫を驅除すること

殺生の開門と實行者の種別

一殺多生と害虫驅除

ることなどは利益殺生として盛に行はねばならず。又彼の國家産業の爲には養蠶の如きも利益殺生として奬勵せねばならぬことゝ思ふ。

次に人類の疾病を救ふ爲には禽獸虫魚を殺して藥餌とか滋養物とかにするには所謂小の虫を殺して大の虫を救ふのだから善心より出でゝさへ行へは開いて許すのである。例せばペスト撲滅の爲に鼠狩りなどをやることである。但し此の時、將に殺さんとする禽獸虫魚に心念口言して願ひ祈るべし。我今惡疫の傳染を防ぎ恩人の疾病を救はん爲に死慘ながらも汝等の生命を貰ひ受くべし。さる代りには汝等の成佛得脫を回向し祈願せん、汝是畜生發菩提心と。然なくして快意恣心にて殺生せん誠に業道の逃れがたきことあらんと思ふのである。今や左に孝養の爲に法師にして川に漁せし例話を『古今著聞集』より抄出しやう。

白河院の御時、天下殺生を禁斷せられければ、國土に魚鳥の類絕にけり。其の比、貧しかりける僧の年老いたる母を持ちたるありけり。其母、魚なければ物を食はざりけり、たま〳〵求め得たる食物も、食はずしてや、日數ふるまゝに、老の力いよ〳〵弱りて今日は頼むかたなく見にけり。僧悲しみの心深くして尋ね求れども得がたし。思ひ餘りてつや〳〵漁とるすべも知られねど、自ら川の邊に臨みて、衣にたまだすきして、魚を伺ひて、はにと云ふ小さき魚を一つ二つ取りて持ちたりけり。禁制、重き頃なりければ宮人見あひて、からめ捕りて院の御所へ率て參りぬ。先づ仔細を問はる。殺生禁制世にかくれなし。いかでか

孝僧の魚獵と白河院の感賞

其の由を知らざらん。況や法師の形して其の衣を着ながら此の犯をなすこと一方ならぬ科、遁るゝ所なしと、仰せ含めらるゝに、僧、涙を流して申すやう、天下に此の制重きこと皆承る所なり、たとひ制なくとも法師の身にて此の振舞ひ更にあるべきにあらず。但し我れ年老いたる母を持てり、唯我れ一人の外、頼めるものなし。齢長け身衰へて朝夕の食物たやすからず。我れ又家まづしく財もたねば心の如く養ふに力たへず。中にも魚なければ物食はず、此の頃天下の制により魚鳥の類ひいよ〳〵得がたきにより身力既に弱り之をたすけん爲に心のおき處なくて、魚とるすべも知らざれども思の餘りに川のはたに臨めり、罪に行はれんこと案のうちに侍り、但、此の捕ふる處の魚、今は放つとも生きがたし。身の暇を計りがたくば此の魚を母の許に遣はして今一たび鮮やかなる味をすゝめて、心安くうけ給ひおきていかにもまかりなんと申すに、之を聞く人々、涙を流さずといふことなし。院、聞こしめして、孝養の志、淺からぬを感せさせ給ひて、さま〴〵の物ども馬車に積み給はせて、ゆるされにけり。乏しきことあらば重ぬて申すべきよしをぞ仰せられける。仁明天皇は承和八年二月に佛法崇敬の餘り殺生禁斷の詔勅を發し給ひ、白河天皇も又同じく御信仰の深きにより嚴重に殺生の禁を布き給ひしに然も佛戒は開遮持犯の自由ある聖教の大旨に從はせ給ひて、此の如く殺生禁斷を犯せし孝僧を罪許し給ふたなどは洵に有難いことでは御座らぬか。

生産上の殺生

開門に於ける理殺

德本上人の歌

文殊、釋迦を殺す

佛來三十棒

次に禽獸虫魚を捕り漁ることの家業なる人であらは勿論、開いて許すのである。故に國家の富を増殖するが爲めに遠洋漁業の大事業を行ひ、海獸や海鳥捕獲の大事業などを行ふは今日の日本では最も益々盛にやつて貰はねはならぬ。乍併、惜しきは同じ命なれは慈心に住し慚愧に住して汝是畜生發菩提心とそうかし回願を忘らずして遣つて貰ひたいものである。即ち彼れ禽獸虫魚のあるが爲に家計を立てゝ妻子も養ひ財寶をも得らるゝのであるから、言は彼れ動物は其の人の爲めには大の恩ある生物であるのである。

次に、前來は事殺に就て述べたのだが、茲に理殺といふ殺生を行ふことを一つ勸奬せねはならぬ。

彼の德本上人の歌に、

第一の戒めなれと阿彌陀佛と
殺してやれよ心の鬼を

と詠まれたなどが即ち理殺といふものである。故に智旭の合註に『无明の父を殺し貪愛の母を害す』といひ、善住天子所問經や事理趣經には文殊、劍を揮ふて將に釋尊を殺さんとすることが説いてあると諦忍律師がいふて居らるゝ。魔來三十棒、佛來三十棒などゝ禪宗でいふもの即ち此の理殺をいふたものである。乍併、如來に痛棒三十を喰さうとするやうな理殺は先づ以て凡位では出來損ひの飲呑な仕事だ、まあ大概なら見合すが好からう。其れよりか德本